

日本タンゴ・アカデミー機関誌

# TANGUEANDO EN JAPON

No. 28  
2011

タンゲアンド・エン・ハポン

# TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 28, enero de 2011

日本タンゴ・アカデミー 機関誌

## タンゲアンド・エン・ハポン 第28号 (2011年7月)



ロス・セニョーレス・デル・タンゴの演奏で歌う  
エルサ・リバス (1967年10月10日)  
(写真提供：上田 登氏・山本 雅生氏)

日本タンゴ・アカデミー

## TANGUEANDO EN JAPÓN

第28回 (2011年7月)

(タンゲアンド・エン・ハポン)

## 目次

	頁
会長挨拶 .....	4
日本タンゴ・アカデミーのホームページ開設について .....	飯塚 久夫 5
図解 これがNTAウェブ・サイト .....	山本 幸洋 6
日本タンゴ・アカデミー 2011年上期活動実績 .....	12
アカデミー行事アルバム .....	16
タンゴ・セミナーのプログラム・コメント CLASE DE TANGO (タンゴ教室)	
第73回 「映像でつづるガブリエル・ソリア氏による「日本のタンゴ50年」」	
.....	コメンテーター：飯塚 久夫 20
第74回 「1940年代のタンゴの魅力」 .....	コメンテーター：高場 将美 23
タンゴと日本人 .....	島崎 長次郎 27
第17回「関西リンコン・デ・タンゴ」	
レポート .....	鈴木 忠夫 31
プログラム .....	35
第8回「中部リンコン・デ・タンゴ」	
レポート .....	丹羽 宏 38
プログラム .....	40
神戸発・上田・山本タンゴ写真館 (7)	
「ロス・セニョーレス・デル・タンゴ」 .....	上田 登・山本 雅生 42
〈愛好家インタビュー〉中野 恵正さん .....	聞き手：島崎 長次郎 47
1970年代タンゴ探訪 その4	
セステート・タンゴとセステート・マジョール .....	吉村 俊司 58
タンゴ もう一つの祖国 欧州で活躍したタンゴの使節たち (補足 I) .....	芝野 史郎 59
André y su conjunto (補遺) .....	角田 昭 70
フランチャーニ=ポンティエルのディスコグラフィの補遺 .....	編集部 73
私のタンゴ・データベース .....	佐藤 進 76
アルゼンチン／ウルグアイの古い楽譜コレクションより (7) .....	西村 秀人 82
「オルケスタ・ティピカの歴史」(8) .....	ルイス・シエラ (翻訳) 弓田 綾子 85
日本のタンゴ楽団 (5) .....	蟹江 丈夫 98
アストロリコ20周年 .....	角田 昭 103
アストロリコ四重奏ライブレポート .....	鈴木 忠夫 111
コロールタンゴ日本公演を聴く .....	齋藤 富士郎 113
マエストロもびっくり 大揺れの中野サンプラザホール .....	佐藤 進 117
アルゼンチン・タンゴの夕べ 小松真知子&タンゴクリスタル .....	齋藤 富士郎 118
Espíritu de Tango (タンゴの精霊) .....	古橋 ユキ 119
全国リレー随想 (8) .....	中村 明 125
追悼 マエストロ・エミリオ・バルカルセ .....	高場 将美 131
編集後記 .....	134

Índice

SALUDOS DEL PRESIDENTE DE LA ACADEMIA.....	4
EL INICIO DE LA PÁGINA WEB DE LA ACADEMIA .....	HISAO IIZUKA 5
EL MAPA DEL DETALLE DE LA PÁGINA WEB DE NTA .....	TAKAHIRO YAMAMOTO 6
ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA DEL TANGO EN JAPÓN (De enero a junio de 2011).....	12
ÁLBUM DE LAS ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA .....	16
COMENTARIO SOBRE “CLASE DE TANGO”:	
Vol.73 LOS 50 AÑOS DE LA HISTORIA DEL TANGO EN JAPÓN POR GABRIEL SORIA EN IMÁGENES .....	COMENTARISTA: HISAO IIZUKA 20
Vol.74 EL ENCANTO DE LOS TANGOS DE LA DÉCADA DE LOS 40 .....	COMENTARISTA: MASAMI TAKABA 23
TANGO Y LOS JAPONESES.....	CHOJIRO SHIMAZAKI 27
“RINCÓN DE TANGO” EN EL OESTE No.17	
REPORTAJE .....	TADA0 SUZUKI 31
PROGRAMAS .....	35
“RINCÓN DE TANGO” EN EL REGIÓN CENTRAL No.8	
REPORTAJE .....	HIROSHI NIWA 38
PROGRAMAS.....	40
DESDE KOBE: LAS FOTOS DE UEDA Y YAMAMOTO (7)	
LOS SEÑORES DEL TANGO EN JAPÓN .....	NOBORU UEDA Y MASAO YAMAMOTO 42
ENTREVISTA CON LOS AFIACIONADOS: Sr. YOSHIMASA NAKANO .....	CHOJIRO SHIMAZAKI 47
REVISITANDO EL TANGO EN LOS 70 (4) SEXTETO TANGO Y SEXTETO MAYOR .....	SHUNJI YOSHIMURA 58
EMBAJADORES DEL TANGO EN EUROPA (Apéndice I) .....	FUMIO SHIBANO 59
ANDRÉ Y SU CONJUNTO (Apéndice) .....	AKIRA TSUNODA 70
APÉNDICE SOBRE LA DISCOGRAFÍA DE LA ORQUESTA FRANCINI=PONTIER .....	EL EDITOR 73
MI BASE DE DATOS SOBRE EL TANGO .....	SUSUMU SATO 76
DE LA COLECCIÓN DE VIEJAS PARTITULAS (7) .....	HIDETO NISHIMURA 82
HISTORIA DE LA ORQUESTA TÍPICA (8) .....	Dr.LUIS ADOLFO SIERRA / TRADUCCIÓN DE AYAKO YUMITA 85
ORQUESTAS TÍPICAS JAPONESAS (5) .....	TAKEO KANIE 98
LOS 20 AÑOS DE LA ORQUESTA ASTRORICO .....	AKIRA TSUNODA 103
REPORTAJE DEL CONCIERTO DEL CUARTETO ASTRORICO .....	TADA0 SUZUKI 111
CONCIERTO: ORQUESTA COLOR TANGO EN JAPÓN .....	FUJIO SAITO 113
11 DE MARZO: EL TERREMOTO EN NAKANO SUN-PLAZA HALL DURANTE EL CONCIERTO .....	SUSUMU SATO 117
CONCIERTO: VELADA DE TANGO ARGENTINO POR MACHIKO KOMATSU Y SU “TANGO CRISTAL” .....	FUJIO SAITO 118
ESPÍRITU DE TANGO .....	YUKI FURUHASHI 119
CADENA DE ENSAYOS (8).....	AKIRA NAKAMURA 125
PARA SIEMPRE... MAESTRO EMILIO BALCARSE .....	MASAMI TAKABA 131
ANUNCIOS Y NOTAS DE LA REDACCIÓN.....	134

## 今年が発展的な明るい年に

会長 島崎長次郎

本日はお忙しい中を、全国各地から91名もの会員の皆様にお集まりいただき誠にありがとうございます。1998年に発足いたしました当日本タンゴ・アカデミーも、今日のこの全国会員の集いをもって14年目にはいることになりました。これも一重に会員の皆様の日頃のご支援ご協力があった賜物と、改めて厚くお礼を申し上げます。



さて、昨年この会場では、経理部門で発生した「あってはならない不祥事、につきまして、沈痛な思いで皆様にご報告をし、お詫びと共にその修復についてお誓いをいたしました。この一年間に渡る役員が一丸になった粘り強い説得活動が実り、この件については、このほど完全に回収することができましたことを、まずもってご報告いたします。この間会員の皆様には大変なご心配をおかけいたしました。今後は決してこれを再演することのないよう、役員一同さらに緊張感を持って運営に取り組むつもりでございますので、何卒引き続きご支援を賜りますよう、お願いを申し上げます。

その上で当会の近況について2～3お話をさせていただきます。

① トラブルのあった後だけに脱会される方が多いかと心配をしましたが、意外にもそれはごく僅かで、逆に21名という例年にも増しての新入会者を迎えられたことは、誠にうれしい限りです。後ほどそれらの方がたのご紹介も予定しておりますが、これらの方々を含めて現在会員数は183名となり、念願の200名の大台も間近となりました。

② 念願だったホームページが、若手の山本幸洋さんや阿部修英さんなどの手によっていよいよ完成し、近々オープンになる予定です。これによって当アカデミーからの情報発信力は飛躍的に高まり、タンゴ普及への貢献度が大きく増すことはなにより喜ばしいことであります。後ほどこの会場でご覧いただく予定ですので、是非ご期待ください。

③ 最後は日本タンゴ・アカデミーの地方での活動の件ですが、関西と中部など東京以西の活動はすでに周知のとおり、現地の皆さんの努力でリンコンなどが活発に行われているのに対し、東京以北は札幌と盛岡での集いが各1回行われた以降、残念ながら今まで皆無の状況が続いてまいりましたが、つい半月ほど前に福島会員の佐々木秋雄さんを中心に有志の計らいで、「いわきタンゴの集い」が開催され、東京から黒木皆夫さん清水裕さん、それに私の3名で参加させていただき、皆さんと楽しく懇親をさせていただきました。これを契機にこの秋以降、東北でのアカデミーの絡んだ継続的な集いがもてるよう鋭意取り組んでいきたいものと思っております。

以上、昨今の状況などを申し上げましたが、その上に立って「今年是非発展的な明るい年にしたい」と念願しております。今日は折角の機会ですので、じっくりとご歓談くださり、是非楽しいひと時をお過ごしいただきたいと思います。ありがとうございました。

## 日本タンゴ・アカデミーのホーム・ページ開設について

副会長 飯塚久夫

このたび、NTAのホーム・ページがスタートしました。かねてよりホーム・ページ開設の要望や動きはあったのですが、実際に作るとなると、作成作業は業者に委託するにしても、その内容、デザイン、レイアウトなどはNTA側で決める必要があります。そのためホーム・ページに知見のある会員でそれらをお願い出来るとともに、開設後の運用（内容の更新や追加）を引き受けてくれる人が必要です。

幸い、会員の山本幸洋さん、阿部修英さん、荒井朋子さんがボランティア的に貢献してくれることになり、飯塚を含めこの半年ほど具体案の作成をして来ました。

山本幸洋さんは、現時点のコンテンツの殆どを作成してくれ、荒井朋子さんは最近アルゼンチンを訪問した際、適切な写真まで撮ってくれました。高場将美副会長にはスペイン語のチェックに協力頂きました。そして特に、開設後の運営は阿部修英さんがやってくれております。

内容は、「行事予定」「NTAについて」「おすすめ」「活動内容」「百科事典」「バックナンバー」「アルゼンチンについて」「リンク集」となっていますが、実際には、まだまだ未完成の状態です。とりあえず、「おすすめ」については山本幸洋さん、大岩功さん、鈴木一哉さんのご協力により「本」と「CD」について多少の内容が入っています。今後、吉村俊司さん、阿部朋子さんなどもご協力頂けることになっています。また、「百科事典」は、海江田禎二会員がお作りになったデータベースから例示的にほんの一部を掲載しております。この「百科事典」や「活動内容」はいずれ貴重な記録なども盛り込んで行きたいため、会員でないと見る事が出来ないようアカウント情報（ユーザ名とパスワード）でログインしてもらうようにしてあります。

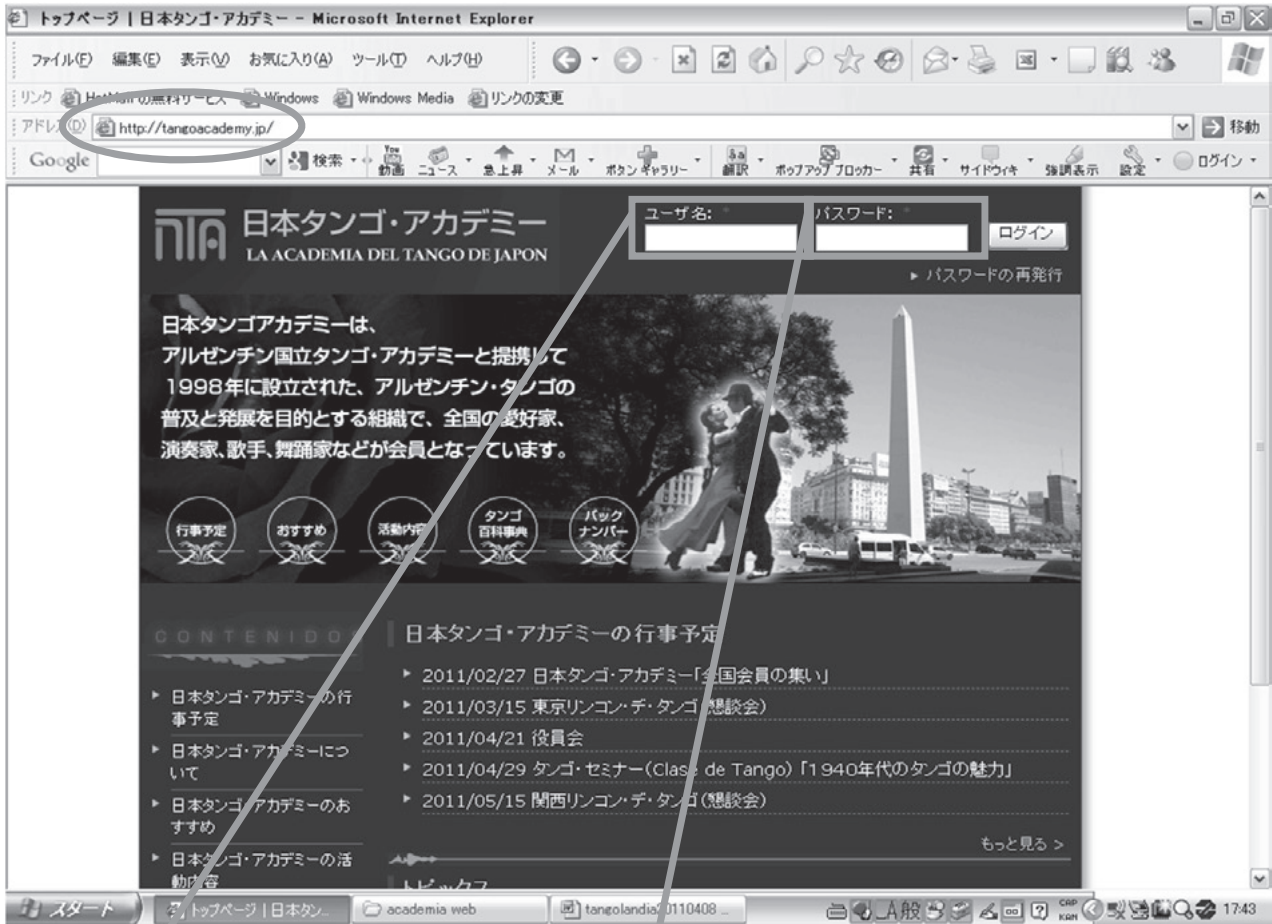
また、単に内容を見るだけでなく、会員相互のインタラクティブなやりとりも考えてはいますが、その運用がいっそう大変なため、当面は実施しておりません。いずれにしても、こうしたホーム・ページは内容の充実と更新が命、そのためには会員諸氏のご協力抜きにはあり得ません。ご自分のホーム・ページとの「リンク」を希望される方はもちろん、「おすすめ」や「百科事典」の充実にご尽力いただける方を歓迎いたします。本号の山本幸洋さんの記事をご覧いただいて、自分も投稿してみようという方は是非とも事務局（飯塚）までお申し出頂けると幸いです。

# 図解 これがNTAウェブ・サイト

作成：山本 幸洋

## さあ、始めよう！

まず、インターネット・エクスプローラー(マックではサファリなど)を起動し、アドレス(URL)に  
http://tangoacademy.jp  
とタイプし、エンターします。すると、以下のようにNTAウェブ・サイトのメイン・ページが表示されます。次にユーザ名とパスワードを記載しログインします。これによって、アカデミー正会員であることが認証され、会員でなければ閲覧できないページにもアクセスできるようになります。



ユーザ名は“NTA〇〇〇”で、〇〇〇は各々の会員番号が入ります。パスワードの初期設定は“chetango”(大文字小文字問わず)です。どなたでも、一番最初のログインは、このパスワードで認証されます。ここまですれば、あとは自在に見たいページにアクセスできます。ログインすると以下のようにシンプルな画面に変わり、無事にログインできたことが判ります。



では、アカウント情報をクリックし、確認してみましょう

# これがNTAウェブ・サイト

## パスワードの変更～セキュリティの保護

初回のログインの時点でのパスワードはあくまでも簡易的なものです。会員としての特権を保護するために、英数字を8文字までで組み合わせた新しいパスワードを、それぞれ設定してください。そうすることで、以降は会員番号と整合するパスワードでしかログインできなくなり、不正利用を防ぐことができます。“編集”ボタンをクリックしましょう。



このようにメールアドレスの確認欄と、パスワードの設定欄が表示されます。メールアドレスは、将来的にメール配信によるサービス向上のための準備とご考慮ください。サイト開設に当たり、会員名簿などで会員にアドレスを公開されている方々には初期設定で記載されています。タンゴ・ロコロカならば、パスワードには“caminito”とか“laboca”とかタンゴにゆかりの深い言葉をつけたいと思いますが、インターネットのセキュリティ観点からしますと、ローマ字と数字の組み合わせ、しかも文字は大文字小文字を組み合わせることが推奨されます。上に示したものは、小文字のみのローマ字と数字を組み合わせた言葉でパスワードを変更したときに表示されるウォーニング(注意事項)です。



無事終了すると、以下のように表示されます。





## いよいよ、閲覧スタート！

行事予定やトピックスなど通達情報はまとめてトップ・ページに表示されます。

コンテンツに即座にアクセスできるワンタッチ・ボタン。会員だけがアクセスできるのは、“タンゴ百科事典”“バック・ナンバー”  
詳細は、下方左列のCONTENIDOSだが、こちらのボタンが実用的



コンテンツの詳細はここにアクセス・ポイントがある。拡大してみると...  
では、各章の詳細をざっと紹介していこう。

CONTENIDOS | 日本タ...

- ▶ 日本タンゴ・アカデミーの行事予定
- ▶ 日本タンゴ・アカデミーについて
- ▶ 日本タンゴ・アカデミーのおすすめ
- ▶ 日本タンゴ・アカデミーの活動内容
- ▶ タンゴ百科事典
- ▶ バックナンバー
- ▶ アルゼンチンについて
- ▶ リンク集

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

開催日時	タイトル
2011/02/27	日本タンゴ・アカデミー「全国会員の集い」
2011/03/15	東京リリコン・デ・タンゴ(懇談会)
2011/04/21	役員会
2011/04/29	タンゴ・セミナー(Clase de Tango)「1940年代のタンゴの魅力」
2011/05/15	関西リリコン・デ・タンゴ(懇談会)
2011/05/24	東京リリコン・デ・タンゴ(懇談会)
2011/07/12	東京リリコン・デ・タンゴ(懇談会)

メイン・ページの記載は最新情報のみ。本項には、今後も積み重ねていく活動が漏れなく記載されるので、アカデミーの活動の歴史が刻まれていく。

現在、未アップ。アカデミーの活動履歴が掲載される。

要望が高いのが、タンゲアンドやタンゴランディアのダウンロード配信で、それに応えるための項目。その方法についての具体的な方法は協議中です。著作権の帰属だけでなく、配信するファイル形式など会員各位の合意をとりつつ進めていく予定にしています。もちろん、各種セミナーと並んで会員の大きな特権が機関誌であるため、会員のみアクセス可能です。

現在、未アップ。アルゼンチン協会のウェブとリンクする予定あり。

現在、未アップ。プロアマ問わず、会員のウェブ・サイトへのリンクなどを掲載予定。

# これがNTAウェブ・サイト コンテンツの詳細1：アカデミーについて

NTA 日本タンゴ・アカデミー  
LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPON

アカウント情報 ログアウト

## 日本タンゴ・アカデミーについて Sobre la Academia del Tango de Japon

ホーム > 日本タンゴ・アカデミーについて

CONTENIDOS

- 日本タンゴ・アカデミーの行事予定
- 日本タンゴ・アカデミーについて
- 日本タンゴ・アカデミーのおすすめ
- 日本タンゴ・アカデミーの活動内容
- タンゴ百科事典
- バックナンバー
- アルゼンチンについて
- リンク集

### 日本タンゴ・アカデミーについて

日本タンゴ・アカデミーは、タンゴを愛好する人々によって1998年に発足した団体で、その研究と普及を目的にさまざまな活動を実施。すでに10余年の実績を重ねてまいりました。この会はタンゴがお好きな方ならどなたでも入会できますので、お気軽にお申し出下さい。ご一緒にタンゴの感動を共有し、ともにタンゴの発展に力を尽くしましょう。

■(主な活動と年間の行事)

- ▶ 全国会員の楽しいセミナー及び懇親パーティー、年1回(通常2月の日曜日)
- ▶ 機関誌発行
  - ◎「タンゴアンド・エン・ハボ」年2回
  - ◎「タンゴランディア」年2回
- ▶ 「タンゴ・ゼミナール」(Clase de Tango)
  - 原則として隔月、東京地区で開催。
- ▶ 「タンゴ談話室」(Rincon de Tango)
  - 東京地区(年5回)
  - 中部地区(四日市市中心で年2回)
  - 関西地区(神戸中心で年2回)

ご入会いただける2種の機関誌が無料で届けられ、東京地区等で行われるタンゴ・ゼミナールも無料でお知らせです(その他の種別については参加費を徴収することもあります)。

■(会費について)

入会金 5,000円

年会費 14,000円(初年度のみ計 19,000円)

(学生の場合は年会費が5,000円となり 初年度のみ計 10,000円)

■(お申し込みについて)

事務局へご連絡いただきましたと、当アカデミーの会則、入会申込書、入会申込書返信用封筒、会費納入用紙を同封いたします。会則の内容をご確認の上、同封の返信用紙で入会金・年会費をお送りください。現在郵便振替以外の方法は受け付けておれませんのでご了承ください。

■郵便振替口座 日本タンゴ・アカデミー 00240-5-85537

■(会費割引制度)

- ◎ 5月～8月末日までのお申し込み＝年会費 10,000円
- ◎ 9月～11月末日までのお申し込み＝年会費 5,000円
- ◎ 12月1日～31日のお申し込みは翌年1月1日からの新規会員として取り扱います。

なお、いずれの場合にも入会金5,000円は必要です。  
途中入会の場合でも、その年度に発行された機関誌・新機関誌は在籍がある限り郵便で送付されます。  
[それ以前のバックナンバーも会員になれば在籍があるものに限り購入可能です] \* 会員CD購入の割引(15～10%)の特典もあります。お問い合わせは下記事務局まで、ハガキ、FAX、E-mailなどでお願いいたします。

日本タンゴ・アカデミー事務局(銀座方)  
〒156-0044 東京都世田谷区赤塚2-32-14-104  
Tel& Fax 03-3324-1989  
E-mail iizuka@kve.biglobe.ne.jp

### 役員一覧および会則

- 2011年度 日本タンゴ・アカデミー 理事および実行委員
- 日本タンゴ・アカデミー会則

行事予定 / 日本タンゴ・アカデミーについて / おすすめ / 活動内容 / タンゴ百科事典  
バックナンバー / アルゼンチンについて / リンク集 / 更新情報

Copyright © 2011 NIPPON TANGO ACADEMY. All rights reserved.

今までは、アカデミー入会時に一度配布されるだけだった会則だが、このようにいつでも閲覧、確認できるようになった。

NTA 日本タンゴ・アカデミー  
LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPON

アカウント情報 ログアウト

## 日本タンゴ・アカデミー会則

制定 1997年8月22日

### 第1章 総則

(名称)

1. 本会は日本タンゴ・アカデミーと称し、スペイン語ではACADEMIA DEL TANGO DE JAPON(ブカリア デル タンゴ デ ハボ)と表示す。

(事務局)

2. 本会の事務局を下記に設置する。  
東京都世田谷区赤塚2-32-14-104(銀座方)

(目的)

3. 本会はアルゼンチン共和国連合タンゴアカデミー(ACADEMIA NACIONAL DEL TANGO)に加盟した。その内規に定められた機関誌(「CORRESPONDENTES」)である。本会は同会誌の精神に基づいて活動を行うが、同会およびその他外に設立される機関誌とは協賛は受けない。独立した機関誌である。
4. 本会はアルゼンチンその他各地から送られるタンゴに関する情報を会員に伝達し、また会員の行ったタンゴに関する調査・研究の成果を内外に知らせる情報活動、および内外会員の親睦活動を通じて会員すべての人生の楽しみの一つであるタンゴの発展をはかることを目的とする。
5. 本会は営利目的の活動を行わず、また会員が本会での活動によって個人に物的利益を享受することを認めない。

### 第2章 会員

(会員)

6. 本会の会員は第3条および第4条に定める本会の目的に賛同し理事を主会員の推薦を受けた者により構成される。

(入会)

7. 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書に記入および推薦者が記入・捺印して事務局に提出し、理事会の入会承認を得るものとする。
8. 本会を退会しようとする会員は所定の退会届を事務局に提出しなければならない。なお、この場合退会の会費等は返戻しない。

(資格喪失)

9. 会員が一年以上会費納入の義務を怠ったとき、または会員が他の団体で、あるいは社会的に認められない活動があった場合に本理事会の決議により会員たる資格を失ふものとする。

### 第3章 組織および役員

(理事および理事会)

10. 本会には役員以上10名以内の理事を置き、理事会を構成して会の業務方針を定める。

(役員)

11. 理事会は互選により会長1名を選出する。会長は理事の中から、副会長2名以内、事務局長1名、その他必要に応じて業務担当理事を委嘱し会の業務を執行せしめる。なお副会長以下は推薦業務は兼任を妨げない。

(理事会の開催)

12. 理事会は会長がこれを招集する。理事会は会長が1/3以上理事を招集することを要する。この場合会長は出席なく理事会を開催し得る。なお副会長以下は推薦業務は兼任を妨げない。
13. 理事会の運営規程は別に定める。

(監事)

14. 本会に監事2名を置く。監事は各理事の業務執行が理事会の定めるところに従って否かを監査し年度末から1ヶ月以内監査結果を理事会に報告する。

(その他の役員)

15. 本会に理事会の決議を経て顧問等の役職を置くことができる。

(任期)

16. 理事および監事の任期は2年とし再選を妨げない。

(青年部)

17. 本会に18歳未満の会員による「青年部」を設け、タンゴ振興に資する活動を行う。

### 第4章 会計

(会費)

18. 本会の会員は所定金額の入会金および年会費を納入する。

(会計年度)

19. 本会の会計年度は毎年1～12月とし、会計担当理事は毎年2月まで前年度の監査を経て前年度の収支・財政の状況を理事会に報告し承認を受けるものとする。

### 第5章 会則の改正

(行状)

20. 本会則は理事会において全理事数の1/3以上の賛成により改正することができる。

(初年度)

- ▶ 初年度の役員には発起人が就任するものとし、その任期は1999年末までとする。
- ▶ 本会則は1997年4月22日から発効する。
- 改正2003年3月24日 第3編
- 改正2007年10月4日 第5編及び第10編
- 改正2009年10月14日 第5編

以下、理事会運営規則、会費規定と続くが、本稿では記載を省略します。

以下、理事、幹事、実行委員、担当の氏名が記載されている。

コンテンツの詳細2：タンゴ百科事典



これは力作。まだ、アンセルモ・アイエタしかアップされていないが、タンゴ要人の詳細なデータと年表形式にまとめられた経歴、活動暦が圧巻です。準備が整い次第、後継もアップしていきます。イメージはウィキペディアに近いもので、現状でも完成度が高い百科ではありますが、これからはアカデミー会員の英知を結集して完璧な資料に仕上げていきましょう。

海江田禎二さんのデータベースから一部だけ、以下のような項目が手元に届いています。随時アップしていく予定です。お楽しみに。

- AIETA, ANSELMO
- ALMA EN PENNA
- BAFFA, ERNESTO
- DONATO, EDGARDO
- FALCON, ADA
- HERREROS, CRISTOBAL
- MAIZANI, AZUCENA
- PIAZZOLLA, ASTOR
- QUIROGA, ROSITA
- SIGÁ EL CORSO
- SIMONE, MERCEDES
- THELMA, LINDA

日本タンゴ・アカデミー LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPON

タンゴ百科事典 Enciclopedia del Tango

Anselmo Aieta

表示 編集

【アンセルモ・アイエタ】

## Anselmo Aieta

主な経歴	バンドネオン奏者、作曲家、指揮者。愛称は“El muchacho de San Telmo”(サン・テルモの若者)、Lagaña(目やに)、”El brujo del bandoneón”(バンドネオンの魔術師)
本名	Anselmo Alfredo Aieta
生年月日	1896年11月5日午前7時15分
生誕地	ブエノスアイレス市San Telmo区のDefensas通り427(Brasils通りとCaseros通りの間)にあった家屋で生まれた。
死去年月日	1964年9月26日
死去地	Bolivar通り1580の自宅

**位置づけ**

1920年から30年にかけて活躍したバンドネオン奏者。音楽教育を受けてはいなかったが、直観的に優れた、独学で身に付けた音楽は、生まれついた豊かな才能を、耳学問により磨きを掛け、学問的な裏付けを備って余りあるものがあった。演奏家としての彼のセンスは際立っていた。特に名曲を数多く発表し、超一流の作曲家だった。驚嘆に値する、そして2度と聴くことのできない、魅惑的で美しいバリエーションを含む即興演奏を弾きこなす能力、そして、あの賞賛すべきバンドネオンの友Eduardo Arolasの影響を明らかに受けている独特なアクセントは優れていた。

<作曲・作詞>

<ディスコグラフィ>

経歴	1896.11.5	0歳	出生。この夫婦には11人の子供が居り、2人はイタリアで生まれ、5人は男の子だった。Eugenio,Ricardo,Salvador,Francisco,そしてAnselmoである。
	1906	10歳	51鍵のコンセルティーナを扱い始めた。その楽器は兄のRicardoが20\$で手に入れたもの。タンゴ”Rodriguez Peña”を最初のレパートリーとしてものにした。
	1908	12歳	家庭が貧しく、学校を辞め、彼は最初、靴磨きを始めた。ついで、メッセンジャーボーイ、さらに新聞売りの仕事を1910年まで続けた。この年にタバコ工場の従業員になり、1915年まで続けた。その後、タバコ工場で5年間働いた。母は息子の靈感の具体化を常に励まし、何とかして、少年Anselmoに、彼の最初の本物バンドネオンをプレゼントした。それは71鍵で、Sarmiento通りのある店に出ており、100\$近くもする高価な楽器だった。休息の時間も惜しんで、独習で演奏法を習得した。"El Tano"ことGenaro Espósitoからバンドネオン奏法を習った。Genaroの指導のほかにも、彼から、左手による、よく知られた得意技の演奏技術を受け継いだ。それに、Luggin Bossiからもいくつか習った。
	1913	17歳	Avellanedaのカフェ”La Buseca”で、彼はバンドネオン奏者Graciano De Leonのお手伝いをした。この集団はトリオ編成で、ピアニストの”Chino”ことAgustín Bardi,もうひとりRicardo González ”Muchila”である。彼は後に名の知られたバンドネオン奏者となったが、その頃はギターを弾いていた。彼は、又別のグループに参加していた。Genaro Espósitoの小編成楽団である。その頃、彼は父の家の近くにあった居酒屋によく通っていた。Piedras通りとCochabamba通り角にある店で、”Café de los payadores”という名前だった。その店は、吟遊詩人を名乗る人々がよく集まったためにそう呼ばれており、José BetinottiやGanino Ezeiza, Antonio Caggianoといった詩人がよく来ていた。そして、タンゴの好きな人々(Rafael TuegolsやTano Genaro Espósito)と交流を深めた。この頃から、彼はファンからAietaとかAyetaと呼ばれるようになった。彼はここでバンドネオンの虎とEduardo Arolasが演奏しているのに出会った。Arolasはトリオで演奏しており、他の2人は、バイオリニストDavid ”Tito” Roccatagliattaと、ピアニストのÁngel Pastoreだった。AietaはArolasにすっかりまね込み、熱を入れて彼の演奏を聴きこむために、その店に毎夜入り浸った。そして、この二人は固い友情で結ばれた。Arolasは別の仕事をするようになった時、バンドネオンのポジションをAietaにゆだねることになった。また、”Botefogo”でデビューし、Agustín Bardi(ピアノ)、Eduardo Monelos(バイオリン)とトリオを組んだ。

# これがNTAウェブ・サイト

## コンテンツの詳細3：アカデミーのおすすめ



参考となる書籍、ディスク、映像などを紹介します。本欄は、NTAの会員拡大も目的のひとつし、会員でなくともアクセスできます。私たち会員は、世代を超えた集団ですが、やはり若いファン層を獲得できていません。その大きな原因のひとつがインターネットによる情報収集があまり簡便でないことと、ガイドと呼べる書籍や初めてタンゴを聴こうとしているリスナーへの向けた定番選などお手軽な情報が多くないことに尽きると考えました。そこで、音楽を聴く層が厚い30〜50歳代を主要なターゲットと考え、その層へアピールできるアイテムを紹介していきます。

### 日本タンゴ・アカデミーのおすすめ

- 本
- CD/レコード
- DVD/ビデオ



書籍、アルバムあるいはビデオなどは、聴くもよし、踊るもよし、いろいろな切り口の定番が考えられると思います。その多様性に応えるように企画を練っていきたく考えています。

Artist	Album Title	Label	Year	Notes	Format	NTA ID	
Alumada	Julio	Pa' Que Sepan Como Soy		私の真実	ポニー・レコード	25MMA0418	
Buffa	Eraesto	Bienvenido Bandonazo	Polydor	2387036			
Berlitz	Hugo	Tango Setentaytres	Music Hall		日本フォノグラム	SFX-6007	
Berlingieri	Oswaldo	Taneos	Music Hall	13050	月下のコンサート	日本フォノグラム	SFX-5134
Bianchi	Daniel	Sabor a Buenos Aires	Odeon	LD0175	ブエノスアイレスの顔	東洋楽工芸	OP-80109
Odo	Miguel	Jose Leonald	Tonadico	TON-1028	不滅のマエストロ	フイルムス	FL5002
Colangelo	Jose Leonald	Taneos	Tonadico	TON-1028	不滅のマエストロ	フイルムス	FL5002
Di Sarri	Carlos	Nubes de Humo	Philips		インスピレーション	ビクター音楽産業	SWX-7034
Diaz	Hugo	En Buenos Aires	Tonadico	STON-7002X	タンゴを私に唄う	日本コロムビア	YS-713-0
Fabian	Nestor	Yo Can to Taneos	Odeon	LBO-77	天候のタンゴ	CBS/SONY	ECB-114
Federico	Leopoldo	Tango Puro	OBS	9031	秋のテーマ	日本コロムビア	YS-549-0
Francini	Enrique Mario	Su Sonido del 70	OBS	9035	タンゴ エレガント	日本コロムビア	YS-549-0
Fresedo	Oswaldo	En Estereo	OBS	9035	タンゴ エレガント	日本コロムビア	YS-549-0
Garcia	Carlos	Buenos Aires a Todo Tango	EMI	8440			
Gariboli	Ricard	Mensajes de Tango	RCA Victor	AVL-3791			
Goyenache	Roberto	Mensajes de Tango	RCA Victor	AVL-3791			
Susana	Graciela						
Juarez	Ruben	Escuela de Tango	Odeon	8501			
Lanoue	Yulhe	Recital de Musica Argentina	Global	GSLP-10970			
Lavia	Ricard						
Libertella	Jose						
Luque	Virginia	La Estrella de Buenos Aires	Microfon		メルセベの鐘	ポニー・レコード	MPI-483
Manzi	Oswaldo	Taneos	Microfon		カルロス・ディアス・リリの真実	ポニー・レコード	SMP-1430
Marcini	Nestor				真実のタンゴ	ビクター音楽産業	WGP-101
Mederos	Rodolfo	Fuera de Broma	Trova	DA-5004	踊らざるタンゴ	東洋楽工芸	OP7536
Merkko	Tita	Tango en el Alma	Odeon				
Mora	Mariano						
Mosconi	Juan Jose						
Nichiale	Reynaldo	Tango de Elquinta	Microfon		華麗なるタンゴ	ポニー・レコード	SMP-1430
Piazzolla	Astor	Teatro Regina	RCA Victor	AVL5-3924	ブエノスアイレスの四季・ア・ラ・ル・ピアノ・音楽産業	RCA-5154	
Piazzolla	Astor	Live in Wien	Messidor	118946	ライブ・ウィーン・アン・ア・ラ・ル・ピアノ・音楽産業	28MM0495	
Piro	Oswaldo	Pho y su Orquesta Tipica	Philips	821149L			
Poelzer	Armando	El Hombre Que Fue Ciudad	Music Hall	13144			
Puebles	Oswaldo	La Cena del Tango	Philips		アルゼンチン・タンゴの華	フイルムス	FL-5079
Stamena	Oswaldo	Phonodiscs	RCA Victor	AVL5-3924	毎年のための	ポニー・レコード	SMP-1430

参考:現在検討中のアルバム・リスト



## 日本タンゴ・アカデミー 2011年度上期活動実績

- 第14回NTA全国会員懇親会が、2月27日（日）12時40分から「ホテル 銀座ラフィナート」において89名の参加者を得て盛大に開催されました。席上、島崎会長と杉山会計理事より2009年来の「財政問題」が完全に解決されたことの報告がありました。また新入会員の紹介と新入会員自身による挨拶もありました。更に、山本 幸洋実行委員から今度新たに立ち上げたNTAホームページの紹介もありました。
- タンゴ・セミナー（CLASE DE TANGO）
  - ◎ 第73回セミナー：2月27日（日）、「ホテル 銀座ラフィナート」において、NTA全国会員懇親会に先だて、午前11時から午後12時30分まで、飯塚 久夫氏から「映像でつづるガブリエル・ソリア氏による～「日本のタンゴ50年」」というタイトルでのお話と、併せてマリーア・デ・ラ・フエンテ、エルサ・リバス、ファン・カルロス・ゴドイによるアルゼンチン建国200周年記念CDの録音映像の紹介もありました。出席者は91名でした。
  - ◎ 第74回セミナー：4月29日（金）「東医健保会館」において、午後1時30分から高場将美氏による「1940年代のタンゴの魅力」と題するお話がありました。日本のタンゴファンにとっては兎角なじみが薄い1940年代に焦点を当て、「民衆のダンス熱中時代」、「詩の心を持ったメロディ」、「カリスマをもったスター・アーティストたち」という切り口で、高場氏の豊かな知識と音楽的素養に基づいた、大変勉強になるお話でした。出席者は会員52名、ビジター1名の計53名でした。また東日本大震災被災者への義援金を募りました。拠出総額は27616円でした。
- 特別セミナー  
6月14日（火）に予定されておりました特別セミナー「エドゥアルド&グローリアの見たタンゴの歴史50年」は、チリのビジェウエ火山の噴火の影響でブエノス・アイレスのエセイサ空港が一時的閉鎖になり、エドゥアルドとグローリアの両氏の日本到着が予定より大幅に遅れることになったため、結果的に中止になりました。しかしその後遅れて到着したエドゥアルドとグローリア両氏の強い希望と（株）ラティーナの本田社長のご尽力により、急遽6月23日（木）19：00から東京都渋谷区広尾1-3-18「恵比寿REV Cセミナールーム」において特別セミナーが開催されることとなりました。急に決まったことなので参加者は首都圏近傍在住者にならざるを得ませんでした。それでも数十名の参加者を得て成功裡に終わりました。このセミナーの主催者は厳密には（株）ラティーナですが、内容的にはアカデミーの活動に密接につながっていますので、ここに報告しました。セミナー開催に関して本田社長を始め（株）ラティーナのスタッフの方々のご尽力に感謝の意を表します。
- リンコン・デ・タンゴ（会場：東京原宿「原宿クリスティー」）
  - ◎ 1月20日（木）：NTA会員49名、ビジター4名、計53名の参加を得て会はずもながら盛況でした。コメンテーターの佐藤昌叶さんは「混血の音楽？ タンゴ」という独特の切り口から白人、先住民、黒人の混血者をタイトルに含むタンゴを社会学的データと共に紹介され、高橋研二さんは「ベサメ・ムーチョ物語」と題して4種類のベサメ・ムーチョの演奏を豊富な蘊蓄を交えて紹介されました。またバンドネオン奏者の仁詩さんとハーモニカの山下よし子さんが飛び入り

参加・演奏されました。最後にグロリア米山さんが河内敏昭さんのギター伴奏で4曲美声を披露されました。

- ◎ 3月15日（火）：東日本大震災の直後で、交通機関の運休や間引き運転の影響で開催が危ぶまれましたが、島崎会長の熱意で何とか開催にこぎつけました。出席者は24名と少数でしたが、杉山滋一さんの「麗しき弦の調べによせて、ヴァイオリニスト列伝」、島崎会長の「ラ・クンパルシータあ・ら・かるて」、そして最後は峰万里恵さんの歌で大変盛り上がった会になりました。閉会后、被災者への義援金を募りました。拠出総額は27250円でした。ご協力、有難うございました。
- ◎ 5月24日（火）：今回のコメンテーターは清水 裕さんと田原陽次郎さんで、清水さんはハーモニカによるタンゴ演奏を集めたプログラム、田原さんはレコード業界に勤務された経験を踏まえてのプログラムと、お二人とも大変ユニークな切り口のお話でした。それに続いて会員有志が持ち寄ったLPレコードによるチャリティ抽選会（空籤なし）が開かれ、参加者一同大いに楽しみました。チャリティ拠出金総額は51065円でした。参加者は52名（会員51名、ビジター1名）でした。

### ● 関西リンコン・デ・タンゴ

第17回関西リンコン・デ・タンゴは2011年5月15日（日）、神戸三宮のサロン・ド・あいりで開催されました。参加者は会員17名、ビジター16名、計33名でした。プログラムは山田建雄さんの「映像によるタンゴ」、富田 稔さんの「東ヨーロッパのタンゴ」、圓尾かほるさんの「私の好きなタンゴ」、永田 保さんの「F. ロムート楽団RCAビクトル期の演奏スタイルの変遷を聴く」に続いて、舩松伸男さんのバンドネオンソロによるタンゴメドレーがあり、最後に丹羽 宏さんによる「双頭の指揮者をいただく演奏グループ」で締めくくられました。詳細は本号所載の鈴木忠夫さんのレポートをご参照ください。また東日本大震災義援金として10000円のご寄付をいただきました。

### ● 中部リンコン・デ・タンゴ

第8回中部リンコン・デ・タンゴは2011年4月17日（日）、午後1時より三重県四日市市のライブ・カフェ「フルハウス」において開催されました。参加者は会員16名、ビジター27名、合計43名でした。プログラムは早川健太郎さんの「ピアノの魔術師ロドルフォ・ピアジの音源を求めて」に始まり、それに続いて「春日井邦夫とトリオ・ポルテーニョ」によるミニ・ライブがあり、最後は西村秀人さんによる「バンドネオンの名手たちによる珍しい音源を集めて」で締めくくりとなりました。詳細は本号所載の丹羽 宏さんのレポートをご参照ください。

### ● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」27号が1月に発行されました。

### ● 副機関誌「タンゴランディア」22号が4月に発行されました。

### ● 会員動静

### ● 理事会・役員会

- \* 1月26日（水）：事務局から新入・退会者の報告があり、その結果、現在会員数は180名になったと報告がありました。今回の主な議題は2月27日のセミナーとそれに続く全国会員懇親会の企画でした。その他、恒例の議題として会計入出金状況、東京リンコン・デ・タンゴの報告と次回予定、などと共にホームページ作成進捗状況、テレビ放送関係報告などがありました。
- \* 3月10日（木）：前回に引き続き新入・退会者の報告があり、それに続き会計入出金状況、全

国会員懇親会の成果と反省、次回東京リンコン・デ・タンゴ及びタンゴ・セミナーの計画、本年度後援行事などにつき討議しました。

- \* 4月21日（木）：入退会者状況の報告に続き、アルゼンチン建国200周年関連記念CDの頒布状況と会計入出金状況の報告がありました。また5月24日の東京リンコンの計画を討議し、次回東京リンコンに日程を7月12日（火）と決定しました。更に6月14日麹町セルバンテスホールで開催予定の特別セミナー「エドゥアルドとグロリアによるタンゴの歴史と魅力」の運営について討議しました。
- \* 5月30日（火）：入退会者状況の報告に続き、当アカデミーが募った東日本大震災義援金の集計報告がありました。詳細は末尾の囲み記事をご覧ください。その他に、セミナーと東京リンコンの報告と予定、当アカデミー主催のカナロ来日50周年記念特別セミナーと後援諸行事の報告がありました。

### ● 編集会議

- \* 1月26日（水）：役員会に先立って編集会議を開き、機関誌の今後の編集企画について討議しました。今年はフランシスコ・カナロ来日公演50周年に当たるので、その記念企画の進め方が中心議題でした。
- \* 3月10日（木）：役員会に先だって編集会議を開き、主・副機関誌の編集進行状況、フランシスコ・カナロ来日公演50周年特集号企画について討議しました。またその他の企画ものの進め方についても討議しました。
- \* 4月21日（木）：役員会に先だって編集会議を開き、主・副機関誌の編集進行状況の報告と今後の編集企画について討議しました。
- \* 5月30日（火）：役員会に先だって編集会議を開き、主機関誌の編集進行状況の報告に続き、機関誌執筆者の候補の人選について話し合いました。

\*\*\*\*\*

### — 記事訂正 —

本誌27号の「特別タンゴ・セミナー <日本のタンゴ50年>」で使用した写真の説明の中で「アルゼンチン大使館マルタ代理大使」とあるのは正しくは「マルタ・ガブリエローニ駐日アルゼンチン共和国代理大使」とすべきでした。ここにお詫びと共に訂正させていただきます。

(編集部)

\*\*\*\*\*

# 東日本の大震災に対する義援金

去る3月11日に発生した東日本の大震災に対し、当アカデミーとして数次に亘り義援金の募集活動を行ってきましたが、5月のリンコンをもってひとまず区切りをつけ、下記により、先ごろ「日本赤十字社」を通じて被災地にお届けしましたので、ご報告し、改めて皆様のご協力に対し厚くお礼を申し上げます。

## <活動内容>

3/15	東京リンコン (原宿クリスティー)	27,250	円
4/29	セミナー (信濃町東医健保会館)	27,616	円
5/15	関西リンコン (神戸三宮サロン・ど・あいり)	10,000	円
5/24	東京リンコン (原宿クリスティー)	51,065	円*
	小計	115,931	円
	当アカデミーからの拠出	34,069	円
	<b>合計</b>	<b>150,000</b>	<b>円</b>

\* = LPレコードのチャリティー抽選会。提供者12名 (飯塚久夫、大澤 寛、小林謙一、佐藤進、杉山滋一、島崎長次郎、高橋研二、田原陽次郎、西川 薫、脇田富水彦、宮本政樹、福川靖彦)。なお当日はこれとは別に会場の「原宿クリスティー」のマスター、グロリア米山さんと欠席された山本久子さんから義援金の提供がありました。

振込金受取書 (兼振込手数料受取書)		お振込指定日	平成	23	年	06	月	07	日
銀行名	三井住友	支店名	銀座						
預金種目	1.普通 4.貯蓄 2.当座 9.その他	金額	7150000						
お受取人	日本赤十字社 様								
ご依頼人	日本タンゴ・アカデミー 様								
ご住所	東京都世田谷区赤堤 2-32-14-104 (飯塚方)								
お振込手数料	消費税込手数料額 株式会社 三井住友銀行 23.6.1								

このたびは三井住友銀行をご利用いただきまして、誠にありがとうございました。今後とも引き続きお引き立て賜りますよう、お願い申し上げます。お振込みは速くて便利な自動サービス機をご利用ください。現金でのお振込みは、平日 午後6時までお取り扱いいたします。キャッシュカードでのお振込みは、平日6時以降、土・日曜日、祝日もお取り扱いいたします。(一部店舗を除く)

振込依頼書に記載相違等の不備があった場合には、照合等のために振込みが遅延することがあります。通信機器、回線の障害または郵便物の遅延等やむを得ない事由によって振込みが遅延することもありますのでご了承ください。

振込金小切手 印紙200円  
振込金手数料が3万円未満非課税 (払戻請求・口座振替) 非課税



## <2011年NTA全国会員懇親会特集>

2011年2月27日



島崎会長の挨拶（詳細は本号4頁参照）



司会する飯塚副会長



杉山理事による会計報告（\*）



齋藤理事の音頭で乾杯（\*）

（\*）撮影：吉澤義郎氏



新入会員の紹介（\*）



延岡市から参加の野村氏ご夫妻



大阪市から参加の  
舩松伸男氏の挨拶（\*）



いわき市から参加の  
佐々木秋雄氏の挨拶（\*）



函館市から参加の  
上村要氏の挨拶（\*）

（\*）撮影：吉澤義郎氏



埼玉県三芳町から参加の  
櫻井征夫氏の挨拶（\*）



若手会員代表、田中輝氏（東京都）  
の挨拶（\*）



八代から参加の野口義征氏の挨拶（\*）



挨拶するグロリア米山さん、  
左は来賓のルシアさんとご令嬢



峰万里恵さんの挨拶

（\*）撮影：吉澤義郎氏



会場風景



ホームページの説明をする山本幸洋実行委員



大澤理事による中締め挨拶



丹羽理事の音頭で一本締め（\*）

（\*）撮影：吉澤義郎氏



タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

# Clase de Tango

第73回タンゴ・セミナー

2011年2月27日

## 映像でつづるガブリエル・ソリア氏による 「日本のタンゴ50年」

コメンテーター：飯塚 久夫

2011年2月27日（日）、日本タンゴ・アカデミーの全国懇親会に併せた定例のセミナー（Clase de Tango）は、アルゼンチン国立タンゴアカデミーの第一副会長ガブリエル・ソリア氏を招聘して昨年10月に行った「日本のタンゴ50年」を再現しようというものでした。というのは、昨年10月は日本アルゼンチン協会との共催で、実に168名もの方に参加頂いたのですが、地方にお住まいの方には折角のセミナーをご覧になれなかった方が多いため、会員の皆様が全国からおいでになるこの機会に再度実施しようということになったのです。

実は、ソリア氏のセミナーは、一昨年12月にブエノスアイレスで行われた表記セミナーにたまたま訪壱中の本田健治会員（ラティーナ社社長）が参加し、大変貴重な内容だったとのことだったので、ソリア氏の来日を依頼して実現したものです。本番では2時間以上の内容でしたが、今回は飯塚がその内容を約1時間に抜粋して実施しました。

添付のプログラムはソリア氏の内容そのものですが、この中から

- \* ファン・カナロの来日模様
- \* エンリー・バレストロ、アルフレッド・マルクッチのインタビュー
- \* マリア・デ・ラ・フエンテの「ラ・クンパルシータ」
- \* フランシスコ・カナロの来日映像
- \* エドゥアルドとグローリアの活躍
- \* レオポルド・フェデリコの特別演奏「カミニート」
- \* ブエノスアイレスのオルケスタ・ティピカ東京

\*藤沢嵐子と阿保郁夫

\*アルゼンチン建国200周年記念特別CDの録音模様

(マリア・デ・ラ・フエンテ、エルサ・リーバス、ファン・カルロス・ゴドイ)

などをご覧頂きました。

インタビューなどの通訳は高場 将美副会長にいつもながらお世話になりました。

今後とも従来のタンゴ研究的なセミナーも続けながら、時にはこうしたタンゴ史における貴重な映像・音源などの鑑賞と記録も行っていきたいと考えております。



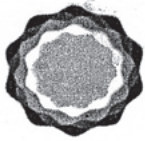
コメンテーターの飯塚 久夫氏

会場風景



# 50<sup>~</sup>AÑOS del TANGO de JAPON

## ~日本のタンゴ 50 年~



200 AÑOS  
BICENTENARIO  
ARGENTINO

アルゼンチン国立タンゴアカデミー

第一副会長 ガブリエル・ソリア

Gabriel Soria

1ro Vicepresidente de ACADEMIA NACIONAL del TANGO

(順番変更があります。ほとんどは未公開映像および写真を使用します。)

1. ルイス・アルポスタ Luis Alposta (日本のタンゴ研究の第一人者)の言葉
2. フロリンド・サッソーネとエドゥアルド&グローリア  
Florindo Sassone, Eduardo y Gloria
3. マリア・デ・ラ・フエンテ Maria De La Fuente (初来日歌手)のラ・クンパルシータ  
“La Cumparsita”
4. フアン・カナロ Juan Canaro 1954 (初来日楽団)の思い出 エンリー・バレストロ、  
アルフレッド・マルクッチ Alfredo Marcucci
5. フランシスコ・カナロ楽団の貴重映像 (東京新宿コマ劇場 1961) Francisco Canaro
6. レオポルド・フェデリコの特別演奏 Leopoldo Federico
7. カルロス・ロッシ Carlos Rossi (ホセ・バッソ楽団来日 1970 メンバー唯一の生存者)
8. マリアノ・モーレスの言葉 Mariano Mores
9. ロベルト・アルバレス Roberto Alvarez (O・プグリエーセ楽団最後のバンドネオン)
10. フアンホ・ドミンゲス Juanjo Dominguez の演奏
11. オスバルド・ピーロ Osvaldo Piro
12. ホセ・コランジェロ Jose Colangelo
13. タンゴ・フェスティバル模様 Presentacion Festival
14. 藤沢嵐子 Ranko Fujisawa、阿保郁夫 Ikuo Abo とオルケスタ・ティピカ東京  
Orquesta Tipica Tokyo (ブエノスアイレスでの映像)
15. フランシスコ・カナロ楽団来日時のフロンディシ Frondizi 大統領
16. タンゴ・アルヘンティーノ TANGO ARGENTINO
17. エクトル・バレラ楽団 Hector Varela
18. フアン・ダリエンソ楽団 (アルベルト・エチャグエ)の“私の日本”  
Juan D'Ariennzo (“Mi Japon” Alberto Echague 1967)

アルゼンチン建国200周年記念CD(限定3枚組セット)のスタジオ収録映像

19. マリア・デ・ラ・フエンテ Maria De La Fuente
20. エルサ・リーバス Elsa Rivas
21. フアン・カルロス・ゴドイ Juan Carlos Godoy



タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

# Clase de Tango

第74回タンゴ・セミナー

2011年4月29日

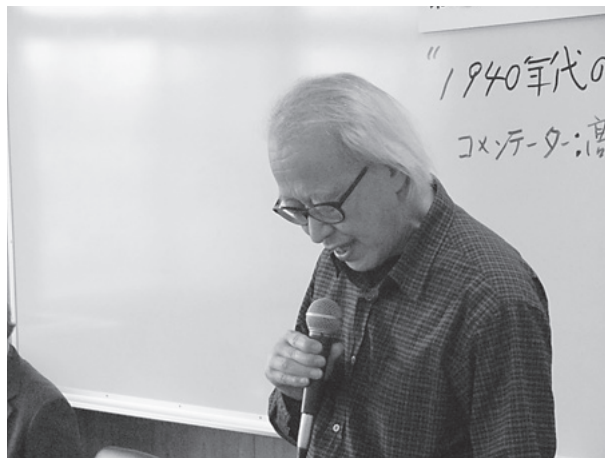
## 1940年代のタンゴの魅力

コメンテーター： 高場 将美

### 都会的なコンパース！ 民衆のダンス熱中時代

1940年代のタンゴ隆盛をもたらしたのは、1930年代後半に登場したフワン・ダリエンス楽団の、スピードをもって力強いリズムの快感だった。後年のことだが、ダリエンス自身は「タンゴに必要なのは、compás (的確な律動)、polenta (腕力の強さ)、matiz (強弱の表情づけ) ——ただ。それだけだ！」と言っている。この3要素を極端にまで追求(?)した演奏スタイルは、他のすべての楽団に絶大な影響を与えた。

このコンパースが(当時の)若者たちの心を取りこにし、タンゴのダンスは、かつてない多数のファンを獲得した。



コメンテーターの高場 将美氏

#### 1. ノ・ミエンタス (嘘をつかないで)

*No mientas (Héctor Marcó - Héctor Varela / Alfredo Mario Láttero)*

アダ・ファルコーン (歌) フランシスコ・カナーロ楽団

Ada Falcón / Francisco Canaro

(1938年録音)

#### 2. ノ・ミエンタス (嘘をつかないで)

*No mientas (Héctor Marcó - Héctor Varela / Alfredo Mario Láttero)*

フワン・ダリエンス楽団 アルベルト・エチャージェエ (歌)



- Juan D'Arienzo / Alberto Echagüe** (1938)
3. コリエンテス通りの悲しみ  
**Tristezas de la calle Corrientes (Homero Expósito - Domingo Federico)**  
 アニーバル・トロイロ楽団 フィオレンティーノ (歌)
- Aníbal Troilo / Fiorentino** (1942)
4. タンゴはこうして踊るもの **Así se baila el tango (Marvil - Elías Randal)**  
 リカルド・タントゥーリ楽団 アルベルト・カステイージョ (歌)
- Ricardo Tanturi / Alberto Castillo** (1942)
5. 日曜日のダンス・パーティ  
**Bailongo de los domingos (Francisco García Jiménez - Óscar Arona)**  
 ルーシオ・デマーレ楽団 ラウール・ベローン (歌)
- Lucio Demare / Raúl Berón** (1943)

### 新感覚の歌詞——詩の心をもったメロディ

タンゴを歌として聴かせることは、1910年代なかばに始まった。ひとり芝居の男のセリフのように、惨めな境遇や孤独な心を物語る内容だった。最初のうちは、多くの場合、まずメロディがあって、あとから歌詞をはめていた。

大部分の曲は男女関係のドラマをうたったけれど、その他のテーマ——親子の情愛や友情、ブエノスアイレスの人間や風物への愛情、失われた時代へのノスタルジーなど——も、1920～30年代にすでにタンゴにうたわれていた。

1940年代の特筆事項——①まったく新しい感覚をもった作詞家・詩人オメーロ・エスポーシトの登場！ ②作詞家と作曲家の、より緊密な共同創作！

6. 口笛を吹きながら  
**Silbando (José González Castillo - Cátulo Castillo / Sebastián Piana)**  
 カルロス・ガルデル (歌) **Carlos Gardel** (1930)
7. タンゴの街 **Barrio de tango (Homero Manzi - Aníbal Troilo)**  
 ネリー・オマール (歌) **Nelly Omar** (1942)
8. チェ・バンドネオン  
**Che bandoneón (Homero Manzi - Aníbal Troilo)**  
 アニーバル・トロイロ (バンドネオン) / アルベルト・マリーノ (歌)  
**Aníbal Troilo / Alberto Marino** (1958)
9. 心のコンパースで  
**Al compás del corazón (Homero Expósito - Domingo Federico)**  
 ミゲール・カロー楽団 ラウール・ベローン (歌)  
**Miguel Caló / Raúl Berón** (1942)
10. 亜麻の花 **Flor de lino (Homero Expósito - Héctor Stamponi)**  
 グスターボ・ノチェッティ (歌) / ネストル・バス (バンドネオン)

- Gustavo Nocetti / Néstor Vaz** (1996)
11. 灰色の昼下がり  
*En esta tarde gris (José María Contursi - Mariano Mores)*  
 フーリオ・ソーサ (歌) / 指揮：レオポルド・フェデリーコ  
**Julio Sosa / Leopoldo Federico** (1963)
12. 最後の酔い  
*La última curda (Cátulo Castillo - Aníbal Troilo)*  
 ロベルト・ゴジエネーチェ (歌) / アストル・ピアソーラ (バンドネオン)  
**Roberto Goyeneche / Ástor Piazzolla** (1982)

## さまざまな個性、カリスマをもったスター・アーティストたち

1940年代は、オルケスタ・ティピカ（歌手が必ず加わり、最低でも10人編成）の全盛時代。第一線のアーティストの典型的な1日は——正午からラジオ放送の公開スタジオで演奏……午後5時くらいからのベルムー（食前酒）タイムは、喫茶店・カフェなどに出演……夜はダンスホール、キャバレーで演奏。深夜すぎ、ときには早朝近くまで。

このような盛況、たくさんの楽団の競い合いのなかで、それぞれに熱狂的なファンがついて、放送局やナイト・スポットへ「追っかけ」をしていた。

なお、1910年代からだか、タンゴ楽団のレコードは、主として、家庭などでのダンスに使うために売れた。ラジオをつければ1日中どこかでタンゴが流れていたもので、ただ聴くためには蓄音器は必要なかったようだ。タンゴ歌手のほとんどは貧しい家の子どもだったので、レコードはめったに聴いたことがなく、ラジオでかかるガルデールの歌に魅せられて歌いはじめている。

1. カルトン・フナーオ（指名手配）  
*Cartón junao (Carlos Waiss - Héctor Varela / Juan D'Arienzo)*  
 フワン・ダリエンソ楽団 アルベルト・エチャージェエ (歌)  
**Juan D'Arienzo / Alberto Echagüe** (1947)
2. 乗合い馬車のラッパ  
*El cornetín del tranvía (Armando Tagini - Oscar Arona)*  
 アンヘル・ダゴステイーノ楽団 アンヘル・バルガス (歌)  
**Ángel D'Agostino / Ángel Vargas** (1943)
3. ボヘミアンの魂  
*Alma de bohemio (Juan Andrés Caruso - Roberto Firpo)*  
 フランチーニ＝ポンティエール楽団 アルベルト・ポデスター (歌)  
**Francini-Pontier / Alberto Podestá** (1949)
4. 明日は船出  
*Mañana zarpa un barco (Homero Manzi - Lucio Demare)*  
 カルロス・ディサルリ楽団 ロベルト・ルフィーノ (歌)  
**Carlos Di Sarli / Rolberto Rufino** (1942)

5. チケ *Chiqué (Ricardo Luis Brignolo)*  
 オスマール・マデルナ楽団 Osmar Maderna (1946)
6. ファロール (街灯)  
*Farol (Homero Expósito - Virgilio Espósito)*  
 オスバルド・プグリエーセ楽団 ロベルト・チャネール (歌)  
 Osvaldo Pugliese / Roberto Chanel (1943)
7. たぶん彼女の声だろう  
*Talvez será su voz (Homero Manzi - Lucio Demare)*  
 ルーシオ・デマーレ楽団 ラウール・ベローン (歌)  
 Lucio Demare / Raúl Berón (1943)
8. エン・ウン・フェカ (とあるカフェにて)  
*En un feca (anónimo, ¿1924?)*  
 エドムンド・リベーロ (歌) Edmundo Rivero (1975)
9. 下町のロマンス  
*Romance de barrio (Homero Manzi - Aníbal Troilo)*  
 フロレアル・ルイス (歌) / 編曲指揮：オスバルド・レケーナ  
 Floreal Ruiz / Osvaldo Requena (1972)
10. タンゴの痛み *Dolor de tango (Ítalo Gianetti - Carlos Viván)*  
 フィオレンティーノ (歌) / 指揮：アストル・ピアソーラ  
 Francisco Fiorentino / Ástor Piazzolla (1947)
11. ネグラージャ *Negracha (Osvaldo Pugliese)*  
 オスバルド・プグリエーセ楽団 Osvaldo Pugliese (1948)
12. オルランド・ゴニ *Orlando Goñi (Alfredo Gobbi)*  
 アルフレード・ゴビ楽団 Alfredo Gobbi (1949)



会場風景

## タンゴと日本人

----- “哀愁”を絆に -----

島崎長次郎

タンゴは19世紀の末ごろ、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスの下町の船着場の周辺で生まれたとされる。地球の真裏にあるそんな遠い国の音楽を、日本人はなぜか昔からことのほか愛することでよく知られている。1961年のフランシスコ・カナロ以降今日まで、毎年アルゼンチンからのタンゴ楽団の来日は後を絶たず、そのすべてが熱狂的に迎えられ、演奏会場は常に感動の渦で包まれる。このアルゼンチン・タンゴの弟分になるヨーロッパ生まれのコンチネンタル・タンゴも例外でなく、アルフレド・ハウゼやマランドなども来日が決まるとチケットはたちまちにしてソールド・アウトになってしまう。またタンゴ・レコードの鑑賞



をメインにした愛好団体にいたっては全国津々浦々に無数に存在し、いずれもがその魅力に陶醉している。これはまさにアルゼンチンに次ぐ第2のタンゴ愛好国以外のなにものでもない。

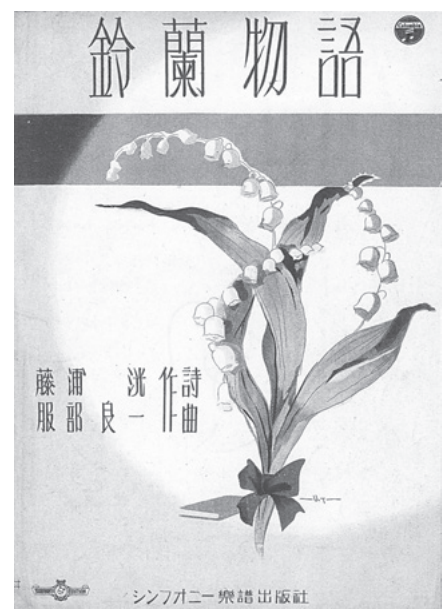
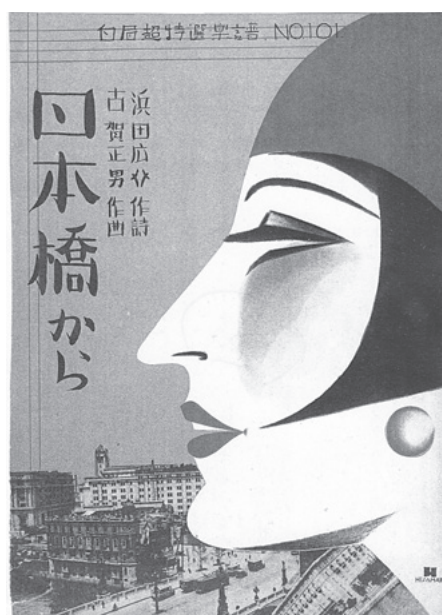
こういった現象はいったいどこからくるのだろうか。それを解くカギ、それはタンゴの秘めているセンチミエント（感情、情趣、心情）、つきつめるとそこに漂う＜哀愁＞にこそあるといえよう。つまり曲調は短音階で構成されているものが多く、そこはかたなく漂う悲しみや、甘く切なく流れる調べ、胸を抉るような慟哭の旋律は、そのまま私たち日本人の琴線を揺さぶってやまないものがある。

考えてみると、私たち日本人は西洋音楽が入ってきた明治の末期からこの＜哀愁＞好きが顕著になってきたようで、幼いころ母の背中で聴いた子守唄にはじまり、耳になじんだ「荒城の月（明. 34）」、「城ヶ島の雨（大. 2）」、「宵待草（大. 7）」、さらに「月の砂漠（大. 12）」、「花嫁人形（大. 12）」といった童謡や抒情の名曲の多くは哀切な短音階で書かれたものが多い。そして、さらにこれを典型的に示しているのが歌謡の世界である。大正の中山晋平の手によってはじまるこの路線は、“行こうか戻

ろうかオーロラの下を”の「さすらいの唄(大. 6)」以下、「船頭小唄(大. 10)」、そして「波浮の港(昭. 3)」、などを紡ぎながら古賀政男につらなり、ご存知の「酒は涙か溜息か(昭. 6)」、「影を慕いて(昭. 7)」など数多の名作を呼び水に、服部良一他の名作家の輩出で、一連の昭和歌謡の全盛期を謳歌し今日に至っているが、そこに漂う暗くうねる哀愁の情念は、アルゼンチンの人々が心に秘めている“かつて新天地を求めて故郷を捨てた移民の、絶望と悲嘆の中から呻くようにあがった望郷の叫び”=タンゴと、どこか深いところで一致するのだ。

タンゴがわが国に入ってきたのは昭和の初頭だったが、この魅惑に満ちた音楽にインスパイアされ、そのリズムに乗せて書かれた和製タンゴの逸品も相当数にのぼる。それは昭和5年の映画「麗人」の主題歌で“ぬれた瞳とささやきに”と歌われた「麗人の唄」(堀内敬三:曲)を筆頭に、同6年の「日本橋から」(古賀政男:曲)、同8年の「タンゴ・ローザ」(紙恭輔:曲)、同9年の「並木の雨」(原野為二:曲)、同10年の「雨に咲く花」(池田不二男:曲)、同12年の「マロニエの木陰」(細川潤一:曲)、「泪のタンゴ」(服部良一:曲)、同14年の「鈴蘭物語(戦後「夢去りぬ」に改題)」(服部良一:曲)、同15年の「春よいづこ」(古賀政男:曲)などが続き、戦後の昭和22年の「夜のプラットフォーム」(初出は昭和14年とされる服部良一:曲)や同年の「黒いパイプ」(服部良一:曲)、同24年の「別れのタンゴ」(万城目正:曲)、そして、同25年の「赤い靴のタンゴ」(古賀政男:曲)へと連なってくるのだった。

このようにして日本人は昔からことのほかこの哀愁漂うタンゴに執心し、その関わりを大切にしてきたのだが、日本人がかかえる<哀愁>好きのDNAはまだまだほかにもある。わが国で人気の高いクラシックのレコードというと、ベートーベンの「運命」をはじめシューベルトの「未完成」、チャイコフスキーの「悲愴」、ビバルディの「四季」などとなるだろうが、これらもみな通底しているのは哀調であり、短音階で書かれたものである。そして、それよりなにより徹底しているのはかつての軍歌だ。勇壯を旨とすべき軍歌でさえ、痺れるような深い哀切さに彩られた作品が少なくなく、それによって戦意を鼓舞した経緯がある。“ここはお国の何百里、離れて遠い満州の…”の「戦友(明. 38)」をはじめ、「露営の





歌（昭. 12）」、「麦と兵隊（昭. 13）」、「暁に祈る（昭. 15）」、そして「若鷺の歌（昭. 18）」など、今日に残る名曲の多くが自らを奮い立たせる悲壮美に満ち、胸を突く作品だったことに改めて思い至るのだ。

因みに、アルゼンチン・タンゴが最も躍進し、輝きに満ちていた時代はいつか、といえ、20世紀初頭からのおよそ半世紀とみられる。これはわが国の明治の末期から大正を経ての昭和20年代までに当たる時代で、これは先にあげたように、わが国の歌謡の全盛期と見事に重なるのだ。深々とした哀愁で彩りながら世に送り出され、今日なお多くの人々から激賞され続けているタンゴ、その主な逸品の誕生を時代別にあげると、明治後期（1900～11）＝「エル・チョコクロ」、「ラ・モローチャ」、「フ

ェリシア」など。大正（1912～25）＝「シャンパン・タンゴ」、「バンドネオンの嘆き」、「わが悲しみの夜」、「靈感」「コム・イル・フォ（お上品に）」、「チケ（気取りや）」、「ブエン・アミーゴ（良き友）」、「レクエルド（思い出）」、そして「ラ・クンパルシータ」など。昭和（1926～1988）の主には中期＝「パリのカナロ」、「ポエマ」、「カミニート（こみち）」、「ジーラ・ジーラ」「わが悩み」、「郷愁」、「悲しきミロンガ」、「マレーナ」、「スール（南）」、「タンゴ好きのお嬢さん」、そして昭和の後期になり、鬼才として一世を風靡したピアソラの「リベルタンゴ」、「アディオス・ノニーノ」などの力作が繋がるのだった。

珠玉の作品が目白押しで、これはまさに絢爛とした＜タンゴの時代＞そのものだった。

一昨年、アルゼンチン・タンゴはユネスコの無形文化遺産に登録されたという朗報があったが、同年同国で開かれたタンゴ・ダンスの世界選手権において日本人のペアがサロン部門で優勝、そして昨2010年にはステージ部門で日本人がまたもや優勝の栄冠を手にするなど、相次ぐ快挙で両国の関係はさらに大きな絆で結ばれることになったのは実にうれしい限りだ。

かくして＜哀愁＞をアルゼンチンと日本を結ぶ強靱なキーワードにして、タンゴは今後なお一層多くの日本人に親しみ愛されていくことを、心から期待したいものである。



---

# 第17回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 鈴木 忠夫 —

---

去る5月15日（日）関西リンコン・デ・タンゴが例によって神戸三宮のサロン・ど・あいで開催された。プログラムの構成もいつもの順序を踏襲している。

第1部のⅠ）は「映像に依るタンゴ」と題し京都の山田建雄氏の解説で本年1月にTVで放映された「昭和タンゴ”小松亮太がたどるその歴史”」を上映された。この番組は日本のタンゴの最盛期といふべき昭和30年代のタンゴにこれまで距離をおいてきた小松氏がここに至って真正面から取り組んだ意外と思わせて当然の帰結と納得させられる番組だ。ストーリーの説明はここでは省略するが昭和30年代にタンゴの最前線で活躍していた音楽家達の懐かしい顔や演奏風景が現れ、これら往年の名手達の中で今も元気な方がたに小松氏は自身がアレンジしたタンゴへの演奏参加を要請する。真摯な小松氏に、にこやかに応じる往年の巨匠たち練習ともなれば小松氏の意図するところに的確に応える巨匠たち。本番でのピアソラ作曲の「チャウ・パリ」は涙が出る程素晴らしい。とにかく小松氏の熱意とバイタリティには圧倒される。

第1部のⅡ）は「会員によるディスクコンサート」で1番手は、遠路四国丸亀からおいで下さった 富田稔氏で「東ヨーロッパのタンゴから」というテーマでのプログラムだ。日頃滅多に聴く機会のない東欧のタンゴとあって興味深く聴いた。1～3曲目は歌入りでそれぞれの国語で歌われているがタンゴはスペイン語、が刷り込まれている我々にとっては何か違和感があった。歌詞の言語も音楽のうちということか。では日本語では？となると…… 4～5曲目はルーマニアのタンゴでジプシーバイオリニスタのジョルジュ・ブーランジュの主宰する楽団の演奏を聴いた。ジプシー色の強い音楽でバイオリンの奏法や後半でテンポがだんだん速くなるあたりはチャルダッシュといった雰囲気だ。ブーランジュはルーマニアでは著名な音楽家だそうで音楽的にも高い水準を持っていると感じられた。

ここでの3楽団の中では最も馴染める曲、演奏だった。特に最後の「黒海の畔にて」は富田氏がこの一曲をきいて頂きたいための此のプログラムと云われるだけに名曲名演だった。補足追加に同じ曲を池田光夫とトリオ・ロス・アミーゴスの演奏で聴いたがこれも好かった。

「会員によるディスクコンサート」の2番手は姫路の圓尾かほるさんで姫路中南米音楽愛好会の古い会員として、熱烈なプグリエーセファンとして知られている。ところが今日の「私の好きなタンゴ」というプログラムには一曲もプグリエーセの演奏がないのには裏をかかれた。とは言ってもプグリエーセと同系統のスタイルの元メンバーとか信奉者の楽団の演奏であり「レクエルド」といったプグリエーセの代表作も1曲入れ、やはりプグリエーセに寄り添ったプログラムだ。真ん中に黒木曜子の歌が挟まっているのはここで一服かと思ったら、これが圓尾さんの今日のイチオシとのこと。他の4曲もいずれもプグリエーセを彷彿とさせる名曲名演だ。1曲追加で神戸の上田登氏から黒木曜子の歌でラ・クンパルシータが圓尾さんにプレゼントされた。

「会員によるディスクコンサート」の3番手は大阪の永田保氏でこの方は関西リンコンではもっぱら音響担当の皿回しをやらさ…イヤして下さっている。今日は久しぶりに永田氏の声が聞けるとの期



待に違わず「F. ロムート楽団RCAビクトル期の演奏スタイル変遷を聴く」というテーマでユニークな視点からのロムート観を早口に理路整然と論じられた。小生のロムート観は幾つかの決定的名演を除くと、どちらかと云えば地味な渋い楽団という印象でロムートファンは少数派と思うが永田氏は13歳からのロムートファンだそうで恐るべき神童だったのだ。プログラムはロムートの演奏スタイルの変化の節目を追って5曲とりあげ時代、メンバーの出入り、楽界内での地位等々変化の背景を考察した説得力のある論を展開された。

4番手はディスクから離れて「バンドネオンソロで奏でるタンゴメドレー」と題して生のバンドネオン演奏だ。演奏されるのはロス。アセス。デ。大阪のマエストロ舩松伸男氏で本業はお医者さんだ。去年4月にホテル・日航大阪で80歳の記念演奏会を催されたが「昔の仲間は皆天国だ」などと云いながらまだまだお元気で8曲のタンゴをメドレーで演奏された。オートラの声がありフェリシアを再度演奏された。今後もお元気で音楽を続けられるようお祈りする。それにしても煙草を減しなはれ

## 第2部

### “セミナー”「双頭の指揮者をいただく演奏グループ」

いよいよ本日のゲスト三重県四日市の鉄人28丹羽宏氏の登場だ。残念なことに開口一番「プログラムが後ろにずれ込んで時間が足りなくなり2, 3, 5曲目を割愛します」とのこと。「双頭楽団について最大の興味はどちらがイニシアティブを握っているかだろう」と丹羽氏は云われる。全くそのとおりだが今となっては確かめようのないものが多い、丹羽氏もこの辺の質問は解説者を悩ませるものだが未永く議論を楽しむために残してあってもよいのではとのお考えのようだ。ここでのプログラムは双頭の二人が如何に協力し切磋琢磨したかに主眼を置き、主導権はどちら?、などは問題ではないと丹羽氏は言われる。プログラムを見れば成程と思う、代表的なのはフランチェニ=ポンティエルだ全く対照的な性格の二人が約10年も協力して活動したのは奇跡のようだ。バッファ=ベリンジェリも奔放なベリンジェリと端正なバッファのコントラストが絶妙だ。続いてのサルガン=デ・リオのこれは双頭楽団とは言えないが二人のデュオによる演奏でコラレーラという曲これはライブだが二人の白熱の追っかけあい、凄い!としか言いようがない。最後はミゲル・ビジャスポアスとワシントン・キンタス・モレーノのピアノ2重奏でラ・クンパルシータ。ビジャスポアスは再々の来日でおなじみだが、モレーノの方はクラシック畑の音楽家らしい。ここでは異質の二人が仲良くデュオを楽しんでいて聴く方も楽しくなる。

以上で予定のプログラムは終了したが会場の皆の要望で1曲追加することになり、始めに時間不足で割愛したプログラムの5曲目のエルマノス・カナロ6重奏団の演奏で自作のアイ・バ・エル・ドゥルセを聴いた。この録音の翌54年にファン・カナロは記念すべき初来日を果たした。

この後恒例の記念撮影を会員の吉澤義郎にお願いし、後、夜の懇親会へと移行した。

懇親会は一同会話が弾み笑い声が絶えなかった。名残は尽きなかったが20時過ぎに散会した。

関西リンコン・デ・タンゴ 出席者 N.T.A.会員17名 非会員16名  
夜の部 懇親会 出席者 N.T.A.会員13名 非会員6名



集合写真：後列左より、鈴木忠昌、下川満雄、丹羽晴子、鈴木忠夫、山内富夫、溝上絹子、宮原慶子、渡邊光子、遠藤隆也、吉澤義郎、前列左より、上田 登、井上 潤、永田 保、圓尾かほる、丹羽 宏、富田 稔、山本雅生、山本久仁子、岩佐笑子（敬称略）



会場風景



山田 建雄さん



富田 稔さん



圓尾 かほるさん



永田 保さん



舩松 伸男さん



丹羽 宏さん

(写真撮影：吉澤 義郎氏)

—プログラム—

\*\*\*\*\* 第 1 部 \*\*\*\*\*

1) 映像に依る タンゴ 263 山田 建雄 (京都)

“昭和のタンゴ” 小松亮太がたどる その歴史  
最後に演奏される“チャウ パリ”が印象的

2) 会員による ディスク・コンサート (新加入をされた会員の自己紹介を兼ねて)

◇ 「東ヨーロッパのタンゴから」 249 富田 稔 (香川)

- 1 **Kalbimde Hie Yerin Kalmadi** Ibrahim Özgür (イブラヒム・ウスガー)  
私の心の中に貴方の居場所は無い  
イブラヒム・ウスガーとパーク・ホテル・オーケストラ (トルコのタンゴ)
- 2 **Ne Uchodi** 行かないで E. Skljarov  
ピョーチル・レスチェンコと彼の楽団 (ロシアのタンゴ)
- 3 **Tatjana** タチアーナ (女性の名前) M. Mar Janowski  
ピョーチル・レスチェンコと彼の楽団 (ロシアのタンゴ)
- 4 **Sensibilite de Tzigane** ジプシーの感覚 Ludwig Schmidseder  
ジョルジュ・ブーランジュと彼の楽団 (ルーマニアのタンゴ)
- 5 黒海の畔にて ジョルジュ・ブーランジュ  
ジョルジュ・ブーランジュと彼の楽団 (ルーマニアのタンゴ)

補足追加

黒海の畔にて ジョルジュ・ブーランジュ  
池田光夫とトリオ・ロス・アミゴス

◇ 「私の好きなタンゴ」 242 圓尾 かほる (兵庫)

- 1 **ENTRADOR** 闖入者 M. Demarco  
**ALFRED JULIO GOBBI** 1956-7-16
- 2 **CHIQUE** 気取り屋 R. L. Brignolo  
**ESTRELLAS DE BUENOS AIRES** 1960-5-13
- 3 **ALMA DEL BANDONEÓN** バンドネオンの心 E. S. Discépolo  
唄 黒木 曜子 Orquesta Típica Columbia
- 4 **ENCANTO ROJO** エンカント 口ホ F. Hager  
**FABIO HAGER Y SU SEXTETO**
- 5 **RECUERDO** 想いで O. Pugliese  
**CAREL KRAAYENHOF Y SU SEXTETO CANYENGUE** 2006

◇ 「F. ロムーと楽団RCAビクトル期の演奏スタイルの変遷を聴く」

089 永田 保 (大阪)

- 1 **No Lo Heches al Olvido** (F. J. Lomuto – A. Botta) 1933  
シンフォニカ調スタイルの自作自演

- |   |  |      |
|---|--|------|
| 2 | <b>La Cumparsita</b> (G. H. Matos Rodríguez)<br>スタイル確定後の名演                 | 1936 |
| 3 | <b>Recuerdo</b> (O. Pugliese)<br>バイラブレ時代の典型的演奏                             | 1941 |
| 4 | <b>Desagravio</b> (F. J. Lomuto – H. Manzi – J. M. Contrusi)<br>スタイル確定後の名演 | 1944 |
| 5 | <b>Tarde</b> (J. Canet)<br>最後期の名演  | 1950 |

◇ 「バンドネオンソロで奏でるタンゴメドレー」 276 舩松 伸男 (大阪)

**Ahi Va El Dulce**  
**Felicia**  
**El Apache Argentino**  
**Uno**  
**Sur**  
**El Día Que Me Quieras**  
**Melodía De Arrabal**  
**La Cunmparsita**

\*\*\*\*\* 懇 親 会 \*\*\*\*\*

お話し中にバックグラウンドミュージックを聴いて頂く CD「トリオ ボナリア」  
日 時 1994. 7. 7 14:00～  
場 所 神戸市須磨区 ラジオ関西 ホール  
演 奏 バンドネオン 舩松 伸男 ピアノ 大塚 典 バイオリン 古橋 幸

- |    |                                   |             |
|----|-----------------------------------|-------------|
| 1  | <b>CELOS</b>                      | ジェラシー       |
| 2  | <b>9 de JULIO</b>                 | 7月9日        |
| 3  | <b>TANGUERA</b>                   | タンゴ好きのお嬢さん  |
| 4  | 花のワルツ                             | チャイコフスキー 曲  |
| 5  | 只一度の機会                            | 「会議は踊る」の主題歌 |
| 6  | <b>REFLEJOS DE LUNA</b>           | 月影          |
| 7  | <b>EL CHOCLO</b>                  | エル チョクロ     |
| 8  | <b>COMME IL FAUT</b>              | コム イル フォー   |
| 9  | <b>FELICIA</b>                    | フェリシア       |
| 10 | <b>TIERRA QUERIDA</b>             | 愛する土地       |
| 11 | <b>VERANO PORTEÑO</b>             | ブエノスアイレスの夏  |
| 12 | <b>INSPIRACIÓN</b>                | 靈感          |
| 13 | <b>BUENOS AIRES –TOKIO</b>        | ブエノスアイレスー東京 |
| 14 | <b>PA'QUE BAILEN LOS MUCHACHO</b> | 仲間達が踊る様に    |
| 15 | <b>LA PUÑALADA</b>                | ラ・プニャラーダ    |

- |    |                     |           |
|----|---------------------|-----------|
| 16 | DESDE EL ALMA       | 心の底から     |
| 17 | QUEJAS DE BANDONEÓN | バンドネオンの嘆き |
| 18 | OLE GUAPA           | オレ ガッパ    |
| 19 | EL AMENECER         | 夜明け       |
| 20 | LA CUMPARSITA       | ラ クンパルシータ |

\*\*\*\*\* 第 2 部 \*\*\*\*\*

“セミナー” 双頭の指揮者をいただく演奏グループ 091 丹羽 宏

01. アルマ・ガウチャ Alma Gaucha (Roberto Firpo) A.M.P. CD-1254 <録 Victor: 1917>  
 /オルケスタ・ティピカ・アロンソ・ミノット  
 Orquesta Típica Alberto ALONZO=MINOTTO (Enrique) Di Cico
02. 遊び人 (ファリスタ) Farrista (Pablo Brodman) A.M.P. CD-1210 <録: 1931>  
 /オルケスタ・ティピカ・ブロードマン=アルファロ  
 Orquesta Típica Pablo BRODMAN=Simoni ALFARO
03. プリマベラ Primavera (Eduardo Bianco) CTA-952 <録 Victor仏: 1927>  
 /オルケスタ・アルヘンティーナ・ビアンコ=バチーチャ  
 Orquesta Argentino Eduardo BIANCO=J. Deambroggio BACHICHA
04. 命短し (セ・バ・ラ・ビ・ダ) Se va la vida (E. Donato – R. Zerrillo)  
 LP-1501<録Brunswick:1929?>  
 /オルケスタ・ティピカ・ドナート・セリジョ  
 Orquesta Típica Edgardo DONATO=Roberto ZERRILLO
05. いい娘が通るよ (アイ・バ・エル・ドゥルセ) Ahi va el dulce (J. Canaro)  
 A.M.P. CD-1214 <録: 1953>  
 /エルマノス・カナロ (ファン=マリオ) 6重奏団 HERMANOS CANARO Sexteto
06. タンゴを遊びながら (フガンド・コン・タンゴ) Jugando con tango (E. Pedroza)  
 SONDOR 8.158-2 <録: 1959>  
 /オルケスタ・プグリア=ペドローサ José PUGLIA=Edgardo PEDROZA, Orquesta
07. お前が魔術師なら (シ・ソス・ブルーホ) Si sos brujo (E. Balcarse)  
 EU-16016 (RCA)<録: 1953>  
 /オルケスタ・フランチーニ=ポンティエル E. M. FRANCINI=Armando PONTIER
08. ラ・ギニャーダ La Guiñada (Agustín Bardi) RCA. AVS-3718<録: 1960代末>  
 /バッファ=ベリンジェリのオルケスタ・ティピカ  
 Ernesto BAFFA=Oswaldo BERLINGIERI y su O. Típica
09. 家畜の囲い (コラレーラ) Corralera (A. Aieta)  
 Leader Music 605457(CABEL)<録: 1970>  
 /サルガン=デ・リオ Horacio SALGÁN=Ubaldo DE LIO, Duo <en Vivo>
10. ラ・クンパルシータ La Cumparsita (G. H. Matos Rodríguez)  
 LONDON 32-14493<録: 1973>  
 /ミゲル・ビジャスボアス=ワシントン・インタス・モレーノ、ピアノ2重奏  
 Miguel VILLASBOAS y Washington Quintas MORENO, Dos pianos

---

# 第8回 「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

丹羽 宏

---

第8回「中部リンコン・デ・タンゴ」(以降、中部リンコンと略記)は4月17日(日)の午後1時より、四日市市内で開催した。会場はサルサやビバップ・ジャズのライブで有名なライブ・カフェ「フルハウス」を利用した。タンゴ・ライブにも好適な空間だ。参加者は43名(会員16名、ビジター27名)。時節柄、遠隔地からの参加者は僅少。

名古屋の安井会員は東日本震災で被災された家族を自社工場宿舎等に招き入れて寝食の世話をされていることから今回は欠席されたこと、そして中部リンコン独自の義捐金箱を設置したことを報告した。しかし、最も辛かったのは中部リンコンを初回からサポートして頂いた水野 晃会員が3月27日に薬石の効なく他界された件の報告であった。奥様から送られた花籠盛(アレハンドロ水野)に舞台袖から見守られながらの一日だった。

主宰されていたタンゴタンで、ダンス・パートナーであった長谷川葉子さん(現在は会員)による参加動機のお話など、そして本部ゲストである西村秀人理事のご挨拶の後、本日のプログラムに入った。

【第1部】の会員レコード・コンサートでは、ベテラン・タンゴ・ファンながら初登場の早川健太郎さん(三重県)が「ピアノの魔術師ロドルフォ・ピアジの音源を求めて」というテーマで想い入れ一杯のトークを行って頂いた。

ロドルフォ・ピアジの詳細なペルフィルに始まり、1928年の「クルス・ディアプロ」のピアノ・ソロ〜ドスマノス〜から1952年の「エル・レコード」まで珠玉の8曲である。

ピアジ・スタイルの奥の深さをあらためて理解する良い機会となった。50年代以降のお話も期待したい。

【第2部】のミニ・ライブは、ライブ好きの多い中部リンコン・ファンから熱い要望のあった地場グループの演奏と歌である。70年代を中心として活動し、国内外で名を馳せた「エスペランサ」の流れを汲む「春日井邦夫とトリオ・ポルテーニョ」(バンドネオン、バイオリン、コントラバス)およびゲスト歌手「藤田治樹」にボランティア出演して頂いた。既に同じメンバーで2枚のCDアルバムをリリースしているという安定したグループである。リーダー春日井邦夫がいう基本コンセプトはアレンジのオリジナリティであり、全曲とも自前のアレンジで演奏している。コントラバスがピアノ・パートをカバーする動き等は心地よい。ゲスト歌手の「藤田治樹」の本業は現役のお医者さんである。プログラム10曲の中、難しい「ノスタルヒア」や「マレーナ」等4曲を歌ったが、そのソフトな歌いまわしは数多くのファンを惹きつけてやまない。

【第3部】の本部招聘コンサートでは、理事 西村秀人さんによる『バンドネオンの名手たちによる珍しい音源を集めて』という稀覯盤の類を連ねたプログラムを作成し解説して頂いた。「バンドネオンの名手」という縦糸と「珍しい音源」という横糸で織り成されるコンフント系の選曲は将にタンゴのタペストリーと言えようか。

3月まで出張されていたタンゴの母国などで入手の音源の中には、サジャーゴ＝モレーノ4重奏団のように始めて聴く機会を得た演奏もあった。このリーダーの一人、カリスト・サジャーゴ(バンドネオン奏者)はアニバル・トロイロ楽団に入る前のアストル・ピアソラとデュオを組んでいたこともあるとか、またアルヘンティーノ・ガルバンが編曲・指揮したアルバム「オルケスタ・ティピカの歴史」ではバンドネオン陣に加わっていたとか。

さらに珍しさ本位で選べば、オスバルド・モンテスがバンドネオン奏者として参加した「タンゴ・クアルテ

ート・ブエノスアイレス」(曲はエル・チョクロだが、真っ当なスタイルの演奏)である。旧ソ連(ウクライナ)で1968年に録音されたMelodia盤。こういった選曲のもとで構成されたプログラムを、全10曲楽しんだ。

以上、レコ・コン⇒ライブ⇒レコ・コンとバラエティに富んだ、トード・タンゴの1日を過ごすことが出来た。

【リンコン懇親会】はレコ・コン終了後に、同じ場所で西村理事夫妻を囲み、前記の長谷川さんも参加されて和気藹々の<ピノ・パーティ>を楽しんだ。PAの鈴木さん、記録係の海津さん、会計係の長田さん(ビジター)、有難うございました。遠路ながら最後まで残って頂いた圓尾会員、吉澤会員に感謝です。

開催実行幹事



珍しい音源(バンド伴奏者)を解説する西村理事



R. ビアジを解説する早川会員



名古屋のタンゴタン代表 長谷川新会員



会員集合



エンパナーダ+ピノ懇親会



参加希望の多いビジター諸氏の一部



## 〈プログラム〉

### 【第1部】会員レコード・コンサート

～ピアノの魔術師ロドルフォ・ピアジの音源を求めて～

日本タンゴ・アカデミー会員（三重県志摩市） 早川 健太郎

01. 悪魔の十字架 CRUZ DIABLO (R.Biagi) AMP CD-1105 〈録：1927〉  
／ Rodolfo Biagi、Solo de piano
02. モンマルトルの夜 NOCHES DE MONTMARTRE (C.Lenzi-M.Pizarro) MM-30803 〈録：1932〉  
／ Carlos Gardel Acomp. Au piano et au Violín
03. アフリカ人 EL AFRICANO (E.Pereyra) A.P. APCD-6501 〈録：1937〉  
／ Juan D'Arienzo y su Orquesta Típica
04. ゴルゴタ GOLGOTA (R.Biagi-F.Gorrindo) EMI-72435 〈録：1938〉  
／ Rodolfo Biagi y su Orquesta Típica
05. やくざな女 LA MALEVA (A.Buglione) EMI-72435 〈録：1939〉  
／ Rodolfo Biagi y su Orquesta Típica
06. 曲がり角 EL RECODO (A.Junissi) LDI-509 〈録：1952〉  
／ Rodolfo Biagi y su Orquesta Típica
07. 涙と笑い LÁGRIMAS Y SONRISAS (P.De Gullo) EMI-8 28558-2 〈録1941〉  
／ Rodolfo Biagi y su Orquesta Típica
08. ラ・クンパルシータ LA CUMPARSITA (G.H.Matos Rodríguez-P.Contursi-E.Maroni) AMP CD-1104 〈録：1942〉  
／ Rodolfo Biagi y su Orquesta Típica

### 【第2部】トリオ・ポルテーニョ、生演奏

#### TRIO PORTEÑO, "CONCIERTO EN VIVO"

春日井邦夫（会員）～ バンドネオン 岩切 陽子 ～ バイオリン  
平林 秀基 ～ コントラバス 藤田 治樹 ～ 歌 \*

01. エル・アパーチェ・アルヘンティーノ EL APACHE ARGENTINO (M.Arostegui) 〈曲：1913〉
02. ボエド BOEDO (J.De Caro-D.Linyera) 〈曲：1929〉
03. ビダ・ミーア VIDA MÍA (O.Fresedo—E.Fresedo) 〈曲1933〉
04. エル・ディア・ケ・メ・キエラス EL DÍA QUE ME QUIERAS (C.Gardel-A.Le Pera) 〈曲1935〉 \*
05. ノスタルヒアス NOSTALGIAS (J.C.Cobián—E.Cadícamo) 〈曲1936〉 \*
06. ポル・ラ・ブエルタ POR LA VUELTA (J.Tinelli—E.Cadícamo) 〈曲1939〉
07. マレーナ MALENA (L.Demare—H.Manzi) 〈曲1941〉 \*
08. ウノ UNO (M.Mores-E.S.Discépolo) 〈曲1943〉 \*
09. シ・ソス・ブルーホ SI SOS BRUJO (E.Balcarce) 〈曲1952〉
10. チキリン・デ・バチン CHIQUILÍN DE BACHÍN (A.Piazzolla-H.Ferrer) 〈曲1969〉

## 【第3部】 本部招聘コンサート

～バンドネオンの名手たちによる珍しい音源を集めて～

日本タンゴ・アカデミー 理事 西村 秀人

01. グアルディア・ビエハ Guardia Vieja (J.De Caro-Pedro Laurenz) Victor 79792 〈録：1927〉  
／ペドロ・ラウレンス&アルマンド・ブラスコ PEDRO LAURENZ=ARMANDO BLASCO
02. ウルグアイ娘ルシア La Uruguayita Lucía (E.Pereyra) Tonodisc 3322 〈録：1964〉  
／シリアコ・オルティス・トリオ CIRIACO ORTIZ y su conjunto
03. ボエド Boedo (Julio De Caro) TK S-5225 〈録：1953〉  
／サジャーゴ=モレーノ四重奏団 SALLAGO=MORENO y su cuarteto  
ギター：アルフォンソ&サバラ Guiarras: Alfonso y Zabala
04. タンゴ・インティモ Tango íntimo (D.Federico-H.I.Cardon) Rosafon LP103 〈録：1961〉  
／ドミンゴ・フェデリコとグルーポ・タンゴ・インティモ  
DOMINGO FEDERICO y su Grupo Tango Íntimo
05. チャルダッシュ Czardas (Monti) Pampa PS14114 〈録：1954〉  
／ファン・カンバレリ&ファン・リッソ JUAN CAMBARERI y JUAN RIZZO
06. 思い出(レクエルド) Recuerdo (Osvaldo Pugliese) Espacial D33-1008 〈録：1964〉  
／ロス・クアトロ・デル・タンゴ(バンドネオン：フリオ・アウマーダ) LOS 4 DEL TANGO
07. エル・グアルディアン El guardian (Alberto García) TK LD90-123 〈録：1961〉  
／ロス・モデルノス(バンドネオン：アルベルト・ガルシア) LOS MODERNOS
08. ラ・クンパルシータ La cumparsita (Matos Rodríguez) Polydor 0000351 〈録：1989〉  
／エルネスト・バッファ四重奏団 ERNESTO BAFFA y su cuarteto
09. エル・チョコロ El choclo (Angel Villoldo) Melodia A23021/22 〈録：1968〉  
／ブエノスアイレス・タンゴ四重奏団(バンドネオン：オスバルド・モンテス)  
Tango Cuarteto "Buenos Aires" (dir. Tito Besprovan)
10. 私の隠れ家 Mi refugio (Juan Carlos Cobián) Matus 105 〈録：1966〉  
／ロドルフォ・メデーロス四重奏団 RODOLFO MEDEROS y su cuarteto



大好評だったトリオ・ポルテーニョとゲスト歌手

# 《神戸発・上田・山本タンゴ写真館(7)》

—ロス・セニョーレス・デル・タンゴ日本公演から—

## ＜1967年 関西地区ファンとの交流＞

写真・資料提供：上田 登氏、山本 雅生氏



パーティー前の神戸港遊覧船にて



遊覧船上のD. フェデリコ



パーティーでの楽団演奏



司会の高橋忠雄氏（マイクの前）



パーティー会場の入口



M. ミセリスキー、B. ベベル、P. サボチミック  
A. ラモス、D. フェデリコ



E. リバス



E. マルチェット、M. ミセリスキー、B. ベレル  
D. ロムート、A. ラモス、D. フェデリコ



D. フェデリコ  
E. マルチェット



S. ニコシア



パーティーにて演奏する  
ロス・アセス・で・オーサカ



A. ラモス



会場風景



挨拶するB. ベベル



会場風景

ロス・セニョーレス・デル・タンゴと  
そのひとびと

大岩祥浩

お待ちかねのロス セニョーレス デル タンゴ(タンゴの紳士たち)がいよいよ日本を訪れました。

こゝに アルゼンチンには数多くのタンゴ楽団が活躍しており わが国へも1954年のファン カナロ楽団以来、フランシスコ カナロ オスワルド・ブグリエーセ、キンテート レアルといった一流どころがつぎつぎに来演し、愛好家を喜ばせていますが、こんどのロス セニョーレス デル タンゴほど豪快で、切れ味するどい演奏をする楽団も珍しいでしょう

いうまでもなく ロス セニョーレス デル タンゴは1956年にカルロス ディ サルリ楽団からわかれたメンバーが結成した楽団です ディ サルリ亡き現在では、その伝統的演奏をフォームそのまま継承し 活躍する唯一のオルケスタです ディ・サルリが在世中に組織されたために、当時は徳測をまじえているような噂が流れて ファンを戸惑いさせたものですが、いまやディ サルリの芸術をつたえるもつとも貴重な楽団となりました。考え方はよければ タンゴのオスマル マデルナ楽団やアメリカのグレン ミラー楽団のように ロス セニョーレス デル タンゴも「ディ サルリ」の名を冠したいところでしょうが、デビュー当初のいきさつなどから 楽団名をそのままにこんにちにいたしました。

ディ サルリ楽団と同様ヴァイオリン セクションの感情こめた美しいグレート部は天下一品で 独特のシャープなスタックカートとともにこの楽団のもつもおおきな魅力を生みだしています また タンゴ特有の感傷が随所にはじみでているのもさすがで とろとろと聞かせるきらめくようなピアノ タッチはディ サルリの面影をしのぶに充分といえましょう そのうえ 豪華華麗なグアルディア ヴィエハ(古典名曲)がずらりとならんでいるのですから これ以上いうこともなさそうです

ヴァイオリンのベルナルド ヴェベル、バンドネオンのアンヘル ラモスといった かつてカルロス デ サルリとともにその栄光をわけあつたヴェテラン奏者を トップメンバーにおき この二人を中心にしてのすばらしいアンサンブルはおおいに期待されます

今回の公演では ロス セニョーレス デル タンゴ本来のレパートリーのほか、いろいろかわった趣向も用意されております すなわち キンテート フェデリコ ヴェベルと各奏者によるソロなどです

キンテート フェデリコ ヴェベルは 客演のバンドネオン奏者ドミンゴ フェデリコと トップ ヴァイオリンのベルナルド ヴェベルを主軸に編成される五重奏団です 2年前に来日したキンテート ア ロ ビリンチョのメンバーがほぼ顔を揃え 古典曲ばかりをとりあげて快適な演奏を披露いたします

ロス セニョーレス デル タンゴの楽員ひとりひとりが優秀なプレイヤーであることはもちろんのことですが、ソロの部では それぞれが珍曲をたずさえて ユニークな演奏を開かせてくれます

このように ロス セニョーレス デル タンゴのステ



カルロス・ガルデル

「ジャズはなやかさがいっぱい」です タンゴ愛好家のみならず、あまねく音楽ファンに心から楽しんでいただける演奏となるに相違ありません。

はるか地球のすむ前からやってきた「タンゴの紳士たち」のすばらしい演奏をどうか心ゆくまで堪能してください。

\*\*\* \*\*

それではつぎに ロス セニョーレス デル タンゴのメンバーをご紹介しますことにいたします

■アンヘル・ラモス Angel Ramos (第1バンドネオン)

1905年生れ、バンドネオン生活50年にもなろうという大ベテランです。

古い演奏家というと どうも昔気質の雲風が抜けきれずめまぐるしい現代に追いついてゆけないという人が多いようですが、ラモスはその点非常に進歩的な人で、50才を越したいまなお「毎日が勉強だ」といっていることからも見て、ラモスはいかへんな精進家だといえるでしょう

かつては有名なフランシスコ カナロ楽団のメンバーで、またカルロス ガルデルやイグナシオ コルシニなど名歌手の伴奏も引受けたこともあるという輝やかな経歴の持主。カルロス ディ サルリ楽団に入団したのは1950年代になってから、ということですが、同じバンドネオニスタのフェデリコ スコルティ カッティ フェリックス ヴェルディなどとともに この楽団の黄金期を築く大きな力となりました。

現在では、ヴァイオリンのベルナルド ヴェベルとならんでロス セニョーレス デル タンゴの中核奏者 その両手から湧きでるディ サルリ精神は大いに期待できるものと思います

また ラモスが愛用するバンドネオンはみずから手を加えて改造したものといわれ、普通のバンドネオンよりキーの数がいくつか多いというも、たいへん興味深いことです

■ドミンゴ・フェデリコ Domingo Federico (第2バンドネオン)

日本のファンにはとくにおなじみのバンドネオン奏者です 楽器奏者としてのみならず 作曲、編曲、指揮など幅広い活躍をして るアーティストでもあります

フェデリコは1916年6月4日 音楽家を父とする好環境の家庭に生まれました。若いときには医者になろうと思ったこともあるらしく 一時は医学校へ通っていたそうです

幼い頃から楽器が大好きだった彼は 長ずるに及び、その道の大家ベドロ マフィアからバンドネオン奏法を習いますが、短期間のうちに師匠もビックリするほどの上達ぶりを示したといわれます 人並みすぐれた音楽才能を認められて やがてプロ入りいたします はじめてステージを踏んだのはアレハンドロ スカルピノ(「カナロ エンバリ」の作曲者)のオルケスタの一員としてでした。その後、妹と2人でドット フェデリコを組んで働いたりしているうちに名門ミゲル カロ楽団から誘いを受け その



エルサ・リバス



アンヘル・ラモス



ドミンゴ・フェデリコ

一員となります バンドネオン奏者のアルマンド ボンチエリを知りたがいに腕を競いあつたのはちようどこのことです

1943年独立、フェデリコはみずから「メロディスタ」をひい舞台 放送、レコードと大活躍をはじめました。わが国でも大聞され話題となり、映画「タンゴの歴史」でエドゥアルド・コロラソンと共演したのは1949年のことでした

1957年楽団を解散し まもなくトリオ サルードスを結成、その後は主にロサリオ市を中心に演奏活動を行っていましたが、1961年フランシスコ カナロ楽団の訪日にあたって 客員に招かれます これが最初の来日で 1965年にはふたたびキンテート ア ロ ビリンチョのメンバーとしてマリオ カナロなどとともに来日 華麗なバンドネオン テクニックを披露し 絶賛を博しました

なお フェデリコは「アル コンバス デル・コラソン」「サルードス」「ジュージョ ヴェルデ」「ベルカール」

ARTIST



Flushty (Flushty)



ドミンゴ・フェデリコ



サルバドール・ニコシア



B. Veber



Daniel Lomuto

などユニークなモチーフで、現代的タンゴを多く作曲して

■ダニエル・ロムート Daniel Lomuto (第3バンドネオン)  
本年とって33才の弾きざかりです。父親はエンリケ・ロムート おちさんが亡くなったフランシスコ・ロムートとい

いますから、まさにタンゴ界のサラブレッドというわけです  
若いのに似合わず、その音楽活動はかなりの広範囲にわたり、ラジオ・エル・ムンドの常任指揮者や管弦楽のディレクターなどを兼ねるといふ多才ぶりです。

タンゴの方での活動はおもにアンヘル・ヴァルガスなどの歌伴奏が多かったと聞いていますが、みずからのオルケスタをひきい、ディスコフォニア・レコードで録音をしたこともあります。

ロス・セニョーレス・デル・タンゴに参加したの比較的近いことで、1964年といわれます。若さと熱にあふれ

る好プレイに注目いたします。

■ベルナルド・ベベール Bernardo Veber (第1ヴァイオリン)  
ロス・セニョーレス・デル・タンゴの運営は合議制なのですが、ヴェベールはオボエの指揮。

1913年4月14日、25年にタンゴ界へデビューしたといふ天才的才能が、1936年までステージへの12才の可愛い「ブチ」の演奏では、毎夜お客の最高の人気となっていました。

そのときの楽団はファン・マグリオ・「パチョ」のオルケスタでした。マグリオ・「パチョ」楽団といえば当時カナロ・フィルでもともにタンゴ界に君臨していた名流楽団で、ヴェベールがこの楽団に参加したことはまことに幸運だったといえるでしょう。その後はトントン拍子にすすみ、1930年代にはフラシスコ・カナロ楽団、1940年代にはフリオ・デ・カロ楽団というように、つねに第一流の名声と実力を誇る楽団で重要なポジションを受けつてきました。とくにフリオ・デ・カロ楽団においては、マエストロにかわり第1ヴァイオリンを担当して、デ・カロばりの名技で数多くのレコード(オデオン)を吹込んだと語っています。

ドミンゴ・フェデリコの場合と同様、今回の来日は3回目です。じつに人なつこそうな童顔の彼はいつでも舞台の人気者ですが、今度もサボチミック・ミセリスキーとのすばらしいアンサンブルで私たちの耳をおおいに楽しませてくれることでしょう。

■マウリシオ・ミセリスキー Mauricio Miserizky (第2ヴァイオリン)  
1912年生れの55才。この人のタンゴ経験もかなり長いよう

です。  
若い頃のことはあまりよくわかっておりませんが、有名なヴァイオリン奏者のカエタノ・アグリッシーとは非常に仲がよくなりました。一緒に演奏したのも一緒でした。そういえば、1930年代の末にアグリッシーがはじめて楽団を結成し、ビクター・レコードに録音したときのメンバーに、第2ヴァイオリン奏者ミセリスキーが名をつらねていました。

1930年代以後はフランシスコ・カナロ楽団、ペドロ・ラウレンス楽団で活躍し、最近ではホセ・バット・レオポルド・フェデリコ、フリオ・ソーサなどと一緒に仕事をしています。

ミセリスキーのヴァイオリン・テクニクは本国でもすでに定評のあるところですが、かたから作曲の仕事も意欲的にしており、フリオ・ソーサが歌ってヒットした「シノ・メ・エンガニェス・コラソン」も彼の作曲になるタンゴです。

■ペドロ・サボチミック Pedro Sapochmik (第3ヴァイオリン)

第1ヴァイオリン奏者のベルナルド・ヴェベールとは少年時代からのアミーゴ同志。タンゴ界デビューもヴェベールと同じ1925年、その後も機会あるごとに行動をともにしているようです。銀髪を見るからに温厚そうなサボチミックは「タンゴの紳士」のイメージにピッタリで、前回来日(キ

チー・ア・ロ・ゼリンチョ)のときは、一見、おとこにみえませんが、じつは女性に好まれるタイプです。

はじめマグリオ・「パチョ」楽団、1930年代にはファン・カリロス・コピアン・ペドロ・マフィアの楽団に在団していましたが、1940年代にはヴェベールとともにフリオ・デ・カロ楽団に転属し、1958年からロス・セニョーレス・デル・タンゴで活躍しています。

よきコンビニューロであるベルナルド・ヴェベールをリーダーにして、がっちり息の合った好演奏を示してくれることでしょう。

■サルバドール・ニコシア Salvador Nicosia (ピアノ奏者)  
度の強いめがねをかけ、一見近寄りにくいような風ぼうの人ですが、じつはいたって上人間です。この人も1965年にヴェベール、サボチミックなどと日本へ来ています。

ニコシアは1914年イタリア生まれですが、幼時ブエノス・アイレスに移りました。タンゴに興味を覚えたのは10代のとだとしておりますが、その頃すでにピアノを完全にマスターしていたそうです。いろいろの事情でジャズ・バンドなどにもいたそうですが、1940年代フランシスコ・カナロ楽団でモレスの代役をしたのを機会に、その後はずっとタンゴばかりを演奏しているそうです。ロス・セニョーレス・デル・タンゴでは非常に重要なポジションを担当しており、その演奏技術はすでにレコードでもお聞きのとおりすばらしいものです。

■エンリケ・サンティアゴ・マルチェット

Enrique Santiago Marchetto (ベース奏者)

1917年8月11日生れ。マルチェットはタンゴのみならず、交響楽の分野においても非常に著名なベース奏者で、オルケスタ・シンフォニカ・ラディオ・ナショナル・シンフォニカ・デ・アソシアシオン・プロフェソラード・オルケスタル・バンド・シンフォニカ・ムニシパルなどの有力メンバーだったという経歴を持っています。タンゴの方ではフリオ・デ・カロ・ペドロ・マフィア・フランシスコ・カナロなどの楽団を経て、最近ではエンリケ・フランチェニとレオポルド・フェデリコが主宰するオクテット・ティビダボの録音にも参加しています。

ロス・セニョーレス・デル・タンゴにはディ・サルリ楽団以来の生えぬきベース奏者アムレット・グレコがおりますが、個人的な事情で同行不可能になったため、この優秀なベース奏者マルチェットが客員として来日しました。

■エルサ・リバス Elsa Rivas (女性歌手)

1930年生れの美しいカンシオニスタ。日本ではレコードも多くないので意外と知られていませんが、ブエノス・アイレスでは非常に高く評価されているソリストです。レコードはオデオン、RCAビクターなどで聞くことができます。元来男性歌手ばかりだったロス・セニョーレス・デル・タンゴで、どんな演習を聞かせてくれるか、リヴァスのステージはもっとも注目に値することのひとつかと思ひます。

# 中野 恵正 (大田区) さん

聞き手 島崎 長次郎



**島崎** 今日はお忙しいところを時間を割いていただきありがとうございます。お若い頃から再三にわたってアルゼンチンに駐在され、現地での経験も豊かな中野さんに、当時のお話やら、現在常務理事としてご活躍中の日本アルゼンチン協会などについていろいろお聞かせいただこうとお伺いしました。アルゼンチンに最初に行かれたのはいつでしたか。

## <羽田からプロペラ機で70余時間>

**中野** 最初は未だ第2次大戦の余塵の残っていた昭和34(1959)年でした。羽田空港からプ

ロペラ機で遥々と70時間余飛び続け、物産会社の留学生としてコルドバ市のコルドバ大学に1年間留学、コリエンテス州出身の重国人学生3人と一緒に住み、楽しく実りある生活をエンジョイしました。そういえば、その仲間たちと金を出しあって古い車(1928年式T型フォード)を買い、よくドライブをしたのも忘れられません。

当時のアルゼンチンは、ご存知のように1955年にペロン大統領が失脚した後で、政情は極めて不安定でしたが、58年にコリエンテス出身のフロンディシが大統領に就任、3年





昭和34（1959）、最初のアルゼンチン、コルドバ大学の留学生時代

後の61年に彼はフランシスコ・カナロを連れて訪日、新宿のコマ劇場で挨拶したことも現地の新聞で報道され、懐かしい思いに耽ったのを昨日のここのように思い出します。

**島崎** カナロ来日から早くも今年で丁度50年です。学生生活はいかがでしたか…。

**中野** はい、実に有意義な毎日でした。亜国の大学は文科系は夜間にして、私は昼は私立の Monserrat 中学に特に頼んで入れてもらい、亜国の地理と歴史の授業に出席し、午後は大学のラグビークラブ = Club Universitario に入り、1960年に優勝した南アの Springbok が来亜の際、コルドバでの親善試合に参加できたことは望外の幸せであり、最高の思い出になっています。

思い出といえば、大学の音楽祭に O. プグリエーセ楽団が出演し、熱演を聴かせてくれたのも忘れられません。J. Maciel や C. Guido の迫真の歌を含め、まさに本場の楽団の持つ迫力には圧倒され、その後も惚れ込んだまま今日にいたっています。

**島崎** それはプグリエーセの第1期オデオンの最末期、その後日本に来たホルヘ・カルダーラなどもいたいい時代でした。1年の留学の後はどうされたのですか。

**中野** この後の2年間はブエノスアイレス支店

へお礼奉公、となるのですが、さすがにタンゴのメッカ、ここでは Avenida Corrientes の「タバリス」や Calle Maipu の「マラブー」などのキャバレーでタンゴを堪能し、独身時代を目いっぱい楽しませてもらいました。

私は学生時代からタンゴが好きで、大学で所属していたアメリカン・フットボールの間隙を縫ってはよくタンゴの演奏会に行ったものです。はじめて京都に来たオルケスタ・ティピカ・東京を聴きに行ったのは祇園の弥栄会館でしたが、早川真平を中心にした端然としたその演奏には本当にうっとりとしたものです。

卒業して入社後、はからずも会社の第5代のアルゼンチン修業生に選ばれた私に、人事部長が「ティピカ・東京の山田早苗（V）さんは第2代のアルゼンチン修業生。君の先輩だ。よろしく願い申し上げろ」といわれ、腰が抜けるほどビックリしました。山田先輩は大変お元気で、今でも可愛がっていただいているのは、本当にうれしい限りです。

**島崎** そうでしたか、よい経験をされましたね。その後再びブエノスアイレス駐在の機会に恵まれたのは何時で、いかがでしたか当時は。

**中野** それは3年後の昭和40（1965）年で、このときは5年間のブエノスアイレス勤務になりました。その頃のアルゼンチンの情勢は相変わらずよくなく、物価は高騰、失業者は増大するなどの結果、軍事政権が継続し、政治・経済両面でとても厳しい状態が続いていました。その一方、タンゴ界でも1930年代から40年代の繁栄を支えてきたカナロを筆頭に、ドナート、フィルポ、マフィア、ピアジ、ゴビ、コルシーニ、オルティスなどの巨匠が相次いで亡くなり、その上に不況によりタンゴの職場が激減し、タンゴはかつてない疲弊した情



昭和40（1965）2度目のアルゼンチン、バリローチェ遊園地にて

況に追い込まれていました。

丁度この時代、アルゼンチンの近い将来に向けた工業発展への努力と、わが日本の高度成長に支えられた海外市場開拓の熱気とが相俟って、鉄鋼部門の担当だった私たちは毎日の仕事に追われっぱなしの日々となり、タンゴどころの話ではない状態がしばらくつづきました。

### <奇遇～タンゴとの不思議な縁>

ところがあるとき、そんな私にタンゴに対する関心に新鮮な火をつける僥倖が起こったのです。実に忘れがたいことですが…。

**島崎** えっ、それは何ですか…。

**中野** それは…、会社のお得意先のお偉いさんから「いいアパートがあるので是非いらっしゃい」と誘われ、お陰でTalcahuano街とCharcas街の角にある超高級マンションに入居することになったのです。ところがそのビ

ルの地階には、なんと「カーニョ・カトルセ (Caño Catrce)」という私の入居直前に開店した有名なタンゲリーアがあったのです。経営者はよく知られたモダン・タンゴのバンドネオン奏者アティリオ・スタンポーネとされ、夜毎に著名楽団が次々に登場しブエノスの夜を彩っていました。

さらに、その近くのCharcas街とSuipacha街には、大作曲家の故エンリケ・サントス・ディセポロの奥さんのタニアが経営する「カンパラーチェ」があり、この両店は、2度目の滞在中、激務に疲れた私の心に何より寛ぎを与え、そして最も楽しませてくれた店として、本当に忘れがたいものになりました。滞在は以上の2回ですが、その後も10数回出張をしておる関係で、ともかく私にとってアルゼンチンは、生涯の故国ともいえる存在になりました。

なおご参考までに申し上げますと、その後

の海外勤務は、ニューヨークに10年（1976～81、1987～91）、北京に3年間（1994～96）となっています。

**島崎** 激動の昭和から平成の初頭にかけて、中野さんの誇るべき敢闘の自分史ですね。

ところで、中野さんはそれらの経験を生かし、現在は「日本アルゼンチン協会」の常務理事をされていますが、この協会の概要について少しお話しできませんか。

### <日本アルゼンチン協会の現状>

**中野** わかりました。すでにご承知のように、その昔の日本海海戦（1904年）当時、アルゼンチンがイタリアに発注していた2隻の軍艦（モレーノ＝日進、リバダビア＝春日、）を譲り受けて以降、その折の観戦武官のガルシア海軍大佐をはじめ、1905（明治39）年に練習艦サルミエント号で来日の際のファン・カベナ海軍士官など、数多の親日家が現れる一方、この10年後アルゼンチンが米国に発注して建造したその名も同じ戦艦（第2の）モレーノとリバダビア（昨年のTANGUEANDO EN JAPON.No.26号に岩垂司氏が詳述）のうち、モレーノは第2次世界大戦で亜国の旗艦として活躍した後の1957年に退役したのですが、同艦はタグボートに引かれベルグラノー軍港から最後の航海にでました。その行き先がわが九州の小倉の八幡製鉄で、解体されスクラップ化でその栄光の生涯を終えたのが実に日本だった、などもあって戦前から両国の友好関係を促進する民間機関は存在していましたが、時を経た戦後の昭和27年、社団法人として改めて東京に設立されたのが、今日の「日本アルゼンチン協会」です。

目的として掲げているのは、日本とアルゼンチン両国間の文化と経済の交流を盛んに

し、両国の親善と福祉の増進に寄与することに置き、諸活動を行っているところですが、現在の役員などは次のようになっております。

- 会長：友国 八郎（元商船三井会長）
- 理事長：木島 輝夫（元駐アルゼンチン日本全権大使）
- 会員：法人会員 約10社  
個人会員 正会員 85名  
賛助会員 125名

**島崎** 昨年はアルゼンチン建国200周年記念ということで、なにかと行事も多く大変だったでしょ。ほんとうにご苦労さまでした。

**中野** なにをおっしゃいます。お陰さまでどうにかスケジュールは消化することができました。昨年来、当アカデミーとはセミナーをコラボでやっていただくなど、いろいろな面で特にご協力を賜り感謝をしているところです。なお当アカデミーの会員で、現在日本アルゼンチン協会会員となって下さっている方は14名ほどになっております。

**島崎** いやこちらこそお世話になっております。これからもこのご縁を大切にお互いに協力し合いながら、盛り立てて行きたいものですね。

さて、ここで生い立ちなどを少しお聞かせいただきたいのですが…。

### <父のマンドリンで芽生えたタンゴ>

**中野** 生まれは昭和8年の10月で、神戸で生まれ高校まではそこで育ちました。高校時代は専ら野球でして、春の選抜に出場したこともあります。大学は京都で、誘われるままにいったんは野球部を覗いては見たものの、当時人気沸騰中のアメリカン・フットボールに魅

せられてここに入り、とにかく全力投球で楽しい日々を送りましたが、その一方で中学時代からラジオから流れる奥ゆかしいタンゴの調べに心を寄せてきた経緯があります。

実は子供の頃からわが家には父の使ったマンドリンがあって、これを爪弾いて遊んでいた時期があり、童謡やときの流行歌、そしてコンチネタルのタンゴなどを弾いて楽しんでいて、その頃からタンゴのハッキリとしたリズムとか、親しみやすいメロディーになんとか魅せられていたのだと思います。

そんな私が、決定的なタンゴの虜になったのは二度にわたるアルゼンチン駐在でした。

私事で恐縮ですが、あえていわせていただきますと、物産会社での40年間を振り返ってみますと、この会社が与えてくれた舞台の広さと、チャンスの多様性に改めて目を見張り、この恵まれた土壌の上に、公私共に一片の悔いのない人生を送ることができたことを心から幸せに思っています。とくに、愛と郷愁を込めて赤裸々に人生のドラマを語ったタンゴに、現地のナマで出会えるチャンスを与えられたことはこの上ない喜びで、本当に感謝にたえません。

**島崎** それはすばらしい体験でしたね。ところでお気に入りのアーティストというと、どんなところになるのでしょうか…。

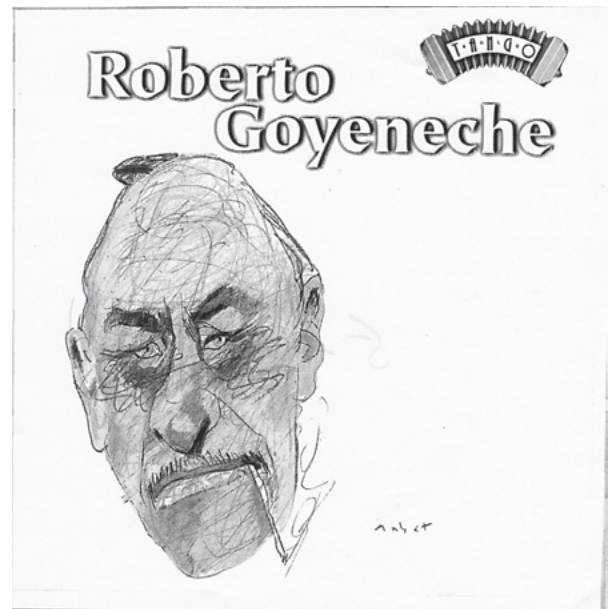
### <やはり歌にタンゴの真骨頂が…>

**中野** やはりファン・ダリエンソとオスバルド・プグリエーセですね。これにはもうベタ惚れです。ダリエンソの腰をくねらせて振る迫力満点の指揮、それに激しい気迫で男の心情を余すところなく歌い上げるアルベルト・エチャグエ。まさにタンゴの醍醐味そのものといえますし、端然とした中に巧緻なプレーを繰

り広げ、情熱極まりないホルヘ・マシエルの歌をのせるプグリエーセには、タンゴの究極の表現者を思わせる貫禄が感じられました。…ですから、いつの間にかレコード棚にはこの二つの楽団のCDが一杯になってしまいました。

**島崎** 歌ものがお好きなように見えますが、普段はどんなところを聴いておられますか…。

**中野** 私はアルゼンチンの男性歌手の怒鳴りつけるように絶唱するところが好きで、あの野性味にいたく興奮しますねえ。実に泣かされるのですよ。とりわけ2回目のブエノスアイレス滞在時に聴いたエドムンド・リベロとロベルト・ゴジェネチェにはゾッコン参りっぱなしで、彼らの語るように歌うルンファルドの魅力には本当に酔わせられ、せつせと私の住まいの地下に在った「カーニョ・カトルセ」に通ったものです。



それに比べ日本の男性歌手にはガッカリする例が少なくないのは残念です。楽団の実力が向上し、本場に対しても遜色がなくなっているだけに本当に惜しいと思います。

その昔は女性歌手もにぎやかで、アスセナ・



マイサニ、リベルタ・ラマルケ、ロシータ・キログ、メルセデス・シモーネ、タニアなどと多彩でしたが、その後はティタ・メレーロ、ネリー・オマール、エラディア・ブラステスなど豊かな歌唱力を持った歌手が続いてきたのはうれしいことですね。そして、2回目の滞在の末期になって、いままで惹かれてきた歌手とは全く違うタイプの素晴らしい女性歌手に出会いました。スサーナ・リナルディです。これにはすっかり虜になってしまっていて、手元には現在10指に余るCDが集まってしまいました。彼女の歌は、従来の踊るタンゴを歌って聴衆を惹きつけるのに対し、音楽としての聴くタンゴの魅力を多くの人たちに投げかけてくるのがリナルディだ、と感じ、大変感動しました。1998年一度だけ来日公演がありましたので、実演でそれを感じられた方もあるいはいらっしゃるかもしれませんが…。帰国後も度々の出張の都度Teatro OdeonやSan Martin劇場の演奏会に行き、その都度CDを求めて楽しんでいます。

**島崎** よくわかります。現地の雰囲気に入り、ピアノを片手に聴くナマの演唱はまた格別で

すからねえ。さて、最後に当アカデミーに対するご要望があればお聞かせください。

**中野** セミナーや機関誌などを通じ、役員の皆さんは本当によく頑張っておられるな、といつも感心しております。“好きだから”とおっしゃるかもしれませんが、これをボランティアで何年も続けていくというのはとても大変なことです。これからも一人でも多くのファンに喜んでもらえるよう、引き続き是非とも頑張っていたきたいと思います。

その上でさらにお願いするのは恐縮ですが、「日本アルゼンチン協会」も時代の流れの中で、ただいまその運営に難しい局面を迎えております。つきましては、これからもなお一層、当アカデミーの皆さんにもご支援をいただくことがあろうか、と思いますので、なにぶんよろしく願いいたします。

**島崎** わかりました。今日はお忙しいところをどうもありがとうございました。ご活躍をお祈りしております。

(2011/5/21収録)



# ～その4 セステート・タンゴと セステート・マジョール

吉村 俊司

## はじめに

今回取り上げるのは2つの六重奏団、セステート・タンゴ Sexteto Tango とセステート・マジョール Sexteto Mayor である。両楽団とも、すでにキャリアを積んだ名手たちによって1970年前後に結成され、70年代を通して非常に人気が高かった。一方で、セステート・タンゴはプグリエーセの流れをくむ強固なスタイルを堅持していたが、セステート・マジョールは曲によって多彩なアレンジを施し、バラエティーに富んだ演奏を展開していた。このほかメンバーの流動性、歌曲への姿勢などにおいても、両者は対照的であった。

## 略歴

### セステート・タンゴ

セステート・タンゴはご存知の通り、オスバルド・プグリエーセ楽団のメンバーだった6人によって結成されたグループである。1968年に、プグリエーセの病気により楽団の活動が停止したのに伴い、オスバルド・ルジェロ、ピクトル・ラバジェン（バンドネオン）、エミリオ・バルカルセ、オスカル・エレロ（バイオリン）、フリアン・プラサ（本来はバンドネオン奏者だがここではピアノ）、アルシデス・ロッシ（コントラバス）、ホルヘ・マシエル（歌手）というメンバーで活動を開始。マエストロの復帰後しばらくは、メンバーはプグリエーセ楽団にも籍をおき、両者は並行して活動していたが、その後円満に独立した。同年最初のアルバムをリリースし、また<カーニョ・カトルセ>に出演。

彼らは特定のリーダーを持たず、編曲もルジェロ、ラバジェン、バルカルセ、プラサが担当。プグリエーセ譲りの緻密かつ重厚なスタイルを継承しつつ、2拍目と4拍目を強調する独自のリズムなどにより、オリジナリティあふれる現代タンゴを作り上げた。

1974年にはコロン劇場で行われたコンサートにトロイロ、サルガンらとともに出演、また海外でも数多く公演し、1987年には来日している。歌手以外のセステート本体は永く不動のメンバーを誇ったが、1987年にラバジェンが抜けてアレハンドロ・サラテが参加。1989年の2度目の来日公演はこのメンバーで行われた。その後は徐々に活動も低下して行くが、メンバー交代しながら楽団は継続している。最近ではガブリエル・リバス、ワシントン・ウィリマン（バイオリン）、オスバルド・カブレラ、マリアノ・シニャ（バンドネオン）、アルド・サラレギ（ピアノ）、ギジェルモ・フェレール（コントラバス）のメンバーで2001年にアルバムを録音し、断続的に演奏活動も続けている。

### セステート・マジョール

マデルナ、ディ・サルリらの楽団を経てキンテート・グローリアなどで活動していたホセ・リベル

テラと、マデルナ、デ・アンジェリスらの楽団を経てロス・シエテ・デル・タンゴをオランダ・トリポディと共に率いていたルイス・スタツという2人のバンドネオン奏者を中心とした六重奏団。実業家ビルヒリオ・マチャド・ラモスからの、ソリストばかりによる六重奏団、という依頼により結成され、1973年に<カサ・デ・カルロス・ガルデル>でデビューした。当初のメンバーはリベルテラ、スタツに加えてフェルナンド・スアレス・パス、レイナルド・ニチュレ（バイオリン）、アルマンド・クーポ（ピアノ）、フアン・カルロス・ビジャレホス（コントラバス）で、ほどなくコントラバスはオマール・ムルタに交代した。その後もリベルテラとスタツ以外のメンバーは随時入れ替わりつつ内外で精力的に活動。1978年のホセ・リベルテラ楽団来日時には全員が参加し、セステート・マジヨールとしての演奏も行った。この時点のメンバーはマリオ・アブラモビッチ、マウリシオ・ミセ（バイオリン）、フアン・マサディ（ピアノ）、キチョ・ディアス（コントラバス）。

1985年にはメンバーを増強した楽団でブロードウェイ公演<タンゴ・アルゼンチーノ>に出演、これが世界的なセンセーションを巻き起こし、今日のタンゴ・ダンス・ブームの火付け役となった。1992年には<タンゴ・パッション>公演を立ち上げるなど、以後も精力的に活動。2004年にリベルテラがパリで客死し、スタツも楽団を離れたが、その後も新しいメンバーを加えて活動を続けている。最新のメンバーはオラシオ・ロモ、パブロ・マイネッティ（バンドネオン）、フルビオ・ヒラウド（ピアノ）、エンリケ・ゲーラ（コントラバス）、マリオ・アブラモビッチ、エドゥアルド・バルサーク（バイオリン）。

## 1970年代のセステート・タンゴのレコード

以下、1970年代のレコードを発表順に紹介していこう。

### RECITAL DEL SEXTETO TANGO (RCA, CAS3337)

【曲目】 1-1 EL ENGOBBIAO, \*1-2 UNA PIBA COMO VOS, 1-3 SENSIBLERO, 1-4 YO NO SE QUE ME HAN HECHO TUS OJOS, \*1-5 MENTIRA, 1-6 EL ARRANQUE, 2-1 MARGARITA GAUTHIER, 2-2 DERECHO VIEJO, \*2-3 AHORA NO ME CONOCES, 2-4 LOCURA TANGUERA, 2-5 BIEN COMPADRE, \*2-6 MI CIUDAD Y MI GENTE

【メンバー】 Osvaldo Ruggiero, Víctor Lavallén (bn), Oscar Herrero, Emilio Balcarce (vn), Julián Plaza (pf), Alcides Rossi (cb), \*Jorge Maciel (vo)

【発表】 1972年

エドゥアルド・ロビーラがアルフレド・ゴビに捧げた1-1を皮切りに、1-6、2-1、2-2などの独自の色を持った楽曲もすべてこの楽団の色に染め上げられている。プラサ作1-3、ルジェロ作2-4、バルカルセ作2-5、2-6といったメンバーの作品も充実。プグリエーセのリズムは「ジュンバ」と表現される通り、1拍目と3拍目に極端なアクセントを置いているが、彼らは前述の通り、プグリエーセ・スタイルを継承しながらもむしろ2、4拍目を強調している。ロックなどの外来音楽のスタイルに対抗した面もあったのかもしれない。



RCA, CAS3337

### SEXTETO TANGO PARA EL MUNDO (CBS, LD19358)

【曲目】 1-1 BUENOS AIRES HORA CERO, \*1-2 VIGILIA, 1-3 RODRÍGUEZ PEÑA, \*1-4 REMEMBRANZA, 1-5 BORDONEO Y 900, \*1-6 VENTANITA DE ARRABAL, 2-1 EL ESQUINAZO, \*2-2 PAPA GALLEGOS, 2-3 LA MALEVA, \*2-4 EL ÚLTIMO CAFÉ, 2-5 LA TREGUA, \*2-6 CHIQUILÍN DE BACHÍN

【メンバー】 Osvaldo Ruggiero, Víctor Lavallén (bn), Oscar Herrero, Emilio Balcarce (vn), Julián Plaza (pf), Alcides Rossi (cb), \*Jorge Maciel (vo)

【発表】 1974年

1-1では時を刻む音をパーカッションで表現し、出だしから意表をついた演奏。プグリエーセ楽団の演奏以上に熱いルジェロ作1-5、ちょっと勿体をつけたような前半から一転してパーカッションとともに賑やかなカーニバルへと突入する2-1、古い曲に現代的感覚を盛り込んだ2-3なども良い。収録曲の半分は歌入りで、この時代の楽団としてはかなり歌のタンゴを重視していたことが伺える。そのマシエルの歌はラバジェン作1-2(昨年のラバジェン来日公演でもエル・チノ・ラボルデがこの曲を歌っていた)、十八番の1-4をはじめとして、円熟の極みの素晴らしさであるが、このアルバムを発表した翌年の1975年に54歳の若さで急逝してしまう。死因はヘルニア手術における麻酔ショックとのことで、ゴビ、プグリエーセの両楽団でも活躍した大歌手にとってあまりに惜しい最期と言えよう。

日本では『ブエノスアイレス午前零時』(CBS/SONY, ECPM-112)としてリリースされ、さらに同タイトルで1999年にCD化された (SONY, SRCR 2389)。



SONY, SRCR 2389

### SEXTETO TANGO (MICROFON, SE-718)

【曲目】 1-1 A MEDIA LUZ, \*1-2 TINTA ROJA, 1-3 EL MONITO, \*1-4 QUEDEMONOS AQUÍ, 1-5 EL POLLO RICARDO, \*1-6 ¿DÓNDE ESTÁS CORAZÓN?, 2-1 MAL DE AMORES, \*2-2 MI VIEJA VIOLA, 2-3 EL PORTEÑITO, \*2-4 MOZA (MOCA), 2-5 CUANDO LLORA LA MILONGA, \*2-6 EL DÍA QUE ME QUIERAS

【メンバー】 Osvaldo Ruggiero, Víctor Lavallén (bn), Óscar Herrero, Emilio Balcarce (vn), Julián Plaza (pf), Alcides Rossi (cb), \*Raúl Funes (vo)

【発表】 1976年

前年のマシエルの急死を受けて、歌手としてラウル・フネスが参加。フネスは1942年生まれでこの時点で34歳、まだ若手ながら、前作同様アルバムの半分を占める歌曲で十分高い実力を見せている。2-4はブラジルのシンガーソングライター、ワンドのヒット曲だが、完全にタンゴに再構築されている。器楽曲はスタンダードが並び、特に1-5や2-3のような軽妙な曲がセステート・タンゴスタイルにどう料理されているかが聴きもの。一方でメンバーの作品が一曲も含まれていないのは、この楽団のアル



MICROFON, SE-718



バムにしては珍しい。

### TANGO!... (MICROFON, SE-60.118)

【 曲 目 】 1-1 INSTRUMENTAL, \*1-2 TIEMPO, 1-3 PALOMITA BLANCA, \*1-4 ABRIL EN MI CIUDAD, 1-5 ORGANITO DE LA TARDE, 2-1 SILUETA PORTEÑA, \*2-2 DESCORAZONADO, 2-3 VENTARRÓN, \*2-4 ESTRELLA, 2-5 QUINTO AÑO NACIONAL

【 メ ン バ ー 】 Osvaldo Ruggiero, Víctor Lavallén (bn), Óscar Herrero, Emilio Balcarce (vn), Julián Plaza (pf), Alcides Rossi (cb), \*Raúl Funes (vo)

【発表】 1979年

プラサ作1-1、ルジェロ作1-2、バルカルセ作1-4、エレロ2-2と、メンバーの作品が復活。やや地味な印象ながら内容は充実している。2-5はピアソラのあまり知られていない作品で、1961年の同名の映画のために書かれたもの。



MICROFON, SE-60.118

### 1970年代のセステート・マジョールのレコード

続いて1970年代のセステート・マジョールのレコードを順に見ていこう。

### PRELUDIO NOCHERO (EMI 5203)

【 曲 目 】 1-1 QUEJAS DE BANDONEÓN, 1-2 PRELUDIÓN NOCHERO, 1-3 SABOR A BUENOS AIRES, 1-4 UN PLACER, 1-5 TEMA OTOÑAL, 1-6 EL DÍA QUE ME QUIERAS, 2-1 DEL 73, 2-2 CONTRABAJEANDO, 2-3 CELOS, 2-4 MARGARITA GAUTHIER, 2-5 HALCÓN NEGRO

【メンバー】 José Libertella, Luis Stazo (bn), Fernando Suárez Paz, Reynaldo Nichele (vn), Armando Cupo (pf), Omar Murtagh (cb)

【発表】 1974年

セステート・マジョールの最初のアルバム。コントラバスは結成時のファン・カルロス・ビジャレホスからオマール・ムルタに交代している。セステート・タンゴと異なり、全曲器楽曲である。以後も、ソリスト格の歌手との連名でアルバムを作る場合以外は、基本的に歌手を入れない方針で一貫している。大胆に構成を入れ替えた1-1、コンチネンタル・タンゴ「ジェラシー」の名アレンジ2-3、リベルテラ得意の2-5など、聴き所の多いアルバム。トロイロ＝ピアソラがキチョ・ディアスに捧げた2-2をムルタが弾くのも興味深い。

日本盤としては「オデオン不滅のタンゴ・ベスト・コレクション」の中の一枚『ブエノスアイレスの魅力』（東芝EMI, EOS-60025）として1978年にリリースされた。



東芝EMI, EOS-60025

### A LA ORDEN (EMI 6812)

【曲目】1-1 TACONEANDO, 1-2 UNIVERSO, 1-3 VERANO PORTEÑO, 1-4 A LA ORDEN, 1-5 INSPIRACIÓN, 1-6 AMURADO, 2-1 RECUERDO, 2-2 MILONGA CON VARIACIÓN, 2-3 SELECCIÓN PIAZZOLLA (FUGA Y MISTERIO - OTOÑO PORTEÑO, BALADA PARA UN LOCO), 2-4 LA PUÑALADA, 2-5 CANARO EN PARÍS, 2-6 LA CUMPARSITA

【メンバー】José Libertella, Luis Stazo (bn), Mauricio Mise, Mario Abramovich (vn), Armando Cupo (pf), Omar Murtagh (cb)

【発表】1975年

2枚目の本作では、バイオリンがマウリシオ・ミセとマリオ・アブラモビッチに交代している。収録曲は有名曲が揃っており、わかりやすく適度に現代的なスタイルと相まって非常に親しみやすいアルバムに仕上がっている。リベルテラ作の壮大な1-2、両バンドネオンはじめ各楽器の聴き所の多い1-6、編曲が冴える2-3などが良い。



EMI 6812

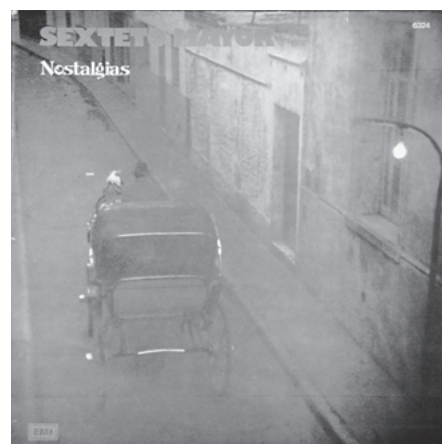
### NOSTALGIAS (EMI 6324)

【曲目】1-1 NOSTALGIAS, 1-2 UN TONO DE AZUL, 1-3 SELECCIÓN DE JULIO DE CARO (MALA JUNTA - BUEN AMIGO - BOEDO - EL ARRANQUE), 1-4 LA FLOR DE LA CANELA, 1-5 SI NO ME ENGAÑA, 1-6 UNO, 2-1 ADIÓS NONINO, 2-2 DANZARÍN, 2-3 EL FIRULETE, 2-4 BAJO ROMÁNTICO, 2-5 EL CHOCLO, 2-6 CAMINITO

【メンバー】José Libertella, Luis Stazo (bn), Mauricio Mise, Mario Abramovich (vn), Juan Mazzadi (pf), Kicho Díaz (cb)

【発表】1976年

3枚目のアルバムでは更なるメンバーチェンジがあり、ピアノにフアン・マサディ、コントラバスに名手キチョ・ディアスが加入。1978年のリベルテラ楽団来日公演の際の中心メンバーが揃った形になる。チャブーカ・グランダ作のバルス・ペルアーノ1-4が取り上げられているのが興味深い。1-2はスタソとフリオ・デ・カロの合作。この二人の取り合わせは、スタソ指揮の楽団に多くのゲストが参加した1975年のアルバム“LOS 14 DE JULIO DE CARO” (Fermata, SLF2005) (日本盤『巨匠フリオ・デカロに捧ぐ』ビクター, VIP-7206) を思い出させる (同作にはこの曲は収録されていないが)。2-5は本楽団の最も聴き応えのあるレパートリーのひとつ。



EMI 6324

### ROMANCE DE TANGO (EMI 6533)

【曲目】1-1 LA CACHILA, 1-2 PERCAL, 1-3 A DON JULIO DE CARO, 1-4 CANCIÓN DE ORFEO (Mañana de Carnaval), 1-5 KICHO, 2-1 MELODÍA ORIENTAL, 2-2 EL ÚLTIMO CAFÉ,

2-3 ROMANCE DE TANGO, 2-4 HOTEL VICTORIA, 2-5 RESPONSO

【メンバー】 José Libertella, Luis Stazo (bn), Mauricio Mise, Mario Abramovich (vn), Juan Mazzadi (pf), Kicho Díaz (cb)

【発表】 1977年

キチョのコントラバスが大活躍する1-5、アブラモビッチのバイオリンがたっぷりフィーチャーされる2-1が聴きもの。1-3は映画『黒いオルフェ』からのルイス・ボンファ作のボサノヴァだが、すっかりタンゴに姿を変えている。1978年の来日公演に際しては、来日記念盤『タンゴのロマンス』（東芝EMI, EOS-80998）として発売された。



東芝EMI, EOS-80988

## 終わりに

1970年代を代表する楽団、セステート・タンゴとセステート・マジョールの活動を、レコードを中心に振り返ってみた。1980年代以降も国内外で大活躍する両楽団だが、より華々しかったのはくタンゴ・アルゼンチーノで世界を飛び回ったセステート・マジョールであった。セステート・タンゴも世界各地で演奏してはいるものの、そのスタイルはちょっとアクが強く、爆発的な人気にまでは至らなかったように思われる。1987年の来日時には、おそらくは興行上の理由から他の楽団のコピーも演奏しており、聴く側としては複雑な心境であったことも思い出される。

なお、両楽団ともこの年代の録音を含む編集盤CDは多数出ており、今回は個別の紹介は割愛させていただいた。

## 参考文献

- アルゼンチン・タンゴ——アーティストとそのレコード（大岩祥浩著、ミュージックマガジン社）
- El Portal del Tango - <http://www.elportaldeltango.com/english/frnews.htm>（メニューからOrchestraを開くとSexteto Tango、Sexteto Mayorの情報がみられる）
- Todo Tango / Artists / Musicians / Sexteto Tango - [http://www.todotango.com/english/creadores/sexteto\\_tango.asp](http://www.todotango.com/english/creadores/sexteto_tango.asp)
- 同 / Sexteto Mayor - [http://www.todotango.com/english/creadores/sexteto\\_mayor.asp](http://www.todotango.com/english/creadores/sexteto_mayor.asp)
- 10tango.com / セステート・タンゴ - <http://www.10tango.com/artists-jp-4-0-%E3%82%BB%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%82%B4sexteto-tango>
- 同 / セステート・マジョール - <http://www.10tango.com/artists-jp-319-0-%E3%82%BB%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%9E%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%83%BC%E3%83%ABsexteto-mayor>
- Internet Broadway Database / Tango Argentino - <http://www.ibdb.com/production.php?id=4380>
- bsasTANGOexperience / Biografia de tangueros / Funes, Raul - <http://www.bsastangoexperience.com.ar/biografias/raul-funes.html>

# タンゴ もう一つの祖国…

欧州で活躍したタンゴの使節たち (補足 I)

芝野 史郎

タンゲアンド誌No.27で、丸亀市の富田 稔先生が“東ヨーロッパのタンゴ”のタイトルで、凡その体系をお書きになり、非常に参考になりました。

私も少ないレコード (SP盤です) ながら、ロシアのタンゴ (プレスはドイツ) とか、東ヨーロッパ圏のタンゴも蒐集しています。

アルゼンチンでは概旨東ドイツ以东を指して、ロシア (Ruso) ルーソと言っております。即ち、ルーマニア、ポーランド、バルト三国、フィンランド、ネーデルランド、ロシア地方を含めているようです。尚トルコ、パキスタン、イラン、アラビア等の地方はトルコ系—オリエント地方と表現しています。高名なバンドネオン奏者のオスカル バシルも“俺はトルコ人だ”と私に言っており、兄弟がモロッコやスーダンに散らばっていると言っていました。そう言えば今政争中のスーダンの大統領もバシルと言う名前です。

富田先生はこのあたりのタンゴを心象的に好きなのか非常に美しい言葉で述べておられます。私もこれに異存はないのですが、実は集めておりますとても古いレコードに、ジプシー系の楽団のものが多くありました。

昔のことで恐縮ですが戦前の映画で“キャラバン” (1934年作) 20世紀フォックス社製作で主演女優はロレッタ ヤングでした。共演の相手役はいま思い出せませんが多分タイロン パワーか誰かの二枚目の男優で、ジプシー娘との恋愛物語りでした。ジプシー群団が幌馬車でフランス中を旅しながら、ブドウ畠の収穫を手伝うと言うジプシーの生活を活写したもので劇中「ハッチャッチャ」と言う曲を収穫祝いの席で全員が歌うと言った場面が印象的でしたが、ブドウ酒作りに桶の中にブドウをぶち込み素足で踏みつけてつぶす場面ばかりを覚えております。—主題曲レコード：ビクター JA446 ジュディー バレーとカネチカット・ヤンキース楽団“ハッチャッチャ”・ハイ ハッターズ楽団“酒の歌”がありました。

閑話休題、ヨーロッパにタンゴの譜面 (ラ モローチャ、エル チョクロ) が齎されたときには既にタンゴと言うものは下層階級の音楽であると伝えられており、真っ当な音楽としては演奏されなかったものと考えます。その証拠に一番古い“エル チョクロ”は南フランスに居たジプシー楽団が取り上げた訳です。(1907年頃)

Disque Idéal El choclo  
Cascaës

Orchestre Tzigane Lavenue  
Orquestre “Idéal”

No.193  
No.192

このレコードはパテの縦震動のセンタースタート (レコードの中心近くより始まる) のレコードでした。

当時 (1910年頃は) 縦震動のレコードと横震動のレコード (これが今までの主軸のレコード、、、S.Pレコード、L.Pレコード、E.Pレコード共、、、になっておりC.Dだけが先祖還りをしておりますが) 平

行して発売されておりました。その普通レコードでフランス グラモフォン（後のビクター）レコードで、

グラモフォン

**No.59 El irresistible (Logatti)**

**No.60 Don Juan (Ponzio)**

exécuté par L'Orquestre Tzigane, Paris

**K 152 Elegancias (Villoldo) Mat. 18600**

**Bébe (Sentis) Mat.18599**

L'Orquestre Tzigane, Paris

**K 522 Venus (Bevilaqua)**

**Celebre Tango Criollo (Corret Jie)**

L'Orquestre Tzigane, de Monte Carlo

**GC 30734 La morocha (tango)**

L'Orquestre Tzigane du Pavillon Royal

Sous la direction du Maestro Lensen, Paris

**GC 30739 Miss Gibbs (Simmy)**

L'Orquestre Tzigane du Pavillon Royal

Sous la direction du Maestro Lensen, Paris



No.193



K522



GC30734

何故このようにジプシー楽団が初期のタンゴを採りあげてレコードを作っていたのか疑問が残りますが、私の解釈ではその後のジプシー楽団の音楽に対する態度で判るように、ヨーロッパの中で流行する全ての音楽を気楽に演奏し周囲の人々を楽しませるのが生活の糧となっていたからです。ですから下層の音楽として当時のヨーロッパでは採り上げる人たちが居なくても流行の兆しがあると思い、そしてアルゼンチン当地では未だレコードプレスの工場が無く全てヨーロッパ（特にドイツ グラモフォン系の工場）でプレスをしていたので、そのレコードを聴かせてもらって（大体ジプシーがブエノス）アイレスに行ける程大金を持っていなかった。初期のバンダのスタイルに酷似した演奏をやったのです。そして更に言えば彼等は路上の楽団故に持ち運びの出来る楽器で編成して（ビオリン、ギター、太鼓、アコーディオン、笛、クラリネット等）録音いたしました。然しラ モローチャの演奏に聞けるピアノが入ったレコードは例外でした。これはレコードのクレジットに評されるようにディレクターとしてレンセン先生と名乗る位の人で集められた楽団ですのでこのレンセン先生がピアノス

トだったのかも知れません。

K 152 のレコードに既に作曲者として名を挙げているホセ センティス (José Sentis) はヨーロッパで1920年頃からタンゴ演奏で大きな力を持っておりました。センティスの出生や没年・国籍はさっぱり判りませんがスペイン人ではないかと思われまます。所謂ヨーロッパタンゴのカタマリのようなリズムで通しており、配下にダヨス ベラとかホセ ルケッシ・マレーク ウエーバー、フォン ゲッツィ等孫弟子に到るまでバイオリン奏法にずっと影響を与えた人です。この人はサラベール レコード (Disque Sarabert) とか雄鶏マークで有名なパテ レコード (Disque Pathé) に自作を含めて沢山のアルゼンチン タンゴを録音しております。しかしそのスタイルがハバナナ調を主体としたタンゴでとても本物とは言えませんが、何となくジブシー楽団に通じるものがありそのレパートリーの一部を紹介いたします。

<b>Pathé</b>	<b>6888</b>	<b>* El Bandolero (*Granato)</b>	<b>c/Sardelia</b>	<b>Mt.7778</b>	
		<b>El triste enamorado (Granato)</b>		<b>Mt.7767</b>	
		*註 弦楽器のこと (ギターの種類)			
		註 グラナートは後にCarlo Granato と名が出ます。			
	<b>6893</b>	<b>Nunca más (Lomuto)</b>		<b>Mt.7847</b>	
		<b>Oerguito (J.M.Lucchesi)</b>		<b>Mt.7850</b>	
	<b>8058</b>	<b>Dolores (José Sentis) Marche</b>	<b>Trío José Sentis</b>	<b>Mt.5004</b>	
		<b>El más criollo (José Sentis)</b>	<b>=</b>	<b>Mt.5009</b>	
	<b>8246</b>	<b>Pierrette (Lebeurdy)</b>	<b>Trío José Sentis</b>	<b>Mt.5127</b>	
		<b>De 5 a 7 (José Sentis)</b>	<b>=</b>	<b>Mt.5072</b>	
	<b>8307</b>	<b>Clochettes D'Amour (Pineras)</b>	<b>Habanera Tango</b>	<b>Mt.5692</b>	
		<b>La tasse de Thé (Joseph Szule)</b>	<b>F. t</b>	<b>Mt.5691</b>	
	<b>8315</b>	<b>Jueves (Toronzo)</b>	<b>Orchestre Symphonique José Sentis</b>		<b>Mt.5882</b>
		<b>Peggy (Neil Monsan)</b>	<b>=</b>	<b>Mt.5879</b>	
	<b>8316</b>	<b>9 Julio (José S Padula)</b>	<b>Orch.Symphonique J.Sentis</b>		<b>Mt.5881</b>
		<b>Robert Macaire (Maurice Yvan)</b>	<b>F.t =</b>	<b>Mt.5880</b>	
	<b>8321</b>	<b>Capricho (José Sentis)</b>	<b>Orchestre Mondain Dir. José Sentis</b>		<b>Mt.6089</b>
		<b>My Isle of Golden Dreams (W.Blouffus)</b>	<b>Boston</b>	<b>Mt.6099</b>	
	<b>8322</b>	<b>Cielito mío (O.N.Fresedo)</b>		<b>Mt.6087</b>	
		<b>La Roque de la Pantin (Borel Clerc)</b>	<b>F.t</b>	<b>Mt.6098</b>	
	<b>8323</b>	<b>Mangia Mangia Papirusa (A.de Bassi)</b>		<b>Mt.6088</b>	
		<b>Sunshine (Jack Rymer) Boston</b>		<b>Mt.6100</b>	
	<b>8332</b>	<b>Callete Roberto (B.Calvete)</b>		<b>Mt.6197</b>	
		<b>Lula (Borel Clerc)</b>	<b>Vals</b>	<b>Mt.6200</b>	
	<b>8354</b>	<b>Sufra!,,, (F.Canaro)</b>		<b>Mt.6760</b>	
		<b>La violetera (J/Padilla)</b>		<b>Mt.6978</b>	
	<b>8356</b>	<b>Pura clase (A.Rosquellas)</b>		<b>Mt.6774</b>	
		<b>Hawaiiana (R.Wuleput)</b>	<b>Vals Hawaiian</b>	<b>Mt.6721</b>	
	<b>8364</b>	<b>El pillín (F.Canaro)</b>		<b>Mt.6981</b>	
		<b>Tanagra (José Sentis)</b>		<b>Mt.6980</b>	
	<b>8366</b>	<b>Camarada (F.y J. Canara)</b>		<b>Mt.6983</b>	
		<b>Loca (M.Jovés)</b>		<b>Mt.6856</b>	

8381	Celosa (Manuel Jovés) Por ti (José Sentis)	c/José Uguiri =	Mt.7422 Mt.7418
8382	Piccolo navio (Riccardi) Coqueta!,,, (José Sentis)	c/José Uguiri =	Mt.7420 Mt.7419
8397	La garçonniere (Canaro) Madre (Pracánico)	c/José Uguini =	Mt.7549 Mt.7561
8398	Sentimiento gaucho (Canaro) Mi nostalgia (José Sentis)	c/José Uguini =	Mt.7548 Mt.7550
8414	Muñecas del amor (Carlo Granato) Suspiros (José Sentis)		Mt.7632 Mt.7631
8420	Tango vidalita (José Sentis) Cádiz (José Sentis)	P.d	Mt.7648 Mt.7647
8422	Cabellos cortos (Calvete) Sultana (José Sentis)	P.d	Mt.7651 Mt.7646
8423	Pobre francesita (Manuel Joves) Quasimodo (José Sentis)		Mt.7653 Mt.7654
8436	El fajador (Granato) Violeta (José Sentis)		Mt.7690 Mt.7689
8492	Negríta (Duarte) Incertidumbre	c/Thote	Mt.7710 Mt.7688
8503	A media luz (Edgardo Donato) Dime porque la quiero tanto (Carriedo y Aguido)	c/Diego Segarra	Mt.8272 Mt.8273

以上26枚全てパテ縦電動盤です。種々著名なタンゴの録音がありますので参照して下さい。  
亦サラベール レコード：Disque Francis Salabert では下記のレコードが手許に有りました。

#### Orquestre Mondain José Sentis

160	Suspiros (Sentis) Tango D'Orient (Haia Stone)		Mt.NS516 Mt.NS598
NoS542	Rosa de fuego (Manuel Joves) Tango sentimental (=)	c/José Uguiri	Mt.:NS157 Mt.:NS160
NoS543	Buenos Ayres (Manuel Joves) Mi Provincia (〃)	c/José Uguiri 〃	Mt.:NS159 Mt.:NS161
No100510	Criollita (José Sentis) Tanagra (〃)		Mt.:NS59 Mt.:NS58



160



NoS542



NoS543

尚昭和の初期にこのホセ センティスと思われるレコードが名古屋の大和蓄音器商会から発売されています。

アサヒレコード

**193 Capricho (José Sentis) 狂想曲**  
**Das Lied von der Heimat(Kurt Lubbe) Shimmy 愛情の歌**  
**Casino Orchestra**

私はこれまでダヨス ベラ楽団 (ダホス ベラ楽団) はヨーロッパに於けるポピュラー音楽団と解しておりました。事実、日本コロムビア社のレコード カタログ (昭和10年及び昭和15年版) によりますと、その発売レコードは下記の様になっております。



アサヒ 193

ダヨス	ベラ管弦楽団	昭和10年版
<b>J1892</b>	ミッキー・マウスの結婚 (F) 狼なんか怖くない	ゴールドニアンサンプル
<b>J1737</b>	巴里恋しや (W) サ・セ・パリ (O)	
<b>J1743</b>	唯一度だけ (F) 恋と歓楽 (W)	
<b>J1776</b>	ジャネットに恋を唄ひぬ (T) 今宵の胸の客 (F)	
<b>J1832</b>	男は度胸 (O) 幸福への一筋道 (W)	
<b>J1833</b>	私にはわからない (W) 君のみぞ知る (W)	
<b>J1846</b>	気になるお方 (F) 恋人同士 (W)	
<b>J1715</b>	君いまさぬ日 (T) シニョーラ (W)	ポール アブラハム管弦楽団
<b>J1849</b>	ただひとりを想ふ (W) 素晴らしい瞳 (T)	フレッド バード管弦楽団
<b>J1816</b>	ヴォルガの漣 (T) ヴォルガ・マーチ (O)	オットー ドブリント管弦楽団
<b>J1868</b>	ノスタルジア (T) お母さん (T)	
<b>J1890</b>	一番良い女のお友達 (F) 貴女の瞳はヴォルガの様に (T)	
<b>J1910</b>	薔薇のタンゴ (T) ツイゴイネルワイゼン (W)	
<b>J1959</b>	チューピーの軍隊 (O) 御免なさい奥様 (T)	



- J1979 リオ・リタお前の為に (P)  
 優しいワルツ (W)  
 J1775 君居まさぬ日 (T)  
 シニョーラ (W) ポール アブラハム管弦楽団

ダヨス ベラ コンサート管弦楽団 (昭和14年版)

- J3273 歌劇「カルメン」幻想曲  
 J3268 歌劇「蝶々夫人」幻想曲  
 J1744 「詩人と農夫」  
 J1893 スーヴニール  
 天使のセレナーデ  
 J2033 錫の兵隊さんの観兵式  
 一寸法師の行列  
 J2273 ヴォルガ河を廻りて  
 J2574 きよしこのよる  
 よろこばしき主よ  
 J2686 小鳥屋にて  
 森の郵便馬車  
 J2708 口笛吹きと犬  
 小鳥のセレナーデ  
 J2151 メリー・ウイドウ・ワルツ  
 J2094 フニクリ・フニクラ (O)  
 リリウ (O)  
 J2567 ロマネスカ (T)  
 嫉妬 (T)  
 J2719 黒ん坊 (T)  
 ペチータ (T)

ダヨス ベラ コンサート管弦楽団 昭和15年版

- JX 5 春の声 (W)  
 朝刊 (W)

ダヨス ベラ楽団は軽音楽の場合はそのまま、管弦楽団としておりましたが、クラシック音楽の演奏の場合は、コンサート管弦楽団と称していたようです。

ダヨス ベラの国籍も生・没年も判りませんが、コロンビア社がダヨスと称しているところを見るとドイツ系かと思います。

それに楽器は多分ビオリンであると思います。ドイツのオークションで偶然入手しましたスペインオデオンのレコードに

**Orqueta Tzigone Dajos Béla**

**Odeon 102122**

**Organito de la tarde (C.Castillo)**

**Julián (Edgardo Donato)**

**Mt.:Be5076**

**Mt.:Be5077**



102121

ここで注目したいのはわざわざクレジットにTziganaの一文字を入れていることです。これは本人がジプシーであると言っている様なもので、それでこの後の数多いレコードの曲種が多岐にわたることが諒解出来ます。

日本で最初に発売されたのはパーロフォン レコードだと思います。(推定昭和8年)

**E 5395 Mimosa (Martine Afades)  
Negrita (Duarte)**

**Mt.:Be6073  
Mt.:Be6072**

これで明らかにドイツのオデオン社の原盤を日本パーロフォン社が仕入れて、プレスをしたのだと思います。しかし原盤番号では約1000番の差があるのは（この間推定1929年11月～1930年6月の約8ヶ月間）この間にダヨス ベラはジプシー楽団からダンス楽団に衣替えをしていました。その上にコンサート楽団と名乗ってジプシー楽団から格上の楽団へと昇格（本人はそのつもり）したのですが、レコードを聴く限りではその様に取り扱われなかったと考えます。

註：日本コロムビア レコードのカタログによりますと

F：フォックストロット

O：ワン ステップ 又はシックス エイト

W：ワルツ

T：タンゴ

B：ブルース

P：パソドブレ

R：ルムバ

ダヨス ベラはこの他にもアルゼンチンタンゴとして“マードレ”（F. プラカニコ作）とか“コラソン トリステ” “おいでよベータ”のレコードがあったと故大森 茂氏が教えて下さいました。尚大森氏はダヨス ベラの父はロシア人、母はハンガリー人（生年月日は不詳）と示しておられます。

註：このカタログではクラシックのレパートリーの曲は曲種（リズム）が省かれておりますが、ダンス レコードには全部曲種が書いてあります。



Pathé 8316



Pathé 8322



Pathé 8323



Pathé 8354



Pathé 8356



Pathé 8366



Pathé 8397



Pathé 8503

## PATHÉ RECORDS タテ震動

## Orchestre Mondain José Sentis

1

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞作曲(作者)	歌手	日本発売レコード	CD
Pathé	6888	7778	1930?	El Bandolero	Tango	Granato	Sardella		
"	6893	7767	"	El Triste Enamorado	Tango	Granato			
"	8058	7847	"	Nunca más	Tango	Lomuto			
"		7850	"	Perquito	Tango	J.M. Lucchesi			
"		5004	1931?	Dolorés	Marche	José Sentis		Trío José Sentis	
"		5009	"	El más Criollo	Tango	José Sentis		Trío José Sentis	
"	8246	5127	"	Pierrette	Tango	Lebeurdy		Trío José Sentis	
"		5072	"	De 5 a 7	Tango	José Sentis		Trío José Sentis	
"	8307	5692	1932?	Clochettes D'Amour	Habanera Tango	Pineras			
"		5691	"	La Tasse de Thé	F.t.	Joseph Szule			
"	8315	5882	"	Jueves	Tango	Toronzo		Orquesta tre Symphonique José Santis	
"		5879	"	Peggy	Tango	Neil Monçon		"	
"	8316	5881	"	9 Julio	Tango	José & Padula		"	
"		5880	"	Robert Macaire	F.T.	Maurice Yvan		"	
"	8321	6089	"	Capricho	Tango	José Sentis		Orquesta Mondain José Santis	
"		6099	"	My Isla of Golden Dream	Boston	W.Blouffuss		"	
"	8322	6087	"	Cielito Mio	Tango	O.N. Fresedo			
"		6098	"	La Poupee de la Pantin	F.t.	Borel Clerc			
"	8323	6088	"	Mangia Mangia, Papirusa	Tango	A.de Bassi			
"		6100	"	Sunshine	Boston	Jack Rymner			
"	8332	6197	"	Callete Roberto	Tango	B.Calvete			
"		6200	"	Lula	Vals	Borel Clerc			

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞作曲(作者)	歌手	日本発売レコード	CD
Pathé	8354	6760	1932	Sufra!...	Tango	F.Canaro			
"	8356	6978	1932	La Violetera	Tango	J.Padilla			
"		6774	"	Pura Clase	Tango	A.Rosquellas			
"		6721	"	Hawaiiana	Vals Hawaiian	R. Wulleput			
"	8364	6981	"	El Pillín	Tango	F.Canaro			
"		6980	"	Tanagra	Tango	José Sentis			
"	8366	6983	"	Camaroda	Tango	F. Y. J. Canaro			
"		6856	"	Loca	Tango	M.Jovés			
"	8381	7422	"	Celosa	Tango	Manuel Jovés	José Urquiri		
"		7418	"	Por ti l...	Tango	José Sentis	José Urquiri		
"	8382	7420	"	Piccolo Navio	Tango	Ricardi	José Urquiri		
"		7419	"	Coqueta!...	Tango	José Sentis	"		
"	8397	7549	"	La Garçonnière	Tango	Canaro	José Urquiri		
"		7561	"	Madre	Tango	Pracánico	"		
"	8398	7548	"	Sentimiento Gaucho	Tango	Canaro	"		
"		7550	"	Mi Nostalgia	Tango	José Sentis	"		
"	8414	7632	1933?	Muñecas del amor	Tango	Carlo Granato			
"		7631		Suspiros	Tango	José Sentis			
"	8420	7648		Tango Vidalita	Tango	José Sentis			
"		7647		Cádiz	P.d.	José Sentis			
"	8422	7651		Cabellos Cortos	Tango	Calvele			
"		7646		Sultana	P.d.	José Sentis			

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞、作曲(作者)	歌手	日本発売レコード	CD
Pathé	8423	7653	1933?	Pobre Francesita	Tango	Manuel Jovés			
"	8436	7654	"	Quasimodo	Tango	José Sentis			
"		7690	"	El Fajador	Tango	Granato			
"		7689	"	Violeta	Tango	José Sentis			
"	8442	7710	"	Negrta	Tango	Duarte			
"		7688	"	Incertidumbre	Tango	不明	Thote		
"	8503	8272	"	A media luz	Tango	Edgardo Donato	Diego Segarra		
"		8273	"	Dime porque la quiero tanto	Tango	Carriedo y Aguido			

Disque Francis Salabert. Orchestre Mondain José Sentis

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞、作曲(作者)	歌手	日本発売レコード	CD
Francis Salabert	160	516	1925?	Suspiros	Tango	Sentis			
"		598	"	Tango D'Orient	Tango	Haia Stone			
"	542	157	1927?	Rosa de fuego	Tango	Manuel Jovés			
"		160	"	Tango Sentimental	Tango	Manuel Jovés	José Urquiri		
"	543	159	"	Buenos Ayres	Tango	Manuel Jovés	José Urquiri		
"		161	"	Mi Provincia	Tango	Manuel Jovés	José Urquiri		
"	100510	59	"	Criollita	Tango	José Sentis			
"		58	"	Tanagra	Tango	José Sentis			

大和蓄音器商会アサヒレコード

日本アサヒ	レコード番号	マトリス	昭和4年?	曲名	曲種	作詞、作曲(作者)	歌手	日本発売レコード	CD
	193	193A		Capricho	Tango	José Sentis		Casino Orchestra	
		193B	"	Das Lied von der Heimat	Simmy	Kurt Lubbe		"	

編集部注：このディスクグラフィの曲名や人名の表記にはCDやLPで一般的に使われているものと異なるものがありますが、これは原盤のレーベルの表記に従ったものであります

# André y Su Conjunto (補遺)

角田 昭(船橋市)

本誌26号にAndré y Su Conjuntoについてレポートしたが、その後追加の情報が入ったことや、上記レポートでコメントをかなり削除したために多少説明不足を感じずる部分があることから、ここで多少の補足をさせて頂くこととしたい。

## 1. 日本発売盤について

26号では、Andréについて国内発売盤は1枚もない、と述べたのだが、その後芝野史郎氏より「日本Philipsから、ラテンもののLPが発売されて居り、自分は2枚を所有して居るが、他にもまだ国内盤があるのではないか。このLPの監修は永田文夫氏なので同氏に照会しては如何」との連絡があった。折良く、昨年末同氏が“Nochero Soy”のコンサートに出演された際、およそ50年ぶりにお目にかかる機会があり、早速上記のレポートを同封して情報提供方をお願いした処、次のような回答を頂いた。

日本Philipsからは、計3枚のLPが出ている。即ち、

☆ SFX-7100 André and his Rumba Magics / Golden Rumba Rhapsody

Rumba Rhapsody / Historia De Un Amor / Besame Mucho / Malagueña

など14曲。

タンゴとしては、La Cumparsita, Jalousyの2曲が収録されている。

(1967年12月新譜)

☆ SFX-7108 André and his Rumba Magics / Golden Rumba Fantasy

Aquellos Ojos Verdes / Cielito Lindo / Siboney 他14曲。

タンゴのEl Día Que Me Quieras及びNostalgiasも含まれている。

(1968年5月新譜)



SFX-7108



SFX-7100

何れもRumbaを強調したタイトルとなっているが、実際にはBoleroなどラテン・リズム全般をカバーしている。

☆ ED-46 André and his Rumba Magics / Golden De Lux Rumba Rumba Rumba

これは上記の2枚のLPの曲目から、タンゴを除くラテン・ナンバーのみを抜粋再編集したものである。(1970年4月新譜)

尚、この際日本Philipsからは、これら3枚以外のLPについての情報や、André関連の情報は全く提供されなかった由である。

当方にて亜Philipsの原盤の曲目をチェックしていた処、これらは共に亜Philips 85552-PY “Melodías Inolvidables” 及び85559-PY “Música Y Perfume” からの編集盤であることが判った。但し、SFX-7108については、上記2枚の原盤に含まれていない“Taboo”が収録されて居り、この出処は今のところ不明である。

また、1969年12月新譜のSFX-7100に対して、85552-PY及び85559-PYの双方から抜粋されていることから、この2枚の録音時期は共に1967年以前であるべきで、本誌26号のディスコグラフィアでは、85559-PYの発売時期を1968年と推定しているが、これは1967年に修正する方が妥当なようだ。

SFX-7100及び7108は、共に亜国での原盤発売から殆ど時を経ずして日本でも発売されたことも判った。

## 2. 海外盤についての追加情報

レポート発表後、更に下記のLPが入手可能との情報があった。何れもラテンものばかりで収録曲も不明であり、発注もしていない。タンゴの新盤の情報はなかった。

☆ 亜Philips P-13903-L	André / Bomba No.1	(1960)
☆ 亜Philips 85522	André / Zamba 2	(1965)
☆ 亜Philips 82099	André / Internacional	(1965)
☆ 西Philips (EP)	André / Hello Dolly / La Boheme	(1966)
☆ 亜Philips 8262	André / Melodías Para Ti	(1975)
☆ 蘭Philips 6447901	André / Latin Mood	(不明)
☆ 蘭Philips 842795	André / Latin Cocktail Hour	(不明)

## 3. 発売年次の推定の根拠について

AndréのLPは、当初からイージー・リスニングとの意図が明確であったためか、ジャケットにライナー・ノートが付いているものが皆無である。その代り、“Otros Discos”として、ジャケットの写真、レコード番号、カセット番号、時には収録曲を全曲紹介するなどした広告が付いて居り、これはそれなりに参考にはなるのだが、それ以外の詳しい情報は得られない。唯、初期のLPの中に、20行以内の短いコメントの付いたものが2～3枚あった。その1枚(“Amor Y Tango”)に、「Este es el tercer disco que André dedica a la interpretación de Tangos famosos. Primero fue “Tangos Para Ti”, luego “Susurrando Tangos”, ahora “Amor Y Tango”」とあり、これらによってタンゴの最初の3枚が特定出来る。そして、この3枚から抜粋した編集盤の1枚のラベルに、トラック番号別に「P=1963,



P=1964, P=1965」との記載があり、これによって上記3枚の発売年次が特定出来た。

既に26号で述べたように、1973年以降は夫々のLPのラベルに「P = 19xx」と明示されるようになっているが、1965～1972年の間については、同時期のLPのレコード番号から推定することになる。この時期、垂Philipsに在籍したアルティスタとしては、Horacio Salgán, Edmundo Rivero, Osvaldo Pugliese, Ástor Piazzolla等がいるが、有難いことにこれらのすべてについて、Lefcovich等のディスクグラフィアが揃っている。勿論、これらの資料は録音年月日が基準となっているのに対してAndréの方は発売年次しか判らないのだが、これらの整合はさして難事ではない。

彼等のLPを日付順に並べておいて、そこへAndréのレコード番号を当てはめて行ったのだが、これによって得られたAndréのLPの推定発売年次は、せいぜい1年程度の誤差の範囲にとどまるものと考えている。

但し、2枚組の廉価版アルバムについては、通常のレコード番号の系列には属さず、特別なシリーズ番号が付けられて居り、これらについては収録曲のうち最新の年次の当年または翌年を推定年次としているが、更に後年の発売である可能性は残っている。

#### 4. Jaime GosisとDante Amicarelliの交代時期について

この二人の主演の交代時期については、当初から関心があった、入手済のLPのうち最も古い録音の“Susurrando Tangos” (1964年) と、最も新しい録音の“Tangos Con Amor” (1968年) について、ピアノの音を聴き較べてみると、確かに両者の音の響き方に差異があるように感じられる。しかし、この2枚のLPの音を参考にしながら、手持ちのLPを順次聴いて行ったのだが、遂に私の耳ではその境目が聴きとれなかった。一つには、録音時のマイク・セッティングやミキシングのあり方などでも音は変わるであろうし、或いは又、Amicarelliが交代を判然とさせないために、Gosisの奏法に合わせた可能性もあるが、私は自身の耳に対する自信を少しばかり失った。

最近のことだが、別件でPiazzollaの文献をチェックする機会があり、何かの本を調べていた処、斎藤充正氏の著書の中でGosisが1975年7月にこの世を去った旨が記されていた。その目線でAndréのディスクグラフィアを見直してみると、1973年の“Pichuco!, Qué Tangos Tenés” から後、1974～1975年の2年間、新録のブランクがある。これがGosisの病氣療養と関係があることは、略々間違いないだろう。1976年の“Gardel, Qué Tangos Tenés” 以降はAmicarelliであることは間違いないとして、Gosisは何時頃から床についたのであろうか。斎藤氏は「脳を冒されての悲惨な最期」と述べておられる。とすれば、療養期間はかなり長期に涉った可能性が高く、前述の“Pichuco…”あたりがGosisとAmicarelliの境界線か、と考える。

私は数日前、日本発売の2枚を聴いていた。永田氏に照会の手紙を差し上げた直後、神保町の富士レコードから入手できたものだったが、この時期のGosisは実に快調だったようで、特にSFX-7108でのピアノ・タッチにあまりに強烈であり、“Nostalgias”などは、もう少しソフトに弾いた方がこの曲の曲想には相応しいのではないか、などと余計な事を考える程だった。それだけにGosisの死去は、信じられない気持である。

今、私はタンゴの資料を整備している処なのだが、その過程でAmicarelliの1977年頃の作品に“Psicoterapia (シコテラピア)” という曲があるのに気付いた。精神(心理)療法と言う意味だが、この作曲時期からして多分Gosisの最後がモチーフであると推察される。遅ればせ乍ら、御冥福を祈る。

フランチェニ＝ポンティエル楽団のディスコグラフィの追補

(編集部より)本誌27号所載のフランチェニ＝ポンティエル楽団のディスコグラフィにはアルゼンチン発売の復刻LPのデータが含まれていないのご指摘を山本 幸洋氏からいただきました。そのご指摘を受けて同氏作成によるフランチェニ＝ポンティエル楽団録音のアルゼンチン復刻LPのデータを追補としてここに掲載いたします。

作成: 山本 幸洋

録音日	録音番号	曲名	曲種	LP (アルゼンチン)
1946-01-29	60-0877	MARGO	tango	
1946-01-29	60-0877	SIRVA OTRA COPA	tango	
1946-03-14	60-0903	QUE ME VAN HABLAR DE AMOR	tango	CAL-2953
1946-03-14	60-0903	EL MISMO DOLOR	vals	AVL-3379
1946-05-17	60-0947	REMOLINO	tango	CAL-2953
1946-05-17	60-0947	TRAPITOS	milonga	
1946-09-04	60-1039	CON ELLA EN EL MAR	vals	AVL-3379, CAL-2953
1946-09-04	60-1039	EL MILAGRO	tango	CAL-2953
1946-10-21	60-1081	ARRABAL	tango	CAL-3113
1946-10-21	60-1081	COBRATE Y DAME EL VUELTO	milonga	AVL-3379
1946-11-13	60-1117	ALMA DE BOHEMIO	tango	AVL-3379, CAL-2953
1946-11-13	60-1117	PICHUCO	tango	CAL-3113
1946-12-16	60-1155	MILONGA DE ESQUINA	milonga	
1946-12-16	60-1155	LA CUMPARSITA	tango	
1947-01-16	60-1189	SIN PALABRAS	tango	CAL-2953
1947-01-16	60-1189	ADIÓS MARINERO	tango	CAL-2953
1947-03-05	60-1246	LA YUMBA	tango	CAL-3113
1947-03-05	60-1246	A SU MEMORIA	vals	
1947-04-02	60-1265	Y DICEN QUE NO TE QUIERO	tango	
1947-04-02	60-1265	DEJAME NO QUIERO VERTE NUNCA MÁS	tango	
1947-06-11	60-1352	LA CULPA ES MIA	tango	
1947-06-11	60-1352	LOS DESPOJOS	tango	
1947-07-08	60-1370	ÓYEME	tango	
1947-07-08	60-1370	TIGRE VIEJO	tango	CAL-3074
1947-08-13	60-1409	UNO Y UNO	tango	CAL-2953
1947-08-13	60-1409	CAMOFLEGE	tango	
1947-09-24	60-1440	BOEDO	tango	CAL-2935, CAL-3113
1947-09-24	60-1440	LA QUE NUNCA TUVO NOVIO	tango	AVL-3379
1947-11-10	60-1490	LA BEBA	tango	CAL-3113
1947-11-10	60-1490	POR "H" O POR "B"	milonga	CAL-2953
1948-02-04	60-1552	PRIMER BESO	vals	CAL-2953
1948-02-04	60-1552	CANCIÓN PARA UN BREVE FINAL	tango	AVL-3379
1948-03-24	60-1561	UNA CARTA PARA ITALIA	tango	
1948-03-24	60-1561	A ZÁRATE	tango	CAL-3113
1948-04-08	60-1589	COMO TÚ	tango	CAL-2953
1948-04-08	60-1589	EL PECOSO	tango	
1948-05-10	60-1592	MATE AMARGO	ranchera	
1948-05-10	60-1592	A MI MADRE	vals	AVL-3357
1948-09-16	60-1675	CARGAMENTO	milonga	
1948-09-16	60-1675	LOS DÍAS PASARAN	tango	
1948-09-30	60-1698	REPÚBLICA ARGENTINA	vals	
1948-09-30	60-1698	UN DÍA MAS	tango	
1949-01-28	60-1735	A JOSÉ MANUEL MORENO	tango	
1949-01-28	60-1735	CUATRO LÍNEAS PARA EL CIELO	tango	
1949-02-03	60-1741	CLAVELES BLANCOS	tango	AVL-3379
1949-02-03	60-1741	ALERGIA	milonga	
1949-08-01	60-1826	CALESITA DE MI BARRIO	tango	
1949-08-01	60-1826	EL HIJO TRISTE	vals	CAL-2935
1949-09-27	60-1845	LLORO COMO UNA MUJER	tango	CAL-2935
1949-09-27	60-1845	SANTA MIA	tango	
1949-11-10	60-1868	UNA HISTORIA COMO TANTAS	tango	CAL-2953
1949-11-10	60-1868	EL APACHE ARGENTINO	tango	CAL-3113
1950-03-07	60-1923	EL CIRUJA	tango	AVL-3379, GSO80021, AVL-3450
1950-03-07	60-1923	CHE BANDONEÓN	tango	CAL-2953
1950-03-22	60-1928	PARA LUCIRSE	tango	
1950-03-22	60-1928	TU PIEL DE JAZMIN	tango	
1950-05-11	60-1974	EN LA CAPILLA	tango	
1950-05-11	60-1974	TAN SOLO POR VERTE	tango	AVL-3379, GSO80021, AVL-3450
1950-06-01	60-1980	A LOS AMIGOS	tango	CAL-3113
1950-06-01	60-1980	CERRASTE LOS OJOS	vals	CAL-2953
1950-12-05	60-2073	DELIRIO	fantasiaen tango	CAL-3113
1950-12-05	60-2073	DICEN QUE DICEN	tango	CAL-2935
1951-04-18	63-0025	A DOS PUNTAS	tango	CAL-3113
1951-04-18	63-0025	MI SENTENCIA	tango	CAL-2935
1951-05-11	63-0056	DISCEPOLÍN	tango	
1951-05-11	63-0056	PRINCESA DEL FANGO	tango	CAL-2935
1951-07-10	63-0118	A PEDIDO	tango	
1951-07-10	63-0118	PA' QUE SEPAN COMO SOY	tango	GSO80021, AVL-3450
1952-01-23	63-0139	A MIS AMORES	tango	
1952-01-23	63-0139	UNA TRISTE VERDAD	vals	
1952-02-06	63-0145	EL TOBIANO	tango	
1952-02-06	63-0145	UN ALMA BUENA	tango	CAL-2935
1952-02-20	63-0166	BLUE TANGO	tango	
1952-02-20	63-0166	PECADO	tango	

録音日	録音番号	曲名	曲種	LP (アルゼンチン)
1952-04-21	63-0173	CONTRATIEMPO	tango	
1952-06-19	63-0173	POR SEGUIDORA Y POR FIEL	tango	CAL-3087
1952-06-17	63-0172	ANOHE	tango	
1952-06-17	63-0172	SELECCIÓN DE VALSES ( UNA LÁGRIMA = A MI MADRE = DESDE EL ALMA = PALOMITA BLANCA = AMOR Y CELO = UN PLACER )	vals	
1952-08-21	63-0194	POR UNA MALA MUJER	tango	CAL-3087
1952-08-21	63-0194	CERTIFICAO	milonga	
1952-09-17	63-0209	EL ENTRERRIANO	tango	
1952-09-17	63-0209	ÓYEME MAMA	tango	
1952-10-24	63-0223	A LA GUARDIA VIEJA	tango	CAL-2935, CAL-3113
1952-10-24	63-0223	TENEMOS QUE ABRIRNOS	tango	CAL-2935
1952-12-10	63-0253	LA CANCIÓN INOLVIDABLE	tango	
1952-12-10	63-0253	MANOS ADORADAS	vals	
1952-12-12	63-0254	EL RETOQUE	tango	
1952-12-12	63-0254	VIEJO SMOKING	tango	AVL-3379, GSO80021, AVL-3450
1953-02-27	63-0272	UNA LÁGRIMA	vals	
1953-02-27	63-0272	OLVIDAO	tango	AVL-3379, GSO80021, AVL-3450
1953-05-06	63-0312	SI SOS BRUJO	tango	
1953-05-06	63-0312	LLUVIA SOBRE EL MAR	tango	
	63-0395A*	EL MILAGRO	tango	
	63-0395B*	CON ELLA EN EL MAR	vals	
	63-0167A*	CERRASTE LOS OJOS	vals	
	63-0167B*	A LOS AMIGOS	tango	
1953-09-22	68-1148	CHIQUE	tango	CAL-2935, CAL-3113
1953-09-22	68-1148	TRISTE FLOR DE TANGO	tango	
1953-09-22	68-1149	UNA CANCIÓN	tango	
1953-09-22	68-1149	PROHIBIDO	tango	AVL-3379
1953-10-23	68-1218	DERECHO VIEJO	tango	
1953-10-23	68-1218	LAS COSAS QUE ME HAN QUEDADO	milonga	
1953-12-07	68-1366	TAQUITO MILITAR	milonga	CAL-2935, CAL-3113
1953-12-07	68-1366	PA' QUE SE ACUERDEN DE MI	tango	
1954-01-15	68-1452	CARICIAS PERDIDAS	vals	
1954-01-15	68-1452	TENGO UN AMIGO	tango	
1954-04-08	68-1599	AZABACHE	milonga	
1954-04-08	68-1599	SIN LÁGRIMAS	tango	
1954-07-06	68-1724	CUANDO TALLA UN BANDONEÓN	tango	
1954-07-06	68-1724	LO QUE VENDRA	tango	
1954-10-21	68-1926	DE MI CORAZÓN	tango	
1954-10-21	68-1914	LOS COSOS DE AL LAO	tango	
1954-11-04	68-1914	PERDONAME	tango	
1954-11-04	68-1926	NOCHE DE LOCURA	tango	AVL-3379
1955-03-02	68-2024	RONDA AZUL	tango	
1955-03-02	68-2024	POR UNA MUÑECA	tango	
1955-06-13	68-2144	EL REMATE	tango	
1955-06-13	68-2144	BARRA QUERIDA	tango	
1955-06-13	68-2145	CORAZON DE ORO	vals	
1955-06-13	68-2145	CUARTITO AZUL	tango	
1955-07-21	68-2192	TANGUERA	momento de tango	CAL-3113
1955-07-21	68-2192	POR UNOS OJOS NEGROS	tango	
	68-1394A*	UNA CARTA PARA ITALIA	tango	
	68-1394B*	A ZÁRATE	tango	
	68-2221A*	A ZÁRATE	tango	
	68-2221B*	A MI MADRE	vals	
	68-2205A*	EL HIJO TRISTE	vals	
	68-2205B*	CALESITA DE BARRIO	tango	
1972-11-	AVS-4178	ADIÓS NONINO	tango	
1972-11-	AVS-4178	EL AMANECER	tango	
1972-11-	AVS-4178	CHIQUE	tango	
1972-11-	AVS-4178	A LOS AMIGOS	tango	
1972-11-	AVS-4178	LA CUMPARSITA	tango	
1972-11-	AVS-4178	TANGUERA	tango	
1972-11-	AVS-4178	INSPIRACIÓN	tango	
1972-11-	AVS-4178	TEMA OTONAL	tango	
1972-11-	AVS-4178	A MEDIA LUZ	tango	
1972-11-	AVS-4178	TAQUITO MILITAR	milonga	
1972-11-	AVS-4178	EL CHOCLO	tango	
1972-11-	AVS-4178	A LA GRAN MUÑECA	tango	
1973-05-	SWX-7016	CANARO EN PARÍS	tango	
1973-05-	SWX-7016	CUANDO LLORA LA MILONGA	tango	
1973-05-	SWX-7016	RE FA SI	tango	
1973-05-	SWX-7016	QUEJAS DE BANDONEÓN	tango	
1973-05-	SWX-7016	VERANO PORTENO	tango	
1973-05-	SWX-7016	DON JUAN	tango	
1973-05-	SWX-7016	NUEVE DE JULIO	tango	
1973-05-	SWX-7016	CAMINITO	tango	
1973-05-	SWX-7016	EL ENTRERRIANO	tango	
1973-05-	SWX-7016	DERECHO VIEJO	tango	
1973-05-	SWX-7016	GRAN HOTEL VICTORIA	tango	
1973-05-	SWX-7016	FELICIA	tango	



AVL-3379



AVL-3540



CAL-3113



GSO-80021: AVL-3540と内容



CAL-2935



CAL-2953

# 🎵 私のタンゴ・データベース

## —遅れてきたタンゴ愛好家の楽しみ方—

佐藤 進(上尾市)

### レコードを聴く

レコード（録音した音源）を聴くといってもタンゴの場合（タンゴに限ったことではなく他のジャンルにも言えることですが、とくにタンゴは名演奏がはるか昔の時期に多いため）単に演奏を楽しむばかりでなく、演奏の背景にあるレコード（演奏に関する記録、例えば録音年、レコード番号、録音したレコード会社など）を調べて楽しむという聴き方があります。タンゴ好きが高じてタンゴ狂ともなると後者のレコードを調べて楽しむ聴き方に相当のエネルギーが割かれるようになります。

タンゴのレココンでもビクターの79000番台には素晴らしい演奏が多いとか、この演奏はフランシスコ・カナロの1926年の電気録音になって直後のものとか、ロベルト・フィルポはこの曲を生涯5回録音しているとか解説されます。それだけ演奏の背景にある記録には意味があるしまた愛好家の関心が高いといえます。レコード（音源）をレコード（記録）とともに聴くといえます。



### タンゴのデータベースへの取りかかり

長い間タンゴを継続的に聴き、その間に時間をかけて音源を集めてこられたベテランの方たちは、演奏に関する膨大なデータを記憶しているか、あるいはそれぞれ工夫して自身のデータベースを作られているのではないかと思います。

私は5年ほど前に会社勤めから解放され、待ち望んでいたタンゴに費やす時間を多く取れるようになりました。長い間タンゴと遠ざかっていたのでまず最初に始めたのは所有する音源の整理でした。音源をリストアップし、演奏者ごとに録音のリスト（曲名、録音年、原盤の番号）を作るというごく初歩的なデータベース作りに着手しました。こんな整理をしている間、いくつかのレココンに顔を出したり、音源（おもにCD）を買い集めたり、ディスクグラフィーを入手したり、集めたCDを聴いたりしているうちに、もっと便利なデータベースがあったらと思うようになりました。そのころ抱いたイメージとしては曲名、演奏者、録音年、レコード会社、作曲者、作詞者が検索できるようなものが望ましいとなんとなく考えていました。このくらいのデータベースを作るとなると私の実力では手に負えないので、データベース・ソフトをどこかから求めるとして、手持ちの音源は少ないとはいえこれだけのデータをインプットするには相当の時間がかかることになるため、しばらく躊躇していました。

そんな頃に知ったのがインターネットでダウン・ロードできるiTunesです。

## 私のタンゴデータベース

前置きが長くなりましたが、iTunesとは米国のアップル社が出している、自身の音楽ライブラリーをパソコンに構築するためのソフトウェア・アプリケーションです。機能としてはiTunes Store（アップル社の音楽配信店舗）からインターネットで購入した音楽を取り込んだり、CDなどから音楽を取り込んで、パソコンに自分の音楽コレクション（音楽ライブラリー）を作り、音楽コレクションの中から好きなものを携帯音楽プレーヤー（iPodやiPhoneなど）へ取り出すことです。調べているうちにiTunesの音楽ライブラリーとしての機能がきわめて優れものであり、私が考えていたタンゴ・データベースを作るのに適していることがわかりました。全ての録音した音源（SPやLPレコード、テープは若干手間がかかる）を取り込めるので、音付きのデータベースが作れるのが魅力です。ここではiTunesの紹介が目的ではないので、iTunesの詳しい説明は省くこととし、私がiTunesをベースに作った「私のタンゴ・データベース」を紹介します。

下記にあるのがデータベースの一部をパソコンの画面に表示したものです。

### パソコンに表示される演奏者ABC順のデータベースのレイアウト

名前	時間	アーティスト	ジャンル	作曲者	年	アルバム
La Tropilla - triunfo	4:29	Abrodos Hermanos	Odeon	Pardo M./Rocca S.	1965	EMI 50999-64047
Café 1900	6:01	Agri Antonio	Melopea	Piazzolla A.	1995	EMI 50999-64044
Eramos Tan Jovenes	3:30	Agri Antonio	Melopea	Federico L.	1995	EMI 50999-640463
El Choclo	2:59	Agri Antonio	Melopea	Villoldo Angel	1998	Melopea CDME-5124
Fuga Y Misterio	3:44	Agri Antonio	Columbia	Piazzolla A./Ferrer H.	1976	Sony BMG 8869 711
Te Odio	2:53	Aieta Anselmo	Columbia	Pracanico F.	1931	A.M.P. CD-1134
Muchachito	2:41	Aieta Anselmo	Columbia	Cardalo O.	1930	CTA-5047
Se Va La Vida	2:47	Argentina Imperio	Sp Col	Donato E./Mario L.	1930	Latina DL-140
El Firulete - milonga	1:55	Basso Jose	Odeon	Mores M./Taboada R.	1961	Odeon LDS-820
El Lloron	2:12	Basso Jose	Odeon	Radrizzani A.	1952	Odeon OR-9009
Lagrimas Y Sonrisas -v	2:41	Biagi Rodolfo	Odeon	De Gullo P.	1941	Odeon OR-8007
Buen Amigo	3:22	De Caro Julio	Odeon	De Caro J./Catan C.M.	1942	BATC ORQ-297
Cantando	2:37	Gomez-Vila	Victor	Simone M.	1933	Victor RA-5355
Mi Dolor	3:10	Marcucci Carlos	Victor	Marcucci C./Meanos M	1930	Victor 47363
El Choclo	3:03	美空ひばり	Columbia	Villoldo Angel	1953	Col COCP-34307

名前：曲の名前です。ABC順に表示できます。

時間：演奏時間

アーティスト：演奏者です。通常はABC順に表示しています。

演奏者は名字を先に、名前を後に表示しています。

一般にカナロ (Francisco Canaro) とかプグリエーセ (Osvaldo Pugliese) と呼ぶので、名字を頭に検索したほうが容易と考えました。

ジャンル：原盤の制作/発売会社 (レーベル) です。

作曲者：作曲者/作詞者で表示してあります。演奏者の表示同様名字を先に出しています。

年：録音年です。

アルバム：アルバム (このライブラリーに取り込んだレコード、テープやCD) の番号と名前を表示します。この画面では表示スペースが少ないため、アルバムの名前は表示されていません。

\* 表示のタイトルは固定されているためiTunesをそのまま使用している

## 曲のiTunes (データベース) への取り込み方

CDは最も簡単でそのまま取り込めます。CDを取り込む時にインターネットに接続してあれば、iTunesから自動的にCDDB (Gracenote Media Databaseと表示される) というデータベースにつないで、そこからCDにある曲の情報 (曲名、演奏者、演奏時間、アルバム名、作曲者名、作詞者名、ジャンル、など) を取り込み、曲ごとのもとデータに登録されます。

最近発売のCDのほとんどは自動的に情報が入手できます。

SPの復刻版などのCDでも曲の情報が入手できるものが増えてきました。

SP・LPレコードやカセット・テープの場合は直接iTunesに取り込む方法もありますが、私はいったんCDにしてから取り込むようにしています。これらの音源ではたとえCD化しても、CDDBからの情報は入手できません。まれにLPの場合CD化して取り込むと (おそらくそのLPの復刻版がCD化されており、その情報がCDDBに登録されていると思われる) 曲の情報が自動的に取り込めることがあります。

曲の情報がCDDBから自動的に取り込めない場合は、曲ごとのもとデータに手間をかけてインプットする必要があります。これが大変です。

SPなどをいったんCD化して取り込むメリットは、演奏者ごとのCDを作るようにしておけば、曲ごとのもとデータをインプットする時に共通情報は一括して入力できるので手間が省けます。

## 情報の変更や情報の新規インプット

インターネットのデータベース (CDDB) から入手する情報には表示方法が統一されてなかったり、情報の一部が不足していたり、まったく情報がないものもあります。

またレコードやテープから曲を取り入れた場合にはCDDBからは情報を入手できません。このためCDDBから取り入れた情報を変更したり、新たに情報を入力する必要がありますが、このときはiTunesにある下記の「情報入力用画面」から行います。

情報入力

名前

Te Odio

アーティスト

Aieta Anselmo

年

1931

アルバムアーティスト

Orquesta Tipica Aieta

トラック番号

7/20

アルバム

A.M.P. CD-1134 Que Lindos Tiempos Viejos Vol. 8

ディスク番号

グループ

BPM

作曲者

Pracanico Francisco

コメント

ジャンル

Columbia

情報入力画面

名前：曲名を入力する

アーティスト：演奏者を入力する

年：録音年を入力する

アルバムアーティスト：オルケスタ名を入力する

歌手がいる時は次のように歌手名を記入している。

Orquesta Tipica Francisco Canaro/Canta Charlo

トラック番号：CDから取り込んだ時のCDの曲の順序。常に自動的に取り入れられるので、入力の必要はない。

アルバム：LPレコードやCDのアルバム番号と名前

ディスク番号：この項目は使用してない。もしSP原番号を入れるのであればここが使用できる。

グループ：この項目は使用してない。何かの情報の記入に使用できる。

BPM：この項目は使用してない。何かの情報の記入に使用できる。



作曲者：作曲者と作詞者を入力する。例えばEl Penado 14は

作曲者 / 作詞者  
Magaldi Agustin-Noda Pedro / Pesce Carlos

コメント：特記事項を記入できる。スペースがあるのでオルケスタのプレーヤーを記入してもよい。

ジャンル：インターネットのデータベース（CDDDB）からは、Latin, Tango, Worldなどの音楽のジャンルが取り込まれるので、その都度原盤の制作/発売会社（レーベル）に変更している。

\* インターネットのデータベース（CDDDB）から自動的に取り込める情報は、どの項目についても表示が統一されていない（例えば演奏者がFrancisco Canaroであったり、F. Canaroであったり、Canaro F.とかCanaro Franciscoなど）ので、表示を統一するため変更・再入力が必要となる。

## データベースを利用した楽しみ方

私は次のように利用して楽しんでいます。

### 聴く

聴くためのハードは

- パソコンからそのまま聴く
- パソコンをオーディオにつないで聴く
- 携帯音楽プレーヤーに曲を転送し持ち歩く。

いろいろな聴き方

- 特定の演奏家だけを聴く
- 曲をABC順に聴く
- 曲を録音年順に聴く
- 特定のレーベルを聴く
- La Cumparsitaだけを聴く
- 好きな演奏だけを集めて聴く
- その他工夫次第でいろいろな聴き方ができます。

例えばフリオ・デ・カロのMala Juntaの1927年、1938年、1949年の演奏を聴き比べたい場合、曲の途中でもワン・クリックで次の演奏に変更できる。

### 情報の検索

データベースとして良いか悪いかは検索が容易かどうかにはありますが、iTunesは非常に使い勝手が良くできています。

画面への表示

- 演奏家をABC順に表示する
- 曲名をABC順に並べる表示する
- 曲名を録音年順に表示する

各種検索

特定の曲（例えばCayetano PuglisiのLa Cumparsita）があるかどうかを調べたり、

その曲の演奏者の一覧表を表示する

特定の演奏者の曲（例えばDe Caro Julio）だけを並べる

特定の作曲者の曲（例えばPiazzolla Astor）だけを並べる

特定の作詞者の曲（例えばFerrer Horacio）だけを並べる

タンゴ以外の曲（例えばmilonga）だけを調べる

アルバムの曲（例えばOdeon OR-9007 La Evolucion Del Tango Argentino Vol. 1）を調べる

その他：入力の手間さえ厭わなければ、アルバムごとに全てのプレーヤーをインプットしておけば、アルバムにある曲のプレーヤー（例えばポリドールのLP SLMP-1338 Reynaldo Nichele Y Los Solistas De Tangoのプレーヤーは、Piano - Atilio , Piano - Atilio Stampone, Violin - Reynaldo Nichele , Bandoneon - Eduardo , Rovira , Bajo - Fernando Romano）をすぐに調べられる。

私が現在利用している楽しみ方を列記しましたが、さらにいろいろな利用方法があります。例えば iPod Classic（携帯音楽プレーヤーで最新のは160GBの容量があるので、最大40,000曲を収容できる）に転送しておけば、歩くデータベースとして利用できる。

レココンの時など聴いた曲が自分のコレクションにあるかどうかなどすぐに調べられる。

歌のタンゴに興味のあるファンはiPod Classicで聴きながら歌詞を見られる。

工夫次第ではさらに利用方法は広がります。

タンゴをその背景にある記録とともに聴くのも楽しいものです。



# アルゼンチン／ウルグアイの 古い楽譜コレクションより (7)



西村 秀人

## 1. 永遠にさようなら！ ¡¡ADIÓS PARA SIEMPRE!!

アントニオ・スカタツソ作曲、アルベルト・バカレサ作詞

1925年「コンベンティージョ・ナシオナル」という舞台作品でイグナシオ・コルシーニが歌った作品。楽譜左下に写真のある女優エンマ・ベルナルに捧げられている。面白いのは上の絵で、かなり細かいところまで見ないとわからないが、右上の幕(洗濯物?)には「借金」(deudas)、左上には「内政干渉」(intervenciones)、方々から引っ張られている中央の踊り子の胸には「大統領」(presidente)、もっと小さい字だが、奥の建物には「貸家」(se alquila)、「いらいらしないでください」(Se ruega no irritarlo)の文字がある。右には偉そうな猫と対峙する、腰にピストルを下げ、肩にフクロウをのせた不気味な巨人がいるし、左には看板俳優とおぼしき男性とダンサーが、かばん持ちを先頭に出かけようとしている(カバンには今も残る劇場の名前「アルベアール」、そのそばに「パリ行き」の文字が貼り付けられている)。世相風刺のようだが、たぶん劇の内容とも関係しているのだろう。1925年コルシーニが録音しており、その録音には出演場所だったアポロ劇場の専属女優たちのコーラスが入っているようだ。カルロス・ガルデルも同じ年に録音している。

## 2. バンドネオン BANDONEÓN!

ペドロ・マフィア&セバ스티アン・ピアナ作曲、ホセ・ゴンサレス・カスティージョ作詞

ロシータ・キロガの1928年の名唱で知られる、そのものずばり「バンドネオン」。注目したいのは形式名で「タンゴ・リエド」、つまりタンゴのリート(歌曲)としている点。楽譜の下には小さな文字でもう一つのマフィア作品「幸せな旅」(フェリス・ビアヘ)の宣伝があるが、そちらは「タンゴ・カンシオン」と書かれてお



¡¡Adiós para siempre!!



Bandoneón!

り、こちらにはドイツ・リートのようなよりクラシカルな感じを意図したのだろうか。楽譜中央の写真は残念ながら録音の機会に恵まれなかった時期のペドロ・マフィア楽団。一番上はフランシスコ・デ・ロレンソ、上から2段目左がエミリオ・ブグリッシ、右が若き日のオスバルド・ブグリエーセ（当時23歳ぐらい）、下段左からエルビーノ・バルダロ、ペドロ・マフィア、アルフレド・デ・フランコ。バルダロとブグリエーセはこの後、マフィア楽団を辞して、幻のバルダロ＝ブグリエーセ楽団を作ることになる。

### 3. パリータ ¡PARRITA..! ペドロ・ミラモンテ&フェリクス・デシリス作曲

全くの無名曲だが、何とも不思議な表紙。タイトル「パリータ」はこの曲を捧げられているアルゼンチン演劇界の先駆的俳優だったフロレンシオ・パラビチーニの愛称（パラビチーニは晩年、映画 La vida es un tangoにも出演している）。作曲家ペドロ・ミラモンテはバイオリン奏者で、1910年代にはエル・アレマンことアルトゥーロ・ベルステインのキンテートのメンバーとなり、1920年代には劇場専属オーケストラのトップ奏者をつとめ、オデオンにクラシカルな小品の独奏レコードも残している。少年だったルシオ・デマーレにプロの音楽家になるよう勧めたのはミラモンテだったそうだ。フェリクス・デシリスはピアノ奏者でいくつかの曲をミラモンテと共作している。表紙の鍵穴から見えている風景は... 右が男性、左が女性なのは明らかだが、上から下がった紐が何のスイッチかわからないし、左の女性の服装は男性のようだし、男性が指さす先にある黒いものは??? 謎だらけである。

### 4. 穴が開いている SE CORRIÓ UN PUNTO

これも全くの無名曲。作者ホセ・バッティーニについてもこれといった資料はない。ただイラストが面白いので載せてみた。お洒落な女性のほつれたストッキングを男性が見つけて笑っている。このイラストを見ないとタイトルの意味はわかりにくい。ナイロン・ストッキングが一般化したのは1930年代半ば以降だから、その当時の作品か？ 紙質はもっと古いように思えるのだが。

### 5. 夜に何してたの？ QUE HACÉS DE NOCHE!! G.バンシーナ・パチェーコ作曲

表紙の絵から想像するに、デートしていて母親に怒られたお金持ちのお坊ちゃんの話か、浮気を問い詰められた男性の話、といったところだろうか。作曲者ギド・バンシーナ・パチェーコはピアニストで、1919～20年にはコロンビア・レーベルに自己の録音があるそうだ。その後、オルケスタ・ティピカ・ビクトルなどに随時参加していたらしい。しかし1910年代にかなりの数の作品を発表したにもかかわらず、今日まで残っ



¡Parrita..!



Se corrió un punto

たものはないようだ。

## 6. やぶ医者 MATASANO フランシスコ・カナロ作曲

他の資料等でご覧になったことのある方も多いかもしいないが、あらためて。「1914年9月21日に行われたドゥラン病院のインターン生の第1回大ダンスパーティに寄せて」とある。椅子に縛り付けられた男が警官2人に促され、医者からアンモニアを嗅がされようとしている。背後には救急マークのついた馬車が止まっている。しかしそれにしても自宅まで来て何をしようとしているところなのだろう？ 手術をいやがる患者を運ぶところか？ 医学生のパーティに「やぶ医者」とはカナロも冗談がキツイ（しかもスペイン語のMATASANOは「殺す」MATAと「健康な人」SANOの組み合わせで出来ている言葉なので、なかなかブラックジョーク的でもある）。

## 7. タンゴ・アルヘンティーノブエノスアイレス Tango Argentino-Buenos Ayres

アーサー・N. グリーン作曲

これは番外編でアメリカ製のタンゴの楽譜。インターネットでだいぶ前に入手したもの。作者のアーサー・グリーンについては当時さまざまなダンス音楽を書いていた人物ということぐらいしかわからないが、表紙を飾るヴァーノン&イレネのキャッスル夫妻はアメリカ・ダンス界の先駆的存在であるボールルーム・ダンサー。特に1910年代にタンゴをテイ・ダンスとして紹介し、米国での普及に大きく貢献したとされる。フレッド・アステアとジンジャー・ロジャースのコンビによる1939年の映画「カッスル夫妻」(The Story of Vernon and Irene Castle) は彼らの生涯を描いた名作として知られており、ご記憶の方もあろう。そのキャッスル夫妻が踊ったタンゴ曲ということで、表紙には1913年11月29日付けのヴァーノン・キャッスルの手紙が貼り付けてある。海外製タンゴの先駆的作品と言えるだろう。イレネのタンゴ・ダンスの衣装も独創的だ。



Que hacés de noche!!



Matasano



Tango Argentino-Buenos Ayres

# オルケスタ・ティピカの歴史 (No. 8) HISTORIA DE LA ORQUESTA TÍPICA

タンゴ器楽の発展

**Evolución instrumental del Tango**

ルイス・アドルフォ・シエラ著

弓田 綾子(訳)  
島崎 長次郎(監修)

## 編曲者たち～ LOS ARREGLADORES

音楽にはジャンルの区別なくメロディーを美しく奏でるようにするために、オルケスタドーレス（オルケスタの技術者）とアレグラドーレス（編曲者）の必要性が重要視され、音楽的に発展したタンゴにもそのことは大きな影響をもたらした。

オルケスタ・ティピカの数の拡大と演奏の音楽的な質への要求が高まり、オルケスタで演奏する楽譜にオルケスタドーレスとアレグラドーレスが欠かせないものとなった。特にアレハンドロ・グティエレス・デル・バリオとマリオ・マウラーノは長い間我々の音楽界に貢献した編曲者だ。

また、フリオ・ペルセバルとフリオ・ロセンベルグは主にフリオ・デ・カロ楽団の編曲をしていた。さらに著名な編曲者、エクトル・マリーア・アルトーラ、アルヘンティーノ・ガルバンらは“タンゴを譜面台に持って行った”と、その編曲のテクニックは高く評価され、タンゴがさらに表現力豊かになり、聴衆の心を捉えた。ここに活躍した編曲者を挙げてみよう。

■エクトル・マリーア・アルトーラ＝音楽に対して理論派でバンドネオン奏者でもある。器楽演奏のアレンジとオルケスタで演奏したり、タンゴの発展に貢献した。

■アルヘンティーノ・ガルバン＝バイオリン奏者でもあるガルバンは、音楽理論を学び器楽演奏のアレンジや多くのオルケスタや歌手の編曲をした。彼のセンスある編曲は亡くなる直前まで寄与し、タンゴをポピュラー音楽のハイレベル化に誘導した。

ちょうど彼らの活躍していた1940年頃は、タンゴに対しても音楽的要素が不可欠となり、進化論者、



1940年代のリバダビアの交差点

伝統派の傾向を問わず、楽団の明暗をアレンジャーに任せた。そして、各楽団が特色ある演奏様式を取り入れ競い合った。

アルヘンティーノ・ガルバン、エクトル・マリーア・アルトーラの他にも、演奏活動しながら自らも編曲に注力したムシコたちに以下の人たちがいた。

フランシスコ・デ・カロ、エミリオ・J・ブラメリ、オスバルド・プグリエーセ、マテオ・ラ・フェルラ、カルロス・ガルシーア、エクトル・スタンポーニ、ルイス・リカルディ、オスマル・マデルナ、ホアキン・モラ、ビクトル・ブチーノ、マルティン・ダレ、マリオ・ペリーニ、イスマエル・ス



E. M. アルトーラ



A. ガルバン

ピタルニク、ベルナルド・スタルマン、ティト・リベロ、アルベルト・カラクシオロ、フリオ・アウマーダ、フェデリコ・スコルティカティ、ドミンゴ・フェデリコ、マキシモ・モーリ、マリオ・デマルコ、アルフレド・ゴビ、オラシオ・サルガン、エミリオ・バルカルセ、アストル・ピアソラ、ミゲル・ニヘンソン、カジェタノ・カマラ、エクトル・グラネ、フリオ・メドホイ、エミリオ・バルバト、アルマンド・ポンテイエル、オルランド・トリポディ、ティティ・ロッシ、ホセ・パスクアル、フアン・ホセ・パス、アルマンド・ラカバ、ホセ・バッソ、エンリケ・アレシオ、グンデリコ・クレメンス、アルマンド・カルデラーロ、オスバルド・レケーナ、アルベルト・ネリイ、オスディマル・カセレス、トト・ダマリオ、パスクアル・マモー



左から：Lavallén. Demarco. Pugliese. Roggero. Spitalnik (59年)

ネ、カルロス・ラサリ、フリアン・プラサ、ビルヒリオ・エスポシト、ロベルト・ペレス・プレチ、レオポルド・フェデリコ、アティリオ・スタンポーネ、エドゥアルド・デル・ピアノ、フアン・カルロス・オワルド、エドゥアルド・ロビラ、フルビオ・W・サラマンカ、エクトル・バレラ、アキレス・ロゲーロ、ホセ・リベルテラ、ルイス・スタッツ、ビクトル・ブラニャ、フアン・カルロス・ベラ、

アルマンド・クーボ、オスカル・デ・ラ・フエンテ、フランシスコ・トゥロポリ、ダニエル・ロムート、ロベルト・パンセラ、オスバルド・タランティーノ、アルトゥーロ・ペノン、ビクトル・ラバジェン、ディノ・サルーシ、オスバルド・モンテス、エドゥアルド・コルティ、ルイス・ペレイラ、アルベルト・デイ・パウロ、アンヘル・ドミンゲス、サルバドル・フラセ、オスカル・ナポリターノ、エンリケ・メンネ、ラウル・ガレーロ、ネストル・マルコーニ、らである。

## タンゴの音楽家たち～ LOS MUSICOS TANGO

かつてのタンゴの演奏家たちの大多数は、理論的なことより音を直感的にとらえ演奏するのが普通だったが、1921、2年頃から音楽学校で学んだ演奏家たちによって、タンゴに音楽的技法を取り入れるようになった。その結果“オレヘーロス”と呼ばれる音楽的に無学なそれまでのムシコたちは、音楽学校で学んだ彼らにその場を次第に譲り、静かにその姿を消しはじめた。

こうしてタンゴの演奏は、先に述べた編曲者たちの介入と専門知識を持った演奏家によって、高いレベルに達した。その証しとして演奏家のほとんど全員がタンゴとシンフォニック（クラシック）の二面での活動を共有できた。最初はタンゴのオルケスタを結成し、その後シンフォニック界に就いたムシコたちもいた。それらクラシック界でも活躍した音楽家を以下に記してみよう。

■アムレット・グレコ＝弱冠14才のときフランシスコ・ロムート楽団で活躍。その後、カルロス・デイ・サルリ、アストル・ピアソラ、ホアキン・ド・レージェスらの楽団でも大活躍していたが、やがてオルケスタ・シンフォニック・ナショナルの第1コントラバホ奏者の地位に就いた。当時シンフォニック界には9人のコントラバホ奏者がいたが、グレコはその中で常にトップの座におり最も重要と見なされていた。

■さらに、コントラバホ奏者でみると、ホセ・アンヘル・アレグレはフォルモッサ州のオルケスタ・シンフォニアで、また、エンリケ・マルチェット、フェルナンド・ロマーノ、ルイス・ペレイラは軍の交響楽団でそれぞれ活躍した。そして、アティリオ・スタンポーネ楽団にいた同じ奏者のファン・アントニオ・バサージョは“テアトロ・コロソ”のオルケスタ・エスタブレに関与していたが、前衛的な演奏で「タンゴの破壊者」と云われたあのアストル・ピアソラも、同じ劇場のオルケスタ・エスタブレで活躍していた。

■ドミンゴ・ルーリオ＝ブエノス・アイレスのオルケスタ・フィル・ハーモニの華麗なフルートのソリストであり、かつタンゴの演奏家でもある。彼のフルート奏法は、芸術的にも高く評価され多くの聴衆の心を捉え、タンゴのレベルをさらに上げることができた。そんな魅惑のルーリオのフルートをカルロス・ガルシア、マルティン・ダレ、アティリオ・スタンポーネたちは自らの楽団に積極的に取り入れた。

そしてルーリオがリーダーとなり“クアルテート・パケ・バイレン・ロス・ムチャーチョス”を結成した。メンバーはレオポルド・フェデリコ (Bn)、ウバルト・デ・リオとドミンゴ・ライネ (Gt) らであった。

■エルビノ・バルダロ＝バイオリン奏者。音楽教育をしっかりと学んだバルダロは、クラシック、タンゴ界においてもその奏法は常にトップクラスであった。長年タンゴ界で活躍してその名をのこしたが、晩年はコルドバ州のオルケスタ・シンフォニカに在籍し、余生を楽しんでいた。

■エンリケ・マリオ・フランチャーニ＝バイオリン奏者。高いテクニックを持つフランチャーニ





ドミンゴ・ルーリオ



Elvino Vardaro



E. M. フランチーニ

は、テアトロ・コロンのオルケスタやブエノス・アイレス交響楽団の第1バイオリン奏者として活躍した。さらにはシンシア・バホール、スタンポーネ、フェデリコ、アストル・ピアソラ、オスバルド・ブグリエーセ、及び、カルロス・ディ・サルリ楽団にも参加し重要な役割を担っていた。現在はテアトロ・コロンの第1バイオリン首席奏者である。(訳者註：1978年没)

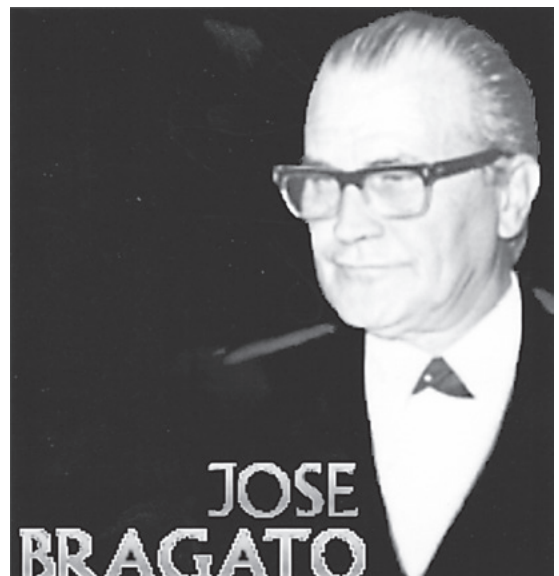
■シモン・ブレチ=バイオリン奏者。クラシック界で活躍していたが、フレセド、ホセ・パスクアル楽団、そしてマリオ・ペリーニ、アンヘル・ダゴスティーノのコンフントなどでも演奏していた。

やがてコルドバ交響楽団の指揮をするに至った。

■セバステイアン・ロンバルド=長い間フレセド楽団のピアノ奏者、かつ編曲者だったが軍楽隊の指揮者になるためにタンゴをやめた。その後、ブエノス・アイレス州の警察音楽隊に移り活動した。

■ホセ・ルイス・ブラガート=チェロ奏者。ピアソラのオクテート・ブエノスアイレスやロス・アストロス・デル・タンゴなどで演奏していた。また、長年テアトロ・コロンでも重要なポジションに座を占めていた。

■ファン・ホセ・カストロ=テアトロ・コロンでチェロ奏者の第1人者として活躍した。主に交響楽団の指揮者として、アメリカ、ヨーロッパの各交響楽団で指揮をとった。特にテアトロ・コロン劇場で初演した“オペラ・デ・トレス・センターボス（3文オペラ）”は大好評で、カストロの名をさらに広く知られるようになった。また、チリにおいて10年間、彼自身の楽団を指揮していた。クラシック界では指揮者として相当な名声を博していたようだ。晩年はプエルト・リコ音楽学校の要職に就き、1968年73才で亡くなった。



■ロベルト・ディ・フィリポ=バンドネオン奏者。彼の演奏は名人芸とまで云われ、バンドネオンのより典型的な表現を見事に出していた。ロベルト・セリージョ、オルランド・ゴニ、アストル・ピア

ソラ、オラシオ・サルガン、フリオ・デ・カロ楽団などでも素晴らしい演奏を披露したが、何故か突如オーボエの演奏に専念することを決意し、テアトロ・コロンのオーボエのソリストとなった。しばらくはシンフォニックの世界で活躍していたが、最後には再びバンドネオンに帰った。

■マキシモ・モリ＝バンドネオン奏者。彼のバンドネオンのソロ用編曲のテクニックは常に最高峰を極めていた。

他にもクラシック界においてその技量を高く評価されたバイオリン奏者たちを記してみよう。

レイナルド・ニチューレ、マリオ・アブラモビッチ、フェルナンド・スアレス・パス、ホセ・ボッティ、ラサロ・ベッケル、ベルナルド・スタルマン、アブラアム・レイビンソン、フアン・アルシーナ、マウリシオ・マルセリたちである。

さらに、ビオラ奏者ではマリオ・ラリ、シモン・スロニク、及び、以前フランシスコ・ロムート楽団のピアノ奏者だったオスカル・ナポリターノ。錚々たる彼らの名は決して忘れることはないだろう。

またタンゴの文献にも少し触れておかなければ、と思うが…。

タンゴの文献＝最近は多くのタンゴに関しての文献があるが、それらはタンゴの本質に触れることなく、ほとんどが歌詞の詩論などを解釈したものばかりである。ましてやタンゴについてあまり知らないジャーナリストたちが、軽い会話程度の情報を書いている。やはり、ジャズの文献のようにその課程を深く理解し、しっかり核心にそったものになければならないといえる。



R.ニチューレ

## 大流行のダリエンソスタイル～ D'A RIENZO IMPONE UN ESTILO

30年代中頃は観客がトーキー（有声）映画に導入された、いわゆる映画音楽に熱狂し、タンゴから離れたために、タンゴ界にとって大きな危機が訪れた。そんな最中、ダリエンソの鋭いスタッカートのリズムを前に、心離れていた聴衆は、躍動感溢れるその演奏に、改めてタンゴにはリズムこそが重要なのだと気がついた。そして、ダリエンソはムシコの数を増やし激烈なビートを看板に、タンゴ・ダンスにも大いなる貢献をした。

ダリエンソは、1919年サルスエラのオーケストラにバイオリン奏者として参加



JUAN D'ARIENZO Orq.Típ.

し、芸能活動を本格化させたが、その後、アイエタ、タゴステイーノ、ビスカ、ゴレッセ、ラクエバ、及びマセオらとタンゴのコンフントを共有し、次第にその名を知られるようになった。

1935年に向かって低迷し続けたタンゴは、そのダリエンススタイルによってゆっくりと回復の方向へと動いていった。その陰には、1938年までピアノ奏者のロドルフォ・ビアジがその座にあってあの電撃スタイルを手助けしていたことを忘れてはならない。ビアジのピアノは鍵盤の高音部の音が鋭く、そして、オブリガートやリズムにより大きいアクセントをおき、そのスタッカートの効いた鋭い演奏は更にダリエンス楽団を大きく特徴づけ、その存在を引き立てた。

また、ビアジの後を引き受けたピアノ奏者のファン・ポリートをはじめ、アルフレド・マセオ、ペドロ・カラクシオロ、エクトール・バレラ、アルベルト・サン・ミゲル、オリンド・シニバルディ、カジェタノ・プグリシ、エンリケ・アレシオ、カルロス・ラサリ、エルネスト・フランコ、ブラス・ペンサト、エラディオ・ブランコ、アルド・フニシ、セルソ・アマト、ミロ・ドフマン、ベルナルド・ウエベルなど、さまざまなメンバーの協力があつたからこそ、この素晴らしい演奏活動が持続できたこともここに記しておきたい。

こうして多くの聴衆がダリエンススタイルに傾倒し、演奏家は生活のため自らの殻を破り、ダリエンススタイルをこぞって演奏し人気を博していた。そんな中には、かすかながらフレセド、デ・カロ、ディサルリ、ラウレンス、デマレ、トロイロらの錚々たる演奏家たちもいたことを忘れてはならない。

ただ一人斬新的なペドロ・マフィアは、いろいろとタンゴの様相が変化していく中、ダリエンススタイルに抵抗し続けた。当然生活は苦しくなり楽団を解散し、リベルタ通りの質素な店舗で装身具を売る仕事に一時従事していたが、それから10年後に伝統派に根ざしたオルケスタに演奏する場が戻ったとき、彼は再び演奏活動をし始めたのだ。

そして一方、“El rey del compás（リズムの王様）”と云われたダリエンス楽団の模倣者たちには、あのフランシスコ・ラウロ、ファン・サンチェス・ゴリオ、ティト・マルティン、モンテビデオでのドナート・ラシアッテイなど、ビッグ・アーティストがいたことも記しておきたい。

## <sup>とわ</sup>永久の名前、アニバル・トロイロ～ANIBAL TROILO NOMBRE DEFINITIVO

卓越したバンドネオン奏者“ピチューコ（おチビちゃん）”の愛称で親しまれていたトロイロは、まだあどけなさが残る弱冠11歳のとき、ペティット・コロンという映画館のステージで初めてバンドネオンを弾いた。トロイロのまさにタンゴ界へのデビューであった。

そして、ファン・マグリオ・パチョ、エルビノ・バルダロ、オスバルド・プグリエーセ、フリオ・デ・カロ、シリアコ・オルティスなどの錚々たる楽団で修業を重ね、さらにペドロ・マフィアの繊細な音、ペドロ・ラウレンスの調和のとれた華やかさ、さらにシリアコ・オルティスの独特な“fraseo octavado（1オクターブ上の音を同時に弾く）”、これらの奏法を自己のスタイルにも取り入れながら、1937年22歳の若さで独立した。メンバーにはアニバル・トロイロ、ファン・ミゲル・ロドリゲス（トト）、ロベルト・ジアニテーリ、以上バンドネオン奏者、レイナルド・F・ニチューレ、ホセ・スティルマン、ペドロ・サポチニック、以上バイオリン奏者、オルランド・ゴニー（Pf）、ファン・ファシオ（Cb）、そして、ボーカルのフィョレンティーノたちである。

トロイロのフレージング、バリエーションは“心で弾くバンドネオン奏者”として、常に多くの聴衆から脚光を浴び、タンゴ界のビッグアーティストの座に就いていたが、そこにはピアニストのオルラ



Anibal Troilo-Edmundo Rivero

ンド・ゴーニの存在があったことを忘れてはならない。ゴーニのピアノは持ち前の豊かな感性に基づくプレーに徹し、柔軟性のあるリズムの取り方と、低音鍵で弾くことを優先にし、かつ“notas sueltas（自由に飛ぶ音符）”を得意にした。この奏法は、あのダリエンス楽団を手助けしていたロドルフォ・ピアジの鋭敏、過敏、加速、甲高い音、それに攻撃的な切れのピアノとはまさに正反対のものであった。

また、トロイロは歌の伴奏にも力を入れ、歌手のフランシスコ・フィオレンティーノやアルベルト・マリーノの二人を自らの楽団に参加させた。このスタイルは他の楽団の先がけとなった。

トロイロはその優れた感覚と経験を活かして、音色の組み合わせを構想しながら、チェロ、ビオラ、4つのビオリンとで弦セクションを完全なものにし、バンドネオンの5人とで各楽器の特異性を発揮させ、そして、アルヘンティーノ・ガルバン、エクトル・アルトーラ、アストル・ピアソラ、フリアン・ブラサたちも引き寄せ、彼の魅力的なスタイルの独自性を持ち続けた。

トロイロの中絶されることがなかった30年以上に渡る活動の中には、下記の人たちがいた。

トト・ロドリゲス、アストル・ピアソラ、ダビ・J・ディアス、エドゥアルド・マリーノ、レイナルド・F・ニチューレ、アルフレド・シトゥロ、シモン・スロニク、エンリケ・ディアス（キチョ）、アルベルト・ガルシア、フェルナンド・テル、ドミンゴ・マティオ、エルネスト・バッファ、ニコラス・アルベルト、ファン・アルシーナ、カジェタノ・ジアナ、ラファエル・デル・バグノ、アドゥリアーノ、ファネリ、サルバドール・ファラセ、カルロス・H・ピシオーネ、アントニオ・アグリ、カルメロ・カバジェロ、ウーゴ・バラリスらがいて、大いに存在の確立に関与していた。

## 違ったタイプのタンゴ、カルロス・ディ・サルリ～

### CARLOS DI SARLI UN TANGO DISTINTO

ディ・サルリは、ピアノ奏者、作曲家、その上、高度な音楽教育を受け規模の大きい超一流の指揮者にも拘わらず、なぜかその名を知られるまでには時間がかかった。

ディ・サルリの演奏は、1926年の本格的な活動開始からほぼ変わらないスタイルを維持して来た。ピアノシモ(もっとも弱く)とクレセンド(次第に強く)、また、スタカットとレガートの巧みな対比において、デリケートさと奥深い音を同時に奏で出そうとした。弦セクションをユニゾン(同音)にし、バンドネオンは歌手の声と違って目立たせず、ほぼ一定のままで抑制した。特に第1バイオリンのカルロス・ギサードの味わいに富んだオブリガートは、リズムを強調するデ・サルリの左手から紡ぎ出される深い感情性豊かな音色と共に、特徴的な色合いをコンフントに与えて魅力を醸し出した。



Orquesta de Carlos Di Sarli, 1942. A la izquierda del maestro, el cantor Roberto Rufino.

ディ・サルリ楽団に、その素晴らしいバイオリンの音色を灯し続けたバイオリン奏者を、ここに改めて記してみよう。

ロベルト・ギサード、エルビノ・バルダーロ、シモン・バジュール、アントニオ・ロッシ、クラウディオ・ゴンサレス、エリアス・スロン、フアン・スカフィーノ、カルロス・アルナイス、及びラウル・ドミンゲスら錚々たるメンバーである。

残念なことは、あれほどディ・サルリ旋風を起こした多くのファンの中には、マエストロのいなくなった後の演奏は許容し難いと、受け入れないファンが未だに少なからず存在していることだ。

## オルケスタの概念の極地、オスバルド・プグリエーセ〜

### OSVALDO PUGLIESE, CULMINACION DE UN CONCEPTO ORQUESTAL

プグリエーセは、タンゴの全時代を通して賞賛に値する最高のピアノ奏者であると同時に、絶賛されるマエストロである、と常に我々の間で話題になっている。プグリエーセは貧しい家庭に育ったが、その感情の強さと謙虚さは特筆され、その控え目な姿勢は、偉大なる音楽家として多くの人々から慕われ、人生と芸術の両面におけるマエストロと尊敬された。

1924年、エンリケ・ボージェ楽団でピアノ奏者として本格的に演奏活動を始めた。同じ年に有名な「レクエルド」も作曲した。プグリエーセは、ロベルト・フィルポ、ペドロ・マフィア、ペドロ・ラウレンス楽団に籍を置きながら、自身のオルケスタスタイルの基盤を創っていった。

そして、デ・カロの系統を明確にし、進歩した技法の実行、また、複雑な構造に関する調和の取れた考えと、ダンスのためにも完璧な適応性を持つという、その二つを両立させる演奏スタイルを提示したのだった。プグリエーセの演奏は、力強いリズムを強調し、激しい中にも優しさと切ない甘さ、そんな感情表現の豊かな演奏が、彼のオルケスタの稀有なスタイルを築きあげたのだ。そう、プグリエーセの演奏は、常に鮮度に溢れ、深い魅力を保ちつづけた。

プグリエーセ楽団の最高潮期には、第1バンドネオンにオスバルド・ルジェーロ、第1バイオリン



Orquesta OSVALDO PUGLIESE año 1945

De izq. a der.: Jaime Turki (v); Oscar Herrero (v); Alberto Morán (cantor); (Sr. no pertenc. a la org.); Sentado al piano Osvaldo Pugliese (director); Julio Carrasco (v) mirando abajo; Aniceto Rossi (contrabajo); Oscar Castagnaro (b); Esteban Gilardi (b); Enrique Camerano (1<sup>er</sup> v); (Sr. "plomo" del conjunto); Osvaldo Ruggero (1<sup>er</sup> b); Jorge Caldara (b) de bigotito; (Sr. no pertenc. a la org.); Roberto Chanel (cantor).

にエンリケ・カメラノ、そしてタンゴ器楽のベテラン、コントラバホ奏者アニセト・ロッシらがあり、メンバーのほとんどが作曲家かつ編曲家としても一流だったのは圧巻だ。

他にもエンリケ・アレッシオ、ホルヘ・カルダラ、フリオ・カラスコ、

エミリオ・バルカルセ、マリオ・デマルコ、イスマエル・スピタルニク、オスバルド・マンシ、アルマンド・クーボ、フリアン・プラサ、アルシーデス・ロッシ、ノルベルト・ベルナスコーニ、アドゥリアーノ・ファネリ、エンリケ・ラノー、ビクトル・ラバジェン、ロドルフォ・メデーロス、アルトゥーロ・ペノン、フェルナンド・ロマーノの豪華メンバーで、プグリエーセ楽団を華々しく飾った。

プグリエーセは倫理的なビジョンで人生を歩み、その生きざまに多くの音楽家は感嘆した。

## ロマンティックなバイオリン、アルフレド・ゴビ〜

### ALFREDO GOBBI, EL VIOLIN ROMANTICO

バイオリン奏者。父親は初期のタンゴをはじめ、ポピュラー音楽を放って活躍していた歌手のD・アルフレド・エウセビオ・ゴビである。そんな音楽家の家に育ったゴビは、幼少のときからピアノやバイオリン奏法を学んだ。彼のバイオリンには優美なロマンティシズムが漂い、ゆったりとしたテンポと強調したアクセントで、激しいリズムの刻みをオーケスタに取り入れた。また、編曲者としての独創性をも保ち、ゴビは自身を強調したタンゴの形を創り上げた。

ゴビの演奏スタイルには“何かを持っている”とよく云われてるが、その“何か”とは、確固としたセンチメントに裏打ちされた音の美しさであり、これ以上の云い表わし方はできない。

ゴビの作曲した「ア・オルランド・ゴーニ」は、

四六時中ボヘミアンの生活（自由奔放）を共有した仕事仲間でもあり、親友のオルランド・ゴーニに



A.ゴビ

熱い友情をこめて捧げた曲である。

アルフレド・ゴビの偉大さは、何と云っても多くの演奏家たちに独奏の場を与え、それを温かい眼ざしで容認したことである。

それは例えば、セサル・サグノリ、マリオ・デマルコ、エルネスト・ロメロ、ベルナルド・ヘルミノ、アントニオ・ブランコ、エデルミロ・ダマリオ、カジェタノ・カマラ、アルベルト・ガラルダ、オスバルド・タランティーノ、ラロ・ベニテス、フアン・ホセ・ファンティン、エドゥアルド・ロピラ、オマール・サンソーネ、ロベルト・シカレ、アルシーデス・ロッシ、オスバルド・モンテレオーネ、エドゥアルド・サルガート、ルイス・マジオロ、ティト・ロドリゲス、及びオスバルド・ピーロたちであり、ゴビのお陰でそれぞれの分野で活躍することが出来たのだった。

## ダゴスティーノ、デ・アンジェリス、サッソーネ、タントゥリ〜

### D'AGOSTINO, DE ANGELIS, SASSONE, TANTURI

1940年代の始めにトロイロ、プグリエーセ、ディ・サルリ、ゴビらと並行して、タンゴの一流の座に位置していた彼らについて次に述べる。

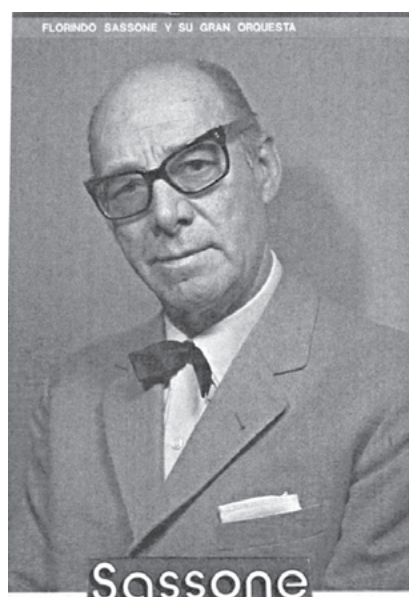
■アンヘル・ダゴスティーノ＝ピアノ奏者。ダゴスティーノの芸歴は長くいくつかの楽団を経て、研鑽された大変シンプルでひたむきな演奏が、広く知られ人気を博した。ダゴスティーノ楽団のメンバーには、次の人たちが順繰りに加わりながら演奏していた。

アルフレド・アタディーア、エドゥアルド・デル・ピアノ、マリオ・ペリーニ、ビクトル・フェリチェ、アルベルト・デル・バグノ、フランシスコ・デ・ロレンソ、ビクトル・ブラニャ、アルベルト・ガルシア、ドミンゴ・マティオ、アルベルト・デル・モナコらである。

そして、歌い手のアンヘル・バルガスとコンビを組み、一緒になって活動範囲を広げるたびに、人気を集め二人の名は広く知れわたった。

■アルフレド・デ・アンジェリス＝ピアノ奏者。タンゴ界が賑わっていた最中に、デ・アンジェリス楽団が出現した。その軽快なリズムと調和の取れた分かりやすい演奏は、聴くばかりでなくダンスを踊る人にも絶大なる人気を博した。

ただ、彼の楽団には素晴らしい実力を持つ演奏家がいたにも拘わらず、デ・アンジェリスは楽団員



の独奏を決して許可しなかった。その代わり、なぜか歌手たちには目立たせる恩恵を与えた。

デ・アンジェリスは名声が高いわりにはランクの点で高い位置につくことが出来なかったのは、或いはこんなところに理由があったのかも知れない。

■フロリンド・サッソーネ=バイオリン奏者。サッソーネはフレセドやディ・サルリとの深い絆があった。演奏は古典曲が多く、ダイナミックな演奏スタイルはディ・サルリの影響を大いに受けていた。サッソーネはタンゴについてはよく学んでおり、独創性はやや乏しいものの、タンゴのデリケートな感性と、メロディー・ラインを大切にすることで特筆される。

■リカルド・タントゥーリ=ピアノ奏者。リカルド・タントゥーリの楽団“ロス・インディオス”は歌手の仕事に力を入れ、アルベルト・カステージョやエンリケ・カンポスを専属歌手に迎え、ラジオや有名なダンスホール“サンタ・パウラ”に出演したりして、華やかに活動をしていた。

しかし、徐々に演奏スタイルも軟化し始め、追い討ちをかけるように人気を博していたカステージョも去り、聴衆たちの心は離れていった。

アルベルト・カステージョ、エンリケ・カンポスらの両雄を専属歌手にしていた時代が、彼タントゥーリにとって人気最高の時期だったと云えるだろう。

## '40年代～ LA GENERACION DEL CUARENTA

“40年代”はタンゴ界にとって目覚ましい時代であり、特に作曲家、作詞家、演奏家には最高潮のときであった。

若いムシコたちは伝統を重んじながらも、それぞれの個性溢れる多種多様なスタイルの中で、タンゴ界に新しい風を吹き込んだのだ。この頃活躍した演奏家の名前を以下に挙げてみよう。

オスバルド・プグリエーセ、カルロス・ディ・サルリ、ルシオ・デマレ、アントニオ・ロデオ、ミゲル・カロ、ホアキン・モア、アルマンド・バリオッテイ、アルフレド・ゴビ、ホセ・バスクアル、アニバル・トロイロ、カルロス・ガルシア、アルヘンティーノ・ガルバン、ロベルト・グレラ、エクトル・アルトーラ、オルランド・ゴーニ、ホセ・ダメス、フェルナンド・マルティン、ガブリエル・クラウシ、アルフレド・デ・フランコ、フランシスコ・トゥロポリ、ウーゴ・バラリス、ハイメ・ゴシス、エドゥアルド・



デル・ピアノ、アルフレド・カラブロ、ホルヘ・フェルナンデス、アンヘル・ドミンゲス、ダニエル・アルバレス、フェデリコ・スコルティカティたちである。



さらに知られる存在では、エクトル・スタンポーニ、ビルヒリオ・エスポイト、エミリオ・バルカルセ、オスマル・マデルナ、アルベルト・スアレス・ビジャヌエバ、エンリケ・マリオ・フランチャーニ、オラシオ・サルガン、アルマンド・ポンティエル、エミリオ・バルバト、マキシモ・モリ、ホセ・カネ、マリオ・デマルコ、カルロス・M・パロディ、フアン・カルロス・ハワード、マリアノ・モレス、アストル・ピアソラ、カルロス・フィガリ、エドゥアルド・ロビラ、エンリケ・ムンネ、アントニオ・マルチェロ、アルベルト・サン・ミゲル、ホセ・バッソ、ティティ・ロッシ、ドミンゴ・フェデリコ、マキシモ・バルビエリ、マルシリオ・ロブレス、フリオ・アウマーダ、アキレス・アギラール、アントニオ・リオス、オスバルド・マンシ、フアン・ホセ・パス、フリオ・メドボイ、エンリケ・アレシオ、アニバル・アリアス、ウバルド・デ・リオ、アルフレドと、マリオ・スシアレタ、パスクアル・マモーネ、アキレス・ロジェーロらがキラ星のように並ぶ。

特に40年代の10年間はタンゴの黄金期でもあり、大衆の心を掴んだタンゴは、若いムシコたちに活躍する場を数多く提供したのだった。

そして、日夜、ラジオ・エル・ムンドから流れるタンゴに街中が盛り上がり、夜ともなると、有名なキャバレー“マラブー”、“ティビダボ”、“チャンテクレール”、“カサノバ”、“フロリダ”、“ホセアン”、“ムーラン・ルージュ”、“ルセルナ”、“サン・スーシ”、“ノベルティ”“ピカデリイ”、“トゥロカデロ”などには、タンゴの演奏家達が晴れやかな顔を見せ、競い合いながらキャバレーは連日大変な賑わいを呈していた。

また、ゴドイ・クルスとサンタ・フェ通りの“パレルモ・パラセ”はダンスのサロンとして、多くのダンサーが夜毎集まっていたことも忘れられない。

また、この年代の演奏家は高いレベルの技術を持っており、シンフォニック楽団とオルケスタ・ティピカを交互に区別なく演奏することが出来るようになった点で特筆される。

エンリケ・マリオ・フランチャーニ、ホセ・ブラガド、マリオ・ラリ、フアン・アントニオ・バサージョ、アブラハム・レイビンソン、フランシスコ・サンマルティーノなど、彼らはテアトロ・コロンの所属、アムレト・グレコ、レイナルド・F・ニチューレ、オスカル・ナポリターノ、ドミンゴ・

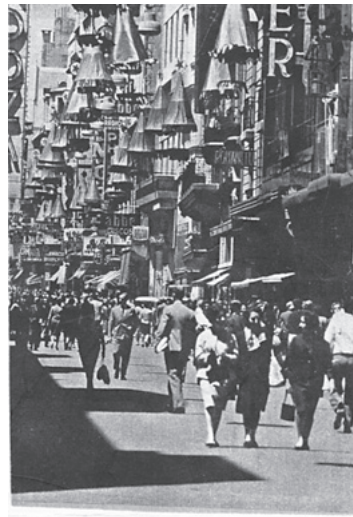


ルーリオ、ベルナルド・スタルマンらは、オルケスタ・シンフォニカ・ナシオナルの一員として参加、エルビノ・バルダロはコルドバのオルケスタ・シンフォニカ、といったふうに活躍したが、彼らが交響楽団で演奏することは、高度な技術を持つ音楽家の証明になったことは言うまでもない。

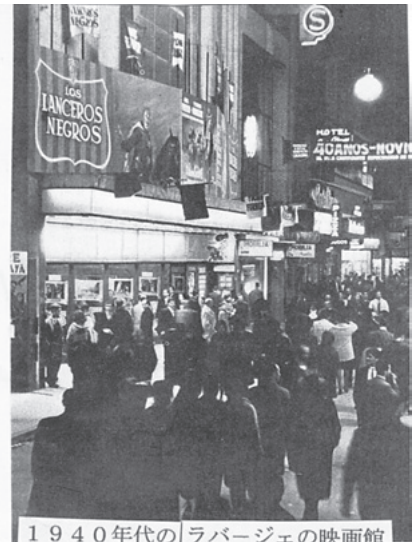
さらに40年代の特色として特記したいのは、オルケスタの歌手たちがマエストロと同じように人気を博し、その地位を飛躍的に向上させたことだった。

□アニバル・トロイロとフィオレンティーノ、アルベルト・マリーノ、及びフロリアル・ルイス、□

カルロス・デイ・サルリとロベルト・ルフィーノ、アルベルト・ポDESTA、そして、ホルヘ・ドゥラン、□オスバルド・プグリエーセとロベルト・チャネル、アルベルト・モラン、□リカルド・タントゥリとアルベルト・カステイージョ、エンリケ・カンポス、□アンヘル・ダゴステイーノとアンヘル・バルガス、□オスバルド・フレセドとロベルト・ライ・リカルド・ルイス、及びオスカル・セルパ、□アントニオ・ロディオとアントニオ・ロドリゲス・レセンデ、アルベルト・セルナ、□オラシオ・サルガンとエドモンド・リベーロ、カルロス・ベルムーデス、□ミゲル・カローとラウル・ベロン、ラウル・イリアルテ、□ルシオ・デマレとフアン・カルロス・ミランダ、オラシオ・キンターナ、□アルフレド・デ・アンジェリスとカルロス・ダンテ、フリオ・マルティン、□フアン・ダリエンソとアルベルト・エチャグエ、エクトル・マウレ、そしてアルマンド・ラボルデなどであり、マエストロとその専属歌手たちは、こうして40年から50年にかけて、タンゴの二枚看板として、確固とした時代を築いたのだった。



1940年代のフロリダ通り



1940年代のラバージェの映画館



Alberto Castillo



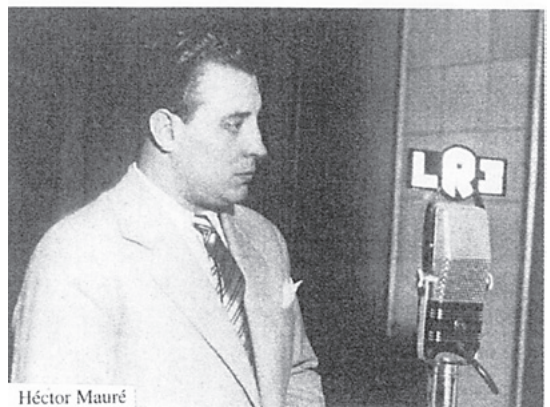
Alberto Morán



Angel Vargas



Óscar Alonso



Héctor Mauré

(つづく)

## 日本のタンゴ楽団 (5)



- 17 杉井幸一とキング・ノベルティ・オーケストラ
- 18 相馬昭三とオルケスタ・ティピカ・オルガニート
- 19 幻のタンゴ・バンド 『クラルテ』
- 20 もう一つの幻のタンゴ楽団 三枝 登とその楽団

蟹江 丈夫 (元会員)

### 17

#### 杉井幸一とキング・ノベルティオーケストラ

日本のタンゴ界に名を遺したアーティストとして、五本の指に数え挙げられるのが杉井幸一の名前である。

タンゴ・ファンにとってはバンドネオン奏者の草分けとして、またサクライ・イ・ス・オルケスタの重鎮として戦前の全盛時代を築いた人としてその名前は定着しているが、この人、実はジャズの世界でも日本人のスイング・ジャズのスタイルを創り出した人として、広く知られて居るのである。

ひとつにはキング・ノベルティ・オーケストラというスタジオ・オーケストラを作り、多くのレコードをリリースしたこと、また戦時中に「大東亜交響楽」など大作を考えて、実現に向けて心血を注いでいたが、36歳の若さで腎臓ガンで1942年春、永眠した。

杉井幸一のキング・ノベルティ・オーケストラは、今日でも傑作として語り伝えられているものがキング・レコードからLP化、CD化されてリリースされている。スイング・ジャズ調のもの、タンゴ編成のものに分けられているが、両方とも楽団名は同じため、買って聴いてみないと、どちらか判らないという欠点もあるが、とにかく邦人ポピュラーの傑作盤としてマニア達だけでなく、広く珍重されているSPレコード盤であることだけは確信できる。

スイング・ジャズ編成では「旅愁」「奴さん」「関の五本松」「八木節」「チンライ節」などがあるが、バンドネオンを駆使した「新磯節」「母子船頭唄」、ヴァルス・クリオージョ風の「宵待草」、パソドブレの「梅にも春」「上海の花売娘」などは、「佐渡おけさ」とともに桜井潔とその楽団のレパートリーとして戦後も演奏され続けていた。

これらが録音されたのは1939年から41年にかけてであり、戦争のムードが世相に出始めた頃だけに杉井幸一の苦勞の程が偲ばれる演奏で、その反動としての熱気漲る力演揃いである。当時のこの楽団の主要メンバーは、指揮・アコーディオン・バンドネオンが杉井幸一、ピアノが一時オルケスタ・ティピカ東京でも活躍したことがあった増尾博久、ヴァイオリンが本堂藤蔵、クラリネットが山田貴四郎、ドラムが泉君男、ギターが宇川隆三、ベースが通称『ハァちゃん』と呼ばれていたサクライ・イ・ス・オルケスタでも活躍していた松田孝蔵らであった。バンドネオンに若林季郎やヴァイオリンと持ち替えて松本信三らが曲によって参加している。

この楽団がスタジオ用のものだけにメンバーが一定でない不安定な面はあったが、主要メンバーは常時定着していたようである。バイオリンには田島巳之助も初期のメンバーとして参加、桜井潔も曲は判らないが入ったものがあるとのことである。

杉井幸一は夫人が声楽家でもあったわけでもなからうが唄も器用にこなして、コロムビア・レコードで1936年（昭和11年）6月に『祭りのルンバ』～「フィエスタ」をアレンジしたものを杉井単独の歌ものとして淡谷のり子の『モルーチャ』とカップリングでリリースされている。

他にもキングで歌ったものが数曲あるとのことであるが、手元の資料からは見つけることが出来なかった。

とにかく杉井幸一のスケールの大きさは親分の桜井潔も及ばないものがあり、その全てがこのキング・ノベルティ・オーケストラのレコードで実証されているのである。



(出典<http://srd.yahoo.co.jp/IMG/ig=1...>)



(出典<http://bridge-inc/jugem.jp/?eid=190>)

## 18

### 相馬昭三とオルケスタ・ティピカ・オルガニート

相馬昭三さんはピアニストで、タンゴ界では学校教師出身という変り種の経歴の持ち主。さすが、先生と呼ばれるにふさわしい人格の持ち主で、今でもマエストロとして多くの後輩たちに慕われている。相馬さんが活躍したのは昭和30年代で、東京・新橋フロリダの昼の部や、ブルボン、コロムビアなど往年のタンゴ・ファンにとって忘れられない店のレギュラー楽団であった。

相馬さんのあのオルガニート・デ・ラ・タルデのピアノの音色は、今でも耳についているという熟女たちが少なくない。私にとっては力強いディ・サルリ風のア・ラ・グラン・ムニェーカのタッチが耳についているが、何でも巧にタンゴなら弾きこなすというのが相馬さんの印象である。

今日、相馬さんはお元気に本業の損害保険代理業でお忙しい日々を地元、川口市を中心に活躍され過ごされている。昔のタンゴ仲間たちとの交流も途絶えることなく続けられているのが嬉しいところである。機会あるごとにピアノに向かわれて現役時代のメンバーとタンゴを演奏する日々もあるというから、何のことはない、まさにタンゴ・ミュージシャンの現役そのものなのである。

相馬さんはタンゴのミュージシャンとして最初に仕事をしたオルケスタは伊吾田勇三（バンドネオン）さんのオルケスタ・ティピカ・ブエノスアイレスであった。そこでしばらく本格的なタンゴのピアノ奏法を身につけられて程なく自らのオルケスタを編成されることとなる。

相馬さんのオルケスタの過去のメンバーについて先日、詳しくお話を聞くことができ、結成当初か

ら今日までの在籍メンバーを詳細に教えていただいた。お話を聞いてビックリ仰天、日本タンゴ界の礎石を築いたすご腕のメンバーが揃っているのにあらためて驚かされた次第である。

バンドネオン陣は初期に横浜のホテルのホールで活躍して著名な石居庸介、ポルテニヤでも大活躍、つい先年他界された名古屋の森清、この二氏とともに坂本政一楽団に居た野村昌美、ティピカ・ブエノスアイレスのメンバーであった和木義道、第二期（中期）はクセロ・バンドネオン奏者の板津昇、板津さんは1958年頃、二本の東映映画にバンドネオンを手に出演されている。そして高田理郎という人、故人となった稲垣富蔵、ティピカ東京にも在籍した荒田時生、第三期（後期）には中島敏博、福山利雄、中泉、故人となった川口市の萩野精、川口のアマチュアでかなり弾いた福田さん、など多彩なメンバーで一時、緑川嘉信楽団、ティピカ・パンペーラで活躍した宮川精一郎さんも在団した。バイオリン陣は初期に歌代篤、中田達雄、橘慎吾、中期に志賀清、中川泰雄、松江甫、後期にティピカ・パンパで大活躍した神野昌人、故人となった岡元成三、川口の玉掛一男、ベースが現在、クラシック界で日本フィルハーモニー交響楽団の専務理事を務められている田辺稔氏と超大物揃いなのである。相馬さんがアマチュアにも道を、と西川口に開業した故・日向信吾さんの「エル・ジョロン」で結成したオルケスタ・ティピカ・ジョロンにはアマチュアでもかなりバンドネオンを弾きこなした福田契氏、タンゴ早稲田出身の蓮尾重徳（川口市役所）君、バイオリンの木村さん（元プロ）などよいメンバーが揃って居た。その勇姿は1985年のアサヒ・グラフ〜タンゴ特集に紹介されている。歌手の渡辺正さんは、かつて日比谷大音楽堂の「ヌエベ・デ・フリオ、グラン・タンゴ・コンサート」にオルケスタ・ティピカ東京の歌手として藤沢嵐子さんらと数回出演したこともある人で現在、東京・田端でスナック「パンチョ」を経営しておられるそうで相馬楽団のご一同の健在は嬉しいところである。

=====

## 19

### 幻のタンゴ・バンド『クラルテ』

長かった戦争が終わって、日本人が心おきなく軽音楽を楽しめる良い時代が到来した。われわれが気軽にタンゴを楽しむことが出来たのはNHKラジオであった。終戦直後の1945年9月3日には、東京・日比谷公会堂で催された「明朗音楽会」がNHKラジオで全国中継された。その冒頭を飾ったのがタンゴ楽団『桜井潔とその楽団』であった。その後、ラジオから流れるポピュラー音楽の生演奏では、ジャズのニュー・パシフィック・バンド、ピアノの和田肇、ハワイアンのバッキー白片、コミック・バンドのハット・ボンボンズなどであった。1946年11月、初めてオルケスタ・ティピカが、高橋忠雄編曲・指揮のもと、ポルテニヤ音楽の時間で華々しく登場した。

タンゴの楽団は『南十字星』『松本新室内楽団』『原幸太郎と東京六重奏団』などが主役で、淡谷のり子の伴奏楽団、「大山秀雄楽団」「緑川嘉信とベルデ・イ・ス・オルケスタ」「伴薫とメキシカーナ」「吉野章楽団」「頭山光楽団」などがこれに続いたが、トップの座は『桜井潔とその楽団』が占めていた。とにかく「ダントツ」で『サクライ』の名に及ぶ楽団は存在しない状態であった。

のちにわが国タンゴ楽団の主流となるマエストロたちは、これらの楽団の団員として細々と活躍を続けていたのである。1946年NHKラジオに『クラルテ』というタンゴ楽団の名前が聞かれるようになったが、高杉妙子という歌手の伴奏楽団として出演していた。当時、東京・麴町番町にあったクラブ『エ

スカイヤー』を根城に結成された楽団で、事実上のマエストロはのちの東京・キューバンを創設された見砂直照氏であった。このクラブの支配人は本物志向に熱心で、高橋忠雄氏や早川真平氏らと親交を深め、オルケスタ・ティピカ東京の結成に大きな貢献をされた方である。

最近この時期の楽譜が関西のタンゴ愛好家として著名な芝野史郎氏によって発掘され、先日（2月24日）の日本タンゴ・アカデミー総会の席上、芝野氏からタンゴ・クリスタルの小松勝・真知子夫妻に手渡され、小松氏は早い機会にこのまま演奏することとして、若手の連中にもこの譜面で勉強させる機会を、と熱っぽく語っておられたが、われわれにとってはこの上もない嬉しいことで、戦争直後のタンゴ楽団の音が再現されることを心待ちにしている次第である。『クラルテ』はバイオリン陣に村上太郎、田島巳之助、ピアノに佐々木典年、アコーディオンに吉田秀士、ベースに見砂直照といったスター・プレーヤー揃いの、レベルの高い楽団として業界の話題を呼んだ。そのわりにラジオでの活躍が主体で『エスカイヤー』以外でのステージやレコーディングなどの活躍はなく、間もなく『クラルテ』の名を聞くことはなくなってしまった。

その強力なメンバーからしても、ただ消えてしまったでは済まされない重みを持った楽団で、『幻のタンゴ楽団クラルテ』の名は何らかのかたちで残されるべきと考えてここに筆をとらせていただいたわけである。『クラルテ』は映画出演もしているという話も聞いたが、映画名や公開の時期等が不明なもの残念なことである。一時期この楽団で早川真平氏がバンドネオンを弾いていた記録もあるが、『エスカイヤー』の専属楽団であったのだから当然考えられることである。

見砂さんも東京・キューバンの母体となった楽団だけに、亡くなる一年くらい前にお会いしたときに『クラルテ』の思い出を熱っぽく語っておられた。この楽団は、戦後最初に「小雨降る径」「ポエマ」を演奏した楽団であることも特筆しなければならないことである。放送ではヨーロッパものが主で、アルゼンチン・タンゴでは「ラ・クンパルシータ」が耳に残っている程度である。ラテン・ナンバーで「ソルトロピカル」、アフロ・キューバンの「エンジョーロ〜ブドゥー・ムーン」をよく演奏していた。

ラテン・ナンバーは、のちの東京キューバン・ボーイズの初期のレパートリーとしてそのまま使われた。『クラルテ』はわが国ラテン・バンドの基をなす楽団と云っても過言ではないと思う。しかし、編成は立派なタンゴ楽団なのである。

日本のタンゴ楽団の足跡が語られる場に、いままで『クラルテ』の名が語られなかったのは不思議な感じがするが、筆者自身、この場で初めて紹介させていただくのだから…。

幻の…という表現を使わせていただいたのも、こんなところに理由がある。

=====

## 20

### もうひとつの幻のタンゴ楽団 三枝 登とその楽団

戦後という言葉が風化しかけた頃、世の中が平和ムードいっぱい、物資不足の時代から物余りの時代で、販売競争、物流確立といった今まで考えられなかった風潮がみられてきた。長く続いた『吉田ワンマン内閣』もそろそろかと連日、新聞の政治面を賑わしていた1954年（昭和29年）首都東京は民放、テレビの時代を迎えた。プロレスやプロ野球に夢中の大衆、学生、OLなどはラジオから流れる新しいジャンルの音楽を追っかけてレコード店、店頭で群がるよき時代の到来が感じられた。そん

ななか、毎朝、東京の文化放送から昔風の軽音楽の15分番組が登場した。

『さくら、さくら』がテーマ音楽のタンゴ楽団はコンチネンタルでもない、もちろんポルテニアの香りもしない、いわゆるケイオンガクそのものの感じの楽団であった。そうかといってあの『桜井潔とその楽団』の再来とはおよそかけ離れたものであった。

毎朝、きまって午前7時45分からの15分間、心地よい軽音楽の調べは確かに聴く人の心をとらえか  
なりのリクエストにディレクターは気をよくして、張り切っていたとのことだが半年余りでこの楽団  
は番組とともに姿がみえなくなった。数年経ってから聞いた所によると若きあの、有馬徹の主宰する  
楽団であったという。東京キューバンが『クラルテ』や『ラ・マスカラダ』などの別動隊を配下  
におさめていた時期にこの『三枝登楽団』は「ノーチェ・クバーナ」の胎児であったということは、日  
本タンゴ史のなかにあってまことに興味深い史実である。

この楽団のレパートリーの広さには驚かされた。いわゆる軽音楽全般のみならず、ピアソラ作品ま  
で飛び出し、聴いているわれわれは肝を潰さんばかりに驚いた。嬉しかったのは早川真平、刀根研二  
作品も演奏されたことである。筆者が初めて聴いたとき、パソドブレの『アストリアス』ルンバで『ア  
ルゼンチンの月』ポピュラー・ナンバーから『ジプシー・ドリーム・ローズ』など思わず耳を傾けて  
しまう曲が次々に飛び出した。タンゴのスタンダード・ナンバーはあまり演奏されなかったようであ  
ったがエドアルド・ピアンコ作品の『マドレセルバ』や『ネグリタ』などはどうやら坂本政一さんの  
アレンジのようで、楽団シローの譜面をそのまま使っていたようである。それほどのレパートリーを  
苦もなくこなす楽団でありながらバンドネオンの音が聴かれなかったのが不思議であったが反面アコ  
ーディオンのテクは抜群であった。

当時のメンバーがどんな方々であったのかOBの方々に尋ねているのだがその詳細がよくわからない  
ので、更に追いかけている昨今なのである。

当時、出始めたオープン・リールで録音した記憶もあるが、なにしろテープの値段が高く、前の録  
音を消去しながら次の録音を.. という時代だったので残念ながら手元にその音は残っていない。た  
だ全国にその時代の音源をお持ちの方もそう多くはないものの、いくらかは居られるようなので方々  
に声をかけてこれも追っかけの現状なのである。

オープン・リールのテレコの時代は1955年～65年が全盛ということなので、この時代のタンゴ番組  
の音は全国的にはかなり、残されている筈である。オーバーではなく、草の根をかきわけ、石を噛っ  
てでも捜したいものである。ただ、スコッチ・テープ、東通工のテープにしても今日のカセット・テ  
ープにくらべたらびっくりするような高価であっただけに、消しては使うという風潮で、保存用は余  
程のものでなければ使えないというのが実情であった。従ってこの程度の音が残されている可能性は  
少ないと思うのだが...

=====

## 編集部から

蟹江丈夫氏は平成22年1月に日本タンゴ・アカデミーを退会されました。しかし「日本のタンゴ楽団」シリ  
ーズには今日では貴重となった有益な情報が数多く含まれおり、また全シリーズの執筆がすでに完了して  
いるので、氏の退会をもって継続中止とはせず、「元会員」扱いで掲載は継続いたします。なお原稿の執筆時点  
から年数が経っているため、一部の記述は必ずしも現在の状況ではない可能性があることをお断りしておきます。

# Astroricoの20年

角田 昭

今年、Astroricoが創立20年を迎えた。4人でスタートしたこのグループが、その後次第に成長し、現在ではその技量、品格に於いて国内第一級と評価され、更には海外の大規模なイベントにも重ねて招聘されるなど、国際的にも立派に通用するレベルに達している。

しかし、その本拠地が京都であり、当初の活動範囲が主に関西、東海地方であったことから、それ以外の地方での知名度は必ずしも高くなかったようである。

私は数年前迄京都在住であったため、このグループとは発足直後から接する機会が多く、タンゴ演奏団体としての能力、力量には実に感動的なものがあり、ここに自信を以ってご紹介させて頂くものである。以下、文中ではメンバーについての敬称は省略させて頂く。

## 1. Astrorico創設に至る迄

リーダー門奈紀生（もんなどしお）が始めてタンゴを耳にしたのは中学三年生の時、バンドネオンという楽器の音色に心を魅かれた。間もなく横浜ポルテナヤ音楽同好会に入会、ラジオのタンゴ番組を必ず録音して聴き直すなど、タンゴ一筋の青春時代を送ることになる。

その後、真剣にアルゼンチンへの移住を考え、スペイン語の講座のある大学へ入学、それと略々同時期にバンドネオンを手に入れた。一年間ほど練習した後、本格的に教えを乞うべく、とある楽団を訪れた処、自前のバンドネオンがあるなら、直ぐステージへ上れ、と言うことになり、即日プロ・デ



1998年頃の四重奏団 左から、大塚功、麻場利華、門奈紀生、平井かほる



ビューと相成った。

65年、坂本政一のティピカ・ポルテニヤの南米ツアーのメンバーに選ばれたが、渡航前の検査で結核が発見され、断念するに至った。67年に平野洋輔のロス・タンゲーロスに参加、更に70年に帰国した坂本政一のヌエバ・ポルテニヤに参加したが、この時期タンゴはジャズやロックに圧されて次第に衰退、門奈は遂にタンゴをあきらめるべく、京都へ転居した。74年のことだった。

クリスチャンであった門奈が京都で通っていた教会の牧師から、賛美歌の伴奏の依頼があり、これがバンドネオン再開のきっかけとなった。程なく「京都セイス」を結成、これは約10年程続いたが、このメンバーの中にバイオリンの麻場利華が居た。

87年頃、ヌエバ・ポルテニヤ時代の同僚だった小松勝、真知子夫妻が「タンゴ・クリスタル」を立ち上げ、門奈に参加の要請があった。この時期から数年間「京都セイス」と「タンゴ・クリスタル」の双方で活動、関東と関西とを往復する日々が続いたが、やがて関西での若手音楽家の育成に心が傾き、結成したのが「Astrorico」であった。

創立は1991年末、そして翌92年4月23日、京都ドイツ文化センターに於いて、デビュー・コンサートを開催する運びとなった。バイオリンには勿論麻場を起用、そして彼女が音大同窓の平井かほるを誘い、ここにグループの骨格が固まることとなる。

## 2. Astroricoの軌跡

Astroricoの歩みは、前半の10年と後半の10年とに大別するのが妥当である。

### (2-1) 成長期 (1991～2000)

リーダー門奈が最初に掲げた目標は、「アストル・ピアソーラの音楽をレパートリーの中心に据える」と言うことだった。これは、二つの側面を持っていた。先ず第一に、集まったメンバーが夫々タンゴ、クラシック、ジャズと異なった分野の出身であり、彼等が一つにまとまるためには「共通の言語」が必要で、それがピアソーラだった、と言うことである。

今一つは、当時の低迷していたタンゴ界で活路を見出すためにはタンゴ以外の分野にも愛好者を求めるべきで、ピアソーラの音楽はファン層を広げるだけではなく、タンゴに関心を寄せる音楽家を増やすことにもつながるのではないかと、言うことだった。これはかねて門奈が提唱していた「タンゴ草の根運動」の主旨でもあった。

しかし、その一方では、保守的なタンゴ・ファンの反発を招く可能性も大きかった。この1991年と言う時期は、所謂「ピアソーラ・ブーム」の起こる前であり、門奈のこの決断はかなりのリスクを伴うものであった。

だが、Astroricoのスタートは意外、と言えるほど順調だった。即ち、この最初の10年間に、8回にわたって実施した海外ツアーが現地で極めて好評を博し、それが連鎖的に次のイベントへの招聘につながって行ったのである。以下、これらの海外ツアーについて少し述べておく。

#### (a) 1993年11月。スペイン・ツアー。四重奏+上原ひろみ(歌)

このツアーは、当時の歌手であった上原ひろみのスペイン語の講師から、旧知の在マドリード日本大使館の文化担当官を紹介されたことから始まり、その結果同大使館主催で文化交流の催しを実現、500人収容の会場が満席となり、現地の新聞でも「タンゴの心をよく表現している」と称賛され、

続くラジオの取材にて例年のグラナダ・タンゴ・フェスティバルに推薦されることにつながった。

(b) 94年4月。アルゼンチン。四重奏。

元当会理事芝野史郎氏、その友人であるドリータ・カスティジョ女史の尽力によって実現。アルベアール劇場の市立タンゴ楽団公演に客演、後カフェ・トルトーニ、サン・マルティン劇場等で単独公演。

(c) 95年4月。スペイン、南米ツアー(国際交流基金助成事業として)。七重奏+宮津弘子(歌)+フリオ&ミキ(踊り)。

前述の経緯で第7回グラナダ国際フェスティバル及び併催の第2回世界タンゴ・サミットに招聘出演。来演のアントニオ・アグリから「あれだけの演奏は驚き」と。後、マドリードのビクトリア劇場等で公演。

帰途、アルゼンチン、チリ、ウルグアイに立ち寄り、チリでは商社の駐在員であった大澤寛氏(当会理事、歌手Sayacaの父)の尽力でチリ大学主催の公演を行い、この縁で提携校である早稲田大学大隈講堂での公演を実現することになった。

(d) 96年。南米諸国ツアー(国際交流基金助成事業として)。七重奏+Sayaca(歌手)+フリオ&ミキ(踊り)。

ウルグアイでの第3回世界タンゴ・サミットに招聘。TV "Solo Tango"出演。

IONスタジオでCD第3集「De Japón A Bs As」収録。

(e) 97年11月。ウルグアイ。四重奏。

モンテビデオで第11回国際タンゴ・フェスティバルに招聘。

(f) 98年2~3月。アルゼンチン。四重奏+大浦みずき(歌)。

IONスタジオでCD第4集「Che Tango」収録。サン・イシドロ市主催、日亜修好100周年記念行事に出演。

(g) 2000年9月。トルコ、アルゼンチン。四重奏+ロベルト・デ・ロサーノ(歌)+ルシア&アルバロ(踊り)。

トルコ・マルマリス国際タンゴ・フェスティバルに招聘出演の後、ロサリオでの第5回世界タンゴ・サミットに招聘出演。このツアーの直前、門奈が緊急入院、代役としてアレハンドロ・サラテを立てての参加となった。

この間の国内での公演についても順調に推移し、99年には年間公演回数が60回を超える迄になった。内容別に分けてみると、

(h) ピアソラ・メモリアル

最初の6年間では、93年の1回のみだけだが、97年以降は毎年1回の実施となった。

(i) 公的イベントへの参加

94年 平安遷都1200年祝賀行事、

95年 阪神淡路大震災チャリティ、など。

(j) 大浦みずきとのコラボレーション

元宝塚歌劇花組トップの大浦みずきとの共演は97年~99年の間、累計32日間となり、更に後に続く。

(k) タンゴ・モデルナ

オフィスMARK & I制作によるショー。コメンテーター 筑紫哲也。

98年 東京スカパラダイス・オーケストラ、大浦みずきとの共演が最初、以後も継続。

即ち、97年頃よりメジャーのプロモーターの注目を集めるようになった。

## (2-2) 形成期 (2001~2011)



2001年1月28日  
完全復帰当日の門奈紀生

2000年7月12日、門奈が心筋梗塞のため緊急入院し、奇跡的な回復は見せたものの、活動は半年間ドクター・ストップとなった。しかし、若手のがんばり、ベテランのバックアップ、代役として10月に来日したアレハンドロ・サラータの活躍などによってこの危機を乗り切ることが出来、2001年1月28日、門奈は完全復帰を果たしたのである。

2002年以後、門奈は次々に新しい目標を提示する。「ピアソラ&プグリエセ」「ダリエンソ&ディ・サルリ」「ギターの入った五重奏」「大編成での公演」「ポピュラーなタンゴへの志向」などがそれである。その結果として、Astroricoの活動はより多彩になって来た。内容別に分けてみると、

- (a) 海外ツアーが無くなった。
- (b) 「ピアソラ・メモリアル」、「ピアソラ&プグリエセ」を掲げる公演は03年で終了した。
- (c) 国内公演は、08年以降、60回~90回/年間と急増している。これはアンデルセン文化事業部と組んでの関東公演開始が主因と考えられる。

(d) MARK & I制作の「タンゴ・モデルナ」は08年迄継続。菅原洋一、宮沢和史、尾崎紀世彦、ダイヤモンド・ドッグス、大浦みずき、杏子と共演。

(e) 大浦みずきとの共演は、01年及び08年に夫々年間13日の公演があったが、02~07年は年間1~3日と低調。そして09年11月、大浦みずき死去。

(f) 公的行事への参加急増

03年 京都、中高生1500人対象のレクチュア・コンサート、

05年 愛・地球博イベント、

〃 兵庫県/阪神淡路大震災10周年行事、

07年 岡山国際音楽祭、

09年 岡山 宇喜田堤築堤420年記念行事、

09年6月 世界最大級のタンゴ・サイト「10 Tango」の指名により、「10 Tango com. Festival En Tokio」に招聘出演。

10年 セルバンテス文化センター/スペイン語圏フィエスタ、

♪ 浅草タンゴ祭、など

(g) 特別企画

03年 両国・シアター・カイ Tango On Brecht、

03～06年 ミサ・タンゴ（名古屋、大阪、東京、札幌で逐次）、大編成オーケストラと混声合唱による大曲。Bソリストとして門奈参加。

06年 タンゴ演奏ワークショップ、

08年 下鴨神社／源氏物語千年紀行事。



2003年8月9日 タンゴ・インペリオ 4周年記念行事での四重奏+ロベルト・デ・ロサーノ

(h) チャリティへの参加

03年 多治見・国際ソロプチミスト主催、

06年 映画「二人日和」CD収益の一部を日本ALS協会へ寄付、

♪ 京都府視覚障害者協会主催、

♪ 日本キリスト教海外医療協力会主催、

10年 新潟・国際ソロプチミスト主催。

(i) 映画

05年 「二人日和」の音楽（演奏）を担当。門奈「Dar Vuelta」作曲。ドイツ・日本映画祭にて一等賞受賞

(j) TV, ラジオ

03～07年 FM京都三条ラジオ・カフェのタンゴ番組コメンテーターに麻場。その他TV取材も増加。

(k) 分派活動

04年頃から、各メンバー個別に参加の関連ユニット。

Los Malevos / Tango Garufa / Tango En Via / Coqueta / Surus / Arco Iris

### 3. Astroricoメンバーの変遷

ここでは夫々の時期の代表的な布陣だけを記載し、短期の在籍者については省略する。

#### (3-1) 四重奏の場合

92～97年 B門奈紀生 - V麻場利華 - P平井かほる - C b 蓑輪裕之

97～2011年 B門奈 - V麻場 - P平井 - C b 大塚功

#### (3-2) 大編成の場合

93～96年 B門奈 - 1 V麻場 - 2 V潮新一郎 - V a 山本愛子 - V c 清水和人 - P平井 - C b 蓑輪 (七重奏)

97～04年 B門奈 - 1 V麻場 - 2 V高瀬真理 - V a 山本 - V c 木村政雄 - P平井 - C b 大塚 (七重奏)

以後の加入。00年B生島大輔 (05～10年休団)、下城聖史 (11年～休団)、01年G岡本博文、B奥村友紀 (08年よりB s A s 留学中)、02年V木村直子、04年B平沼仁詩 (08年退団)、05年B星野俊路、V吉野美穂、08年B田中香織、09年V麻場友姫胡。

一方、05年V高瀬、07年V a 山本退団、(V a は木村直子が担当)

11年2月現在の陣容

B門奈、星野、生島、田中

V麻場利華、外園 (旧姓吉野)、麻場友姫胡

V a 木村直子、V c 木村政雄、P平花舞依 (旧姓平井かほる)、C b 大塚、G岡本

尚、Arco Irisの現陣容は、女性メンバー全員に加えて、C b 滝本恵利



2007年2月25日 名古屋市民会館 大編成のオーケストラ

#### (3-3) 歌手

ゲスト歌手、短期間の歌手を除くと、

96～98年 Sayaca (08年、10年にも時折登場)

97～09年 大浦みずき（本来はゲストだが、本人はアストロリコ専属と自称していたこともあった）

98～11年 ロベルト・デ・ロサーノ

#### (3-4) 踊り手

94～97年 フリオ&ミキ

97～11年 ルシア&アルバロ

### 4. AstroricoのCD（ただし現在入手可能のものに限る）

- (1) CD クラウンCRCP-20180「Che, Tango」 98/2 IONスタジオで録音。迷子の小鳥、チェ・タンゴ、ミケランジェロ70、他。（四重奏+大浦みずき）
- (2) CD クラウンCRCP-20223「Che, Tango '99 Live」 99/7 銀座セゾン劇場ライブ。フラカナパ、ロコへのバラード、私はマリア、他（四重奏+大浦みずき）
- (3) CD Soluna-002「タンゴ、我が青春」 平野洋輔とロス・タンゲーロス  
1967～72年録音の復刻盤。  
オテル・ビクトリア、エル・モニート、エル・ポジョ・リカルド、他
- (4) CD Soluna-003「Zum / ピアソーラ・メモリアル・コンサート・ライブ」  
99/8/29 京都文化博物館での七重奏でのライブ。  
天使のミロンガ、フーガと神秘、他
- (5) CD Soluna-004「オスバルド・プグリエセに捧ぐ」 02/9 ソウルにて録音。  
エマンシパシオン、思い出、エネ・エネ、パタ・アンチャ、他
- (6) CD Soluna-005「なつかしい日本の歌」 03/8、九重奏  
故郷、村祭、夕焼け小焼け、他
- (7) CD Soluna-006「二人日和」 同名映画のサントラ盤。  
ダル・ブエルタ、思い出、アラバル・アマルゴ
- (8) CD Soluna-007「Salud, Tango Y Amor」 07/2/25 名古屋市民会館に於ける15周年記念ライブ。九重奏+ロベルト・デ・ロサーノ  
夜のプラットフォーム、台風、マラ・フンタ、ジェラシー、他
- (9) CD Soluna-008「ガウチョの伝説」 11人編成 09/7/25 京都府民ホール・アルテイにて収録。  
レジェンダ・ガウチャ、メタ・フィエロ、カフェ・ドミンゲス、リベルタンゴ、他

#### あとがき

島崎会長からの要請もあってとりかかったこのレポートだが、手持の資料に欠落が多かったことからアストロリコに援助をお願いし、早速麻場利華さん、ソルーナ事務所の杉野代表から大量の資料、お便りを頂いた。この全てについて目を通したのだが、Astroricoの成功の陰には、勿論当事者の技量

の高さ、普段の研鑽が根源とは言い乍ら、他方では、実に多くの方々のサポートがあったことがよく理解できた。

ファン・クラブ「Amigos Del Monna」を立ち上げ自ら会長となって旗を振った芝野史郎氏、自ら神戸地区でのプロモーターとなりこの20年間コンサートの企画、チケット販売を続けて来られた山本雅生氏、その他各地の同好会、ファンの方々、そしてAstroricoを基盤から支えて来られたソルーナ事務所の杉野代表等々……。

それに対して自分は何をして来たのか、ただひたすらファンとしてコンサートに通って来ただけ、そんな私がこの20年を記念するレポートを書く資格があるのだろうか、と自問してはみたものの、ここはもう既にかかりかかった舟であった。何とかこの「あとがき」に迄漕ぎつけて、今ほっとしている処です。

2011年2月現在のオルケスタ・アストロ  
リコ（11人編成）のメンバー

 Bandoneon	 Bandoneon	 Bandoneon	
門奈 紀生	星野 俊路	生島 大輔	
 Bandoneon	 Violin	 Violin	 Violin
田中 香織	麻場 利華	外園 美穂	麻場 友姫胡
 Viola	 Violoncello	 Piano	 Contrabajo
木村 直子	木村 政雄	平花 舞依	大塚 功

2011年6月12日(日)

於:姫路市 南風会サロン

# アストロリコ四重奏ライブレポート

鈴木 忠夫(姫路市)

姫路にこんな立派なホールがあったとは知らなかった。2007年にオープンして以来毎月クラシックの演奏会を開いてきたという。灯台下暗しとはこのことだ。姫路駅に近く大きさも手頃で何よりも音響が素晴らしい。理事長の歯科医の藤原先生は若いころからの音キチで、ここは長年の理想の実現とのこと。この催しの発端はアストロリコのピアニスタの麻場利華さんに、姫路中南米音楽愛好会の圓尾かほるさんがこの「南風会サロン」のことをチラと漏らしたところ、麻場さんは「ソレいこう」というより早くインターネットで検索し、藤原理事長にコンタクトをとって会場を抑えてしまった。姫路中南米音楽愛好会の鳥本会長に「アストロリコ四重奏6月12日(日)14時～ ¥3000」チケット売り込みだけ頼む、と連絡があったのはそのあとで姫路の者どもは天から降ったような話に驚いた。他ならぬリカちゃんの依頼とあっては「シャアナイな」と会員も一致協力して準備に取り掛かった。

演奏会の当日は生憎雨天だったが神戸、大阪、京都、四国などから多数のタンゴファンが馳せ参じて下さり、南風会サロンの常連さんも加わって約80人が定員のホールは満員となった。

例の如く麻場さんの司会でコンサートはスタートした。1曲目の「エル・チョコクロ」はゆったりしたテンポで始まったが気合が乗ってくる程にテンポも早くなりそのままの勢いで2曲目の「カフェ・ドミンゲス」に突入当楽団のトレードマークみたいな曲だけに会場一体の盛り上がりで、終わった途端盛大な拍手と「ムイ・ビエン！」の掛け声がとんだ。ここでメンバーの紹介があり続いて麻場さんが質問者になってマエストロがバンドネオンの歴史と構造を説明するコーナーで麻場さんの「この楽器の生国は？」の質問に「バンドネオンはドイツで出来た」それから自分の愛器をちょっと持ち上げて「これはオランダ」一瞬会場はキョトンとなったが「オランダ」が「俺んだ」の意味と分かって大爆笑。大真面目で無口の代名詞のマエストロの10年に一度のダジャレだそう。雨が降るはずだ。

順調にプログラムは進んで7曲目「エル・ディア・ケ・メ・キエラス」では珍しくコントラバスのソロで始まった。第1部の最後はアストロリコが最も得意とするピアソラの作品「リベルタンゴ」でしめくくった。

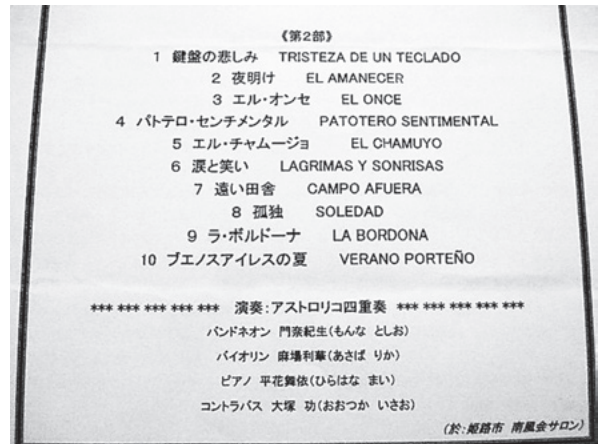
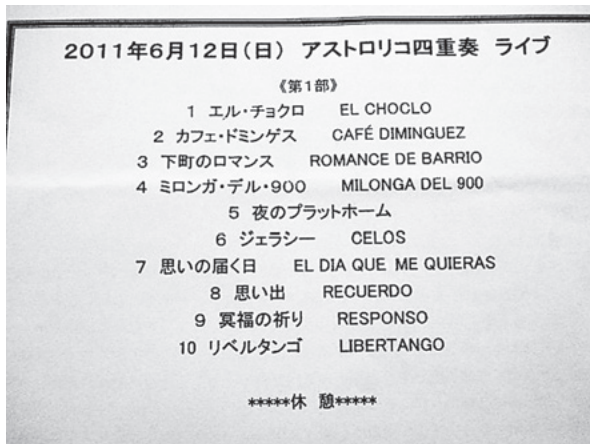
第2部は「トゥリスターサ・デ・ウン・テクラード」で始まった。多様なピアノ技法を求められる曲であるだけに平花舞依さんの腕の見せ所で、素晴らしいピアノを堪能できた。現代曲に続いて2, 3, 4, 5曲目とタンゴの古典のスタンダードナンバーが続き、6曲目バルス、7曲目ミロンガとすこし肩の力を抜いて、いよいよ最後の盛り上がりへと気迫に満ちた8, 9, 10曲目となったが特に9曲目の「ラ・ポルドーナ」の重厚な演奏、10曲目の「ベラノ・ポルテーニョ」の熱演は素晴らしかった。オートラ！に込めて「ラ・クンパルシータ」が演奏され一同大満足のライブだった。

このライブはアストロリコが姫路中南米音楽愛好会のために採算を度外視して企画して下さったものでマエストロ門奈紀生氏はじめ前面に立って動いて下さった麻場利華さん、その他メンバーの方々



に姫路中南米音楽愛好会一同になりかわって深謝申し上げます。

更に優秀なホールを提供して下さった南風会サロンの藤原理事長にも厚くお礼申し上げます。



当日のプログラム (デジカメ撮影:鈴木 忠夫氏)



アストロリコ四重奏 TANGO Live 2011.06.12(日) 於:姫路・南風会サロン

(写真撮影:吉澤 義郎氏)

# コロールタンゴ日本公演を聴く

齋藤 富士郎

この原稿の執筆は元々は3月12日の中野サンプラザホールでの公演を聴かれる予定であった西川 薫氏にお願いしていた。しかし東日本大震災で公演が中止になったので3月1日の神奈川県民ホールでの横浜公演を聴いていた私がピンチヒッターとして執筆することになった。

コロールタンゴ来日楽団のメンバーは末尾のプログラム・コピーにあるようにプレーヤー7人+歌手1人の8人編成で、ダンサー陣は3組である。

コロールタンゴについてはラティーナ誌2010年12月号に鈴木 一哉氏が詳細な記事を寄せられているので、ここでは横浜公演を聴いた印象に話を絞る。

上記の鈴木氏の記事の中に「プグリエセ・スタイルはプグリエセ楽団にしなければわからない」というアルバレスの言葉が引用されているが、確かにコロールタンゴの演奏はプグリエセ楽団のメンバーであったアルバレスであるからこそ実現可能な力強いプグリエセ・スタイルの再現であったと言えるだろう。残念ながら私は1996年の公演は聴いていないので今回との比較はできない。しかしプグリエセ・スタイルと言ってもそれは決して単純な模倣ではなく、実際にはプグリエセ・スタイルをベースにしたアルバレス・スタイルであると言った方が適当かもしれない。若し単なるプグリエセ・スタイルの模倣であったら、これほど長続きはしなかつただろう。

プグリエセ・スタイルといえば誰でもバンドネオンの合奏による力強いスタカートを思い浮かべ、実際、プグリエセ・スタイルを標榜する多くの楽団がそのようなスタイル（アルバレスはフォームと

言っているが）を取っている。しかしそれはプグリエセ・スタイルの一面に過ぎず、プグリエセ・スタイルの真骨頂はバンドネオンの合奏とそれを支えるバイオリン陣の活躍、更に両者をつなぐプグリエセ自身のピアノから構成される一つの壮麗な建築物のような音楽構成にある。それを実現するにはやはりバンドネオン3人以上、バイオリン3人以上+ベース+ピアノという編成が必要と思う。しかしプグリエセ・スタイルを標榜する最近の楽団は多くても6重奏編成か、それ以下である。これではどうしてもバンドネオンのスタカート中心にならざるを得ないだろう。こういった事情は実質的には6重奏編成のコロールタンゴの場合も同様であるから、アルバレスがプグリエセ・スタイルをベースにした



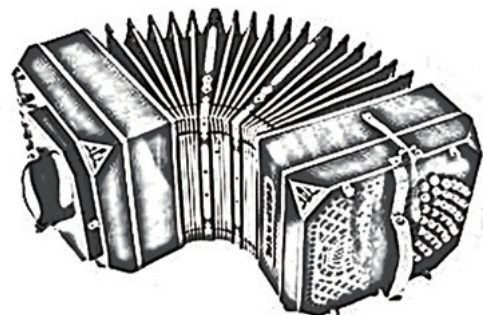
自己のスタイルを目指すのは当然だろう。

当日の演奏曲目はプログラム・コピーにあるように全25曲で、中身は当然ながらプグリエセのレベルトリオ・プロピオが中心である。どれもタンゴファンにはお馴染みのものであるが、タンゴを聴き始めた人でも知っているのはレクエルド、チケ、ラ・ジュンバ、エル・マルネ、ケハス・デ・バンドネオンといったところであろうか。歌は意外に少なく4曲だけであった。その代りに約半分の曲がダンス付きであった。これらの曲目の中でビダ・ミーアは唯一プグリエセのレパートリーにはない曲で、こういう曲はやはり歌詞が聴きとれないと本当の良さは中々わからないだろう。ケハス・デ・バンドネオンもあまりプグリエセ的ではないだろう。

演奏は前述のように演奏はアルバレスのバンドネオンが中心であるのは当然としても、それだけを強調し過ぎているようにも思えた。それはステージでアルバレスだけを一段と高い席に据えた演出にも反映されているが、これが彼自身の希望か、プロデューサー側の意向かはわからない。更に私の席がたまたまスピーカーに近かった所為もあるかもしれないが、アルバレスのバンドネオンの音だけがやけに強調されて、他の奏者の音があまり拾えていなかったようにも思えた。ロック・コンサートとは違うのだから、PA担当者にもそれだけの配慮を求めたい。アルバレスのバンドネオンだけを強調するやり方はプグリエセ・スタイルの本質を捉えたものとは言い難い。アルバレスを除いた他のメンバーはいずれも若手であるが、演奏力はしっかりしていたと思う。しかしこの点に関しては私は多くを語る資格はない。22歳の歌手のデカーレはアルバレスもまだ発展途上であると言っているが、中々の美声で、技巧過剰に陥らない嫌みのない歌い方であったと思う。一つ気になったのは、キーボードが何のために必要かということである。演奏を聴いている限り、キーボードの効果がどこにあるのかを把握することはできなかった。当人には悪いが、キーボード奏者の代わりにバイオリン奏者をもう一人増やした方が、よほどプグリエセ的になると私には思われた。

私自身はダンスにはあまり興味がないが、観客動員の見地からはダンスは有効なのだろう。それと観ていて気付いたのは、男性ダンサーの二の腕の太さである。やはりあれ位筋力がないと女性ダンサーを支えるのはできないのだ、妙なところで感心した。

3月11日の中野サンプラザホールでの公演は地震のために昼間の第1部が終わったところで中止となったと聞いた。最後の曲では建物全体が大揺れで、タンゴどころではなく、演奏が終わるや否や、演奏者全員逃げるように退散したそうである。メンバーや観客の中に怪我人が出なかったのが何よりの幸いである。地震を全く経験しなかったメンバーもいたはずで、さぞかし肝を潰したことであろう。この日の公演についてはたまたま会場におられた佐藤進氏に、その後の顛末も含めて執筆をお願いした。それがこの文章に続く文章である。併せてお読みいただきたい。





# Program

## プログラム

### 第1部

- |  |                   |             |
|--|-------------------|-------------|
| 1. BORDONEO Y 900<br>Oswaldo Ruggiero            | ボルドネオ・イ・ノベシエントス   | 楽団、カルラ&ガスバル |
| 2. LA MARIPOSA<br>Pedro Mario Maffia             | ラ・マリポーサ [蝶々]      | 楽団          |
| 3. LA LUCIERNAGA<br>José Dames                   | 蛍                 | 楽団、ダンサー3組   |
| 4. BARRO<br>Oswaldo Pugliese-Horacio Bastera     | バーロ [泥濘]          | 楽団、歌手       |
| 5. NARANJO EN FLOR<br>Virgilio y Homero Expósito | 花咲くオレンジの木         | 楽団、歌手       |
| 6. FRANCIA<br>Octavio Barbero                    | フランシア             | 楽団、ダンサー3組   |
| 7. VIDA MÍA<br>Oswaldo Fresedo                   | 我が命の君             | 楽団          |
| 8. LOS MAREADOS<br>Juan Carlos Cobián            | 酔いどれたち            | 楽団、チヅコ&ディエゴ |
| 9. RECUERDO<br>Oswaldo Pugliese                  | 想い出               | 楽団、ロイス&マルコス |
| 10. CHACABUQUEANDO<br>Roberto Álvarez            | チャカブケアンド [熱中しながら] | 楽団          |
| 11. CHIQUÉ<br>Ricardo Luis Brignolo              | チケ                | 楽団          |
| 12. PARA DOS<br>Oswaldo Ruggiero                 | ふたりのために           | 楽団、ダンサー3組   |

### 第2部

- |  |                   |                            |
|--|-------------------|----------------------------|
| 1. LA YUMBA<br>Oswaldo Pugliese                            | ラ・ジュンバ            | 楽団                         |
| 2. DESDE EL ALMA<br>Rosita Melo                            | 心の底から             | 楽団                         |
| 3. TANGO A PUGLIESE<br>Roberto Alvarez                     | プグリエーセに捧ぐタンゴ      | 楽団、カルラ&ガスバル、チヅコ&ディエゴ       |
| 4. ARRABAL<br>José Pascual                                 | 場末                | 楽団                         |
| 5. NEGRACHA<br>Oswaldo Pugliese                            | ネグラチャー            | 楽団、女性ダンサー1名、ガスバル、マルコス、ディエゴ |
| 6. A FUEGO LENTO<br>Horacio Salgán                         | とろ火で              | 楽団                         |
| 7. EL ADIÓS<br>Maruja Pacheco Huergo-Virgilio San Clemente | 別れ                | 楽団、歌手                      |
| 8. PASIONAL<br>Jorge Caldara-Mario Soto                    | 熱情                | 楽団、歌手                      |
| 9. EL MARNE<br>Eduardo Arolas                              | エル・マルネ            | 楽団、チヅコ&ディエゴ                |
| 10. QUEJAS DE BANDONEÓN<br>Juan De Dios Filiberto          | バンドネオンの嘆き         | 楽団、ロイス&マルコス                |
| 11. ZUM<br>Astor Piazzolla                                 | スム                | 楽団、カルラ&ガスバル                |
| 12. TOKIO LUMINOSO<br>Oswaldo Pugliese                     | トーキョー・ルミノソ [輝く東京] | 楽団                         |
| 13. PRIMAVERA PORTEÑA<br>Astor Piazzolla                   | ブエノスアイレスの春        | 楽団、カルラ&ガスバル、ロイス&マルコス       |

※都合により、曲目等が変更となる場合もございます。予めご了承ください。

※携帯電話等の電源は、予めお切りくださいますようお願い致します。

# COLOR TANGO コロールタンゴ

# Profile

オスバルド・プグリエーセ楽団で、第一バンドネオンを務めていたロベルト・アルバレスを中心に1989年に結成された。プグリエーセ派タンゴを継承するもっとも代表的な楽団。オランダの全国ツアーをデビューとして、これまでヨーロッパとアメリカをツアーしてきた。現在、タンゴダンス世界選手権などでも、彼らのレパートリー曲が採用されていることが多く、注目度が高まってきている。



## Roberto Álvarez (1st Bandneon)

ロベルト・アルバレス (第一バンドネオン)

1940年5月7日にブエノスアイレスのチャカブーコで生まれる。14歳の時、マルセッティの楽団にバンドネオン奏者として加入。1965～75年には自身の楽団などで活動し、1978年にオスバルド・プグリエーセに招かれ楽団に加入。すぐに自身の編曲を提供。1984年以降は同楽団の第一バンドネオン奏者として活躍。海外公演では世界中を回り、日本にもプグリエーセ楽団のメンバーとして来日している。その後1989年にコロールタンゴを創設。オランダでのデビュー公演以降、この楽団で世界中をツアーしている。



## Juan Pablo Gallardo (Piano)

フアン・パブロ・ガリャルド (ピアノ)

1980年ブエノスアイレス州サンイシドロ市生まれ。アベジャネーダ・ポピュラー音楽学校で学んだ後、サロン・タンゴなどに所属しコロル劇場で演奏を行った。その後ラミーロ・ガジョ、そしてボジョ・マイネッティと共演するなどその活動の場を広げている。



## Hernán Bartolozzi (2nd Bandneon)

エルナン・バルトロッシ (第二バンドネオン)

1974年ブエノスアイレス生まれ。ロドルフォ・ダシオとネストル・マルコーニに師事。オルケスタ・ティピカ・インベリアルなど有名楽団に所属。1999年からはクアルテート・ティピコ・ブエンテ・アルシーナで作曲、編曲者としても活躍。2003年からコロールタンゴのメンバー。



## Roberto Decarre (Singer)

ロベルト・デカール (歌手)

9歳の時に歌手としてフニン市のサン・カルロス劇場でデビュー。また同時にテレビ番組にも登場。2000年にはブエノスアイレス・ジュニア・トーナメントで優勝し、フェスティバルへ出演。また父であるオマール・デカールとアルバムを収録。2006年からコロールタンゴに加入。



## Fernando Rodriguez (1st Violin)

フェルナンド・ロドリゲス (第一ヴァイオリン)

ブエノスアイレスのフニン生まれ。ブエノスアイレスの国立音楽学校で学び、ヴァイオリンではラファエル・ジントリに、後に室内楽をトーマス・ティチャウエルに師事。1982年にオスバルド・プグリエーセ楽団に加入し、1986年からは第一ヴァイオリンとして活躍した。その後1989年に創設したコロールタンゴに参加。1995年からは楽団から一度距離を置き、ブエノスアイレスの有名なタンゴハウスで活動。2006年にコロールタンゴのメンバーとして復帰。

## Dancers ダンサー



## Carla & Gaspar

カルラ&ガスバル

2010年ペア結成。カルラはダンサーとして数々の有名なショーに出演するだけでなく、演出家、振付家、監督、指導者としても活躍。ガスバルは2003年タンゴダンス世界選手権ステージ部門チャンピオン。タンゴを代表する演奏家、楽団と共演を重ね、コロル劇場にも出演。



## Ernesto Gómez (2nd Violin)

エルネスト・ゴメス (第二ヴァイオリン)

1983年7月11日ブエノスアイレス生まれ。アベジャネーダ・ポピュラー音楽学校でマウリシオ・マルチェリ、アレハンドロ・シャイクス、ラミーロ・ガジョに師事。その後コロル劇場・アカデミー楽団のヴァイオリン奏者として活躍。オルケスタ・エス・クエラ・デ・タンゴでも活躍し、2009年からコロールタンゴに参加。



## Louise & Marcos

ロイス&マルコス

それぞれ幼少よりバレエダンサーとしてステージに立つ。マルコスは2005年にはサッカー元代表マラドーナ氏とテレビ番組で共演。ロイスは2006年にはブエノスアイレスの有名なタンゴハウス、マデーロ・タンゴにてコロールタンゴとともに出演。ペア結成以降、数々のマエストロと共演し、各国のツアーで成功を収めてきた実力のカップル。



## Gustavo Hunt (Keyboard)

グスタボ・ハント (キーボード)

1964年9月4日ブエノスアイレス生まれ。カルロス・ロベス・ブチャード国立音楽学校で学んだ後、アベジャネーダ・ポピュラー音楽学校をジャズ専攻で卒業。1992年からコロールタンゴにキーボード奏者として参加。



## Chizuko & Diego

チツコ&ディエゴ

チツコはミュージカル女優として活躍。2003年よりタンゴを始める。ディエゴはこれまでタンゴダンス世界選手権をはじめ、各大会で輝かしい成績を収める。2010年タンゴダンス世界選手権で優勝し、日本人初のステージ部門優勝ペアとして注目を集めた。現在日本でタンゴ教室を開きつつ、数々のショーに出演している。



## Manuel Gómez (Contrabass)

マヌエル・ゴメス (コントラバス)

1975年9月10日ブエノスアイレス生まれ。コントラバスをシロ・ブオーノ、セルヒオ・リバス、N.フェスの元で学び、オラシオ・カバルコスの前でタンゴを学ぶ。クアルテート・ティピコ・セクシオン・ベルムなどのポップスの世界で活躍後、レオポルド・フェデリコやウーゴ・リバスのクアルテートで演奏をした。2001年からコロールタンゴのメンバー。

予告

2012  
Dramatic TANGO

ドラマチック・タンゴ

2012年、  
民音タンゴ・シリーズ(43)に  
バンドネオン奏者  
ファビオ・ハーゲルが  
決定!

# マエストロもびっくり 大揺れの中野サンプラザホール

佐藤 進

3月11日コロール・タンゴ東京公演昼の部は満席で、演奏を期待している愛好家、チズコさんのダンスを観ようと詰めかけたにわかファンをまじえ、それぞれにどんな舞台が繰り広げられるかあちこちでおしゃべりしながら開演を待つうちに、「ボルドネオ・イ・ノベシエントス」の演奏をバックにカルラとガスパルのダンスで始まった。プログラムは順調に進み、拍手の多かった「チケ」に続き、第1部最後の曲「パラ・ドス」の演奏に移り、ねばりつくようなリズム感に浸っているうちにダンサー3組の華麗なるダンスが進行し、第1部のハイライトという場面であった。

最初はなにか身体が揺れているような気がしたが、感じる揺れはだんだんと大きくなり、見上げると天井から下がっているスピーカー群が揺れているのが見えた。周りを見ると観客は地震が来たなと感づきすこしざわめきが聞こえだした。若干の間をおいて揺れが激しくなり、地面が揺れだし、建物全体の揺れが感じられ、頭上のスピーカー群が振り子のように揺れだすようになると、観客は周りを見たり、見上げたりしながら、腰をあげて早くこの場を逃げ出したい状況になっていた。この時点では演奏者もダンサーも地震には気づかず、気合いの入った演奏とダンスを続けていたので、出演者がパフォーマンス中は観客が先に逃げるのは悪いという日本人的発想からか、席を立ちたいけれどどうしようかという瞬間であった。ひときわ大きな揺れが感じられるにおよび、演奏者もダンサーも異常事態に気付いたとたん、パニック的行動で楽屋のほうへ逃げ込んでいった。この時演奏者が楽器をどうしたかは、私には気づく余裕はなかった。演奏者とダンサーが舞台から消えるとほぼ同時に緞帳が下がり、観客は一斉に立ち上がり出口のほうへ動き始めたが、急ぐあまり椅子近くにマフラー、バッグなど置き忘れていた人たちもあった。観客の恐怖感がピークに達した時である。この時私は最も気にかかっていたのが、まさか建物は倒壊はしないだろうが、すぐ頭上で時計の振り子のように揺れているセンター・スピーカー群が今にも落下するのではないかという恐怖に襲われ、一刻も早くその場を逃げたいとあせる気持ちと同時に、もし落下の兆候が見えたらすぐにコートを頭からかぶり椅子の間にしゃがみ込む姿勢でいた。もっとも何トンあるかわからないあのスピーカー群が落下したら椅子ごとペチャンコになってしまうのは明らかである。後ろから押されたり前に行く家内を押ししたりとややもみくちゃになりながらも揺れるスピーカー群から離れられた時は、恐怖状態からは脱した。ややたって大揺れもおさまったころ、ロビーへ避難するようにとの館内案内員の指示に従いロビーへ向かいかけたが、ロビーは満員の状況のため余震におびえながらも暫く館内の出口近くにとどまった。暫くしてロビーへ移動し会員のSさんと会い一緒に待つうち、地震からおおよそ30分後に、当日の公演は中止すること、入場券は追って払い戻すとのアナウンスがあり、得をしたような損をしたような複雑な気持ちでホールを後にした。

その後の状況は省略するが、足の痛さと寒さに震えながら帰宅できたのは、翌朝空が明るくなる頃であった。事後談であるが、当日の体験をある会員に伝えたところ、帰国後マエストロは「ヂシン」という新曲を発表するのではないかと話していた。

東京・春・音楽祭 —東京のオペラの森2011—

## アルゼンチン・タンゴの夕べ ～小松真知子&タンゴクリスタル～

齋藤 富士郎



2011年4月1日、東京文化会館小ホールで開催の、今年で結成25周年を迎えた、小松真知子&タンゴクリスタルの演奏会を聴いた。東日本大震災の影響で東京・春・音楽祭として企画された音楽会が軒並み公演中止となった中での開催で、客足が懸念されたが、ふたを開けるとほんの数えるほどの空席があるのみの盛会であった。

楽団メンバーは下に示したように全員がお馴染みの面々で、演奏曲目はフォルクローレの2曲を除けばいずれもよく知られた曲であった。小松 勝氏の編曲は、小松真知子さんの力強いピアノを中心に、随所に独自色を打ち出しながらも押しつけがましいところがなく、更にご自身のギターの聴かせどころも忘れないという、中々のものであった。

演奏会は"9 de Julio"に始まり、"Café Dominguez", "Tanguera"と続いた。更にそれに続けて、"Tanguera"にそのメロディーの一部が使われたという、「荒城の月」を配したのは中々気の利いた趣向である。小松真知子さんが得意とするオマール・バレンテの"Tristeza de un Teclado"とオスカル・エレロの"Quejumbroso"はあまり演奏会では取り上げられないやや異色の選曲と言えよう。ピアソラの"Lo que vendra"は誰が演奏しても大体はピアソラ風になってしまうものだが、ここではそうならずしっかりと独自色を打ちだされていることに感心した。"La Yumba"、"Quejumbroso"、それに"Gallo Ciego"はプグリエセのお家芸であるだけに、ややもするとプグリエセのコピーに陥ってしまうが、ここではそういうことは無く、それでいてプグリエセ・スタイルの特徴をよくつかんだ編曲と演奏であった。2月に聴いたコロルタンゴに優るとも劣らない出来栄であった。この演奏をロベルト・アルバレスに一度聴かせてみたいと思った。

小松真知子さんのピアノは言うに及ばず、バンドネオン陣、バイオリン陣、それにベースとギターも力のこもった演奏であった。特に吉田 篤のビルトゥオーソ・スタイルのバイオリンは見事であったと思う。当初の計画の変更により急遽出演となったHiroshi & Kyokoも優雅なサロン・ダンスを披露してくれて、アクロバティック過剰なステージ・ダンスよりも好感をもって観ることができた。

若干注文をつけるとすれば、フォルクローレの2曲、「ある古い歌の伝説」と「巡礼」、は私の知らない曲で、少しわかり難かった。それにフォルクローレはやはり歌が入らなければと思った。これに加えてもう2、3曲位は歌のタンゴが入ればよいと思ったが、歌手の人选やプラクティスのための日程の調整など問題は多そうである。

この楽団は、最近ではコンチネンタル・タンゴの演奏にも力を入れており、チケットの売れ行きも良いと聞いている。それはそれで結構な事で、そうした活動がタンゴ・ファンの一層の拡大につながることを願っている。

東京・春・音楽祭  
—東京のオペラの森2011—  
Spring Festival in Tokyo - Tokyo Opera No Mori 2011 -

### アルゼンチン・タンゴの夕べ ～哀愁漂うタンゴの名曲を集めて

4.1 [金] 19:00  
東京文化会館 小ホール

小松真知子&タンゴクリスタル  
ピアノ:小松真知子  
バンドネオン:早川 純、鈴木崇朗  
ヴァイオリン:吉田 篤、宮越建政  
コントラバス:田辺和弘  
ギター、編曲:小松 勝  
ダンス:Hiroshi & Kyoko



# Espiritu de Tango

(タンゴの精霊)

古橋 ユキ



Bs.As.での4年間に亘る演奏活動で得た最も大切な宝…それは演奏家として長い時間を生き、タンゴの時代を自ら築いてきた本物のマエストロ達の音色をま近で感じ、人生を語ってもらい、生きる為、そして演奏する為の様々な知恵と真理を教えてもらった事である。若き日のロマンスやタンゴ人生の逸話、幼少期の思い出、そして演奏家の生活の中での怒りやトラブルを、東洋人で世代もかけ離れた私に聞かせてくれた。私が彼らの生活に突然飛び込んできた石ころの様な相手でも、タンゴを介した信頼関係・絆というものが、そうさせてくれたのだと自負している。価値ある経験だった。幸せな日々だった。

初めの頃は、外国人の私のタンゴが上手になりたい気持ちや、彼らへの敬意をどうしたら理解して貰えるのだろうと躍起になっていた。が、次第にそれが全くの徒労だったと分かった。マエストロ達にとっては 私にはタンゴが一番大切な事も、アルゼンチンの人のように演奏したいからBsに來た事も、今さら話すまでもなく至極当たり前の事なのだ。乞わずとも必要な時に手を差し伸べ、ヒントと機会を与えてくれる洞察力と思いやりに長けた人達だった。「タンゴを弾くならユキ、Bsにず〜っといなくちゃ!」。

Bs.As.には演奏者同士、また観客も一体になって、詞をメロディーをリズムを味わいつくそうという<常識>がある。だから自分が出した音には必ず誰かの何らかの反応があった。演奏家として一番幸せなのはみんなと口々に「なんて素晴らしいんだ!タンゴは」と熱い興奮に包まれて抱擁を交わしながらステージから降りて来る時だった。誇りさえ感じる瞬間だった。これが私にとってのブエノスアイレスだった。

ハイパーインフレのトラブルだらけの暮らしの中、皆が智恵を振り絞って必死に生き、怒りや喜びを爆発させながらの毎日。彼らは知っていたのだ…外国人は、アウストラルを稼ぎ、この国の人々と同じ経済土俵で暮らす様になって初めて、彼らが、タンゴを本当に理解できるようになるのだという事を。

## <サンテルモ>

渡垂して間もない1988年5月。ビエホ・アルマセンに出演していたO. バレンテ楽団に参加することになった。インデペンデンシア側の緑の130センチ位しかない小さな緑色の出演者用の出入口を潜る時、過去の有名な演奏家達も楽器を抱えた大きな体を縮めてここを出入りしていたのだと思うと、ぞくぞくした。薄暗い店内にはタンゴの魔物が蠢いているようで、待ち時間2階のバルコニーからステージを眺めている時など、壁や椅子に染み込んだトロ



1988年7月、ビエホ・アルマセンにて  
O. バレンテとそのオルケスタ



イロヤリペロをはじめ、この場所でタンゲロ達が燃焼させたエネルギーや、彼らの魂がそこら中をうろうろしているそんな特別な気配がここにはあった。

何日かするとバレンテが、ラ・クンパルシータのソロを書いて来てくれた。私は酷く緊張して、狭い楽屋のトイレを陣取って毎日出番間際まで練習していた。ネリー・バスケスもダンサー達も苦笑いしながら「今日は成功だったわね」とか「今日は緊張してたでしょ」とか毎日力強く声をかけてくれた。(このソロが噂となり、お陰でBsでの活動の機会があつという間に広がったのだ。)

ネリーは、バッファ4toでMarenaやUnoを歌っていた。にこやかにスターの輝きを振りまいて出て行った時とは別人のように、ステージから戻ってくる時は、バンドや喫煙家の客に聞えよがしのすさまじい悪態をつきながら階段を登ってきた。「今日はバンドの譜面を覗き込んでやったわ！あんな譜面で私の伴奏をやっていたのね！○×▲\*#・・・！」口の悪さではタンゴ界No.1のネリーのお陰でBs独特の悪い言葉の習慣をあつという間にマスターした。膝がくっ付きそうな楽屋での毎日が本当に懐かしい。また隣の男性楽屋ではバッファとポDESTAやエンソ・ヴァレンティーノ達がマフィアやマレーボの衣装で葉巻をくわえ、煙の中で眉間を寄せてトランプに興じているのが見えると、20C初頭に迷い込んだようだった。セステートタンゴではルジェロもプラサも健在だった。今思うとあの20世紀末、あそこには正真正銘の昔のタンゴの精神がまだ確かに息づいていた。

### <体感するタンゴ>



1990年8月 コランジェロ楽団とピエホ・アルマセンにて

バレンテ楽団・コランジェロ楽団・ベリンジェリ楽団での演奏・・・圧倒されたのは体で感じるスピード感と音圧。そこでは置いてきぼりにされないように必死だった。音が渦巻き怒涛となったかと思うと、一転ロマンティックなピアノソロを経て、バリエーションへなだれ込んでいく。スペースマウンテンみたいだ。深さ・重さ・粘り・方向・角度・・・タンゴのリズムとは何と多様で、表情豊かな事か！ハーモニーの色が青く静かに光ったり、感触・エネルギーがじわじわと赤黒く熱を帯びていき、七色にはじけ、火の粉を散らして白熱してい

く実感。息も出来ないような興奮だった。タンゴは体の（五感）全てで体感すべきもの、そして張り巡らしたアンテナ（第六感）で気配を探りながら、絶妙にタイミングを計り、音を遊ばせながら、絡みあって行くコミュニケーションの場。ネコ科の動物の様な柔軟性と瞬発力と機敏さ、そして気配を自由自在にコントロールする集中力が求められる、実にスリルあふれた現場であった。

### <タンゴへの傾倒>

その後もミケランジェロ、カサブランカ、ラ・ベンタナといったタンゴスポット、ドラゴネのカルテート、バシルのピリョ・・・アントニオ・アグリ弦楽オーケストラ・・・後から後から演奏の機会が訪れた。翌年の2月には、アベジャネーダ市立タンゴオーケストラの保証でワーキングビザが得られ手続きも終わる。コロソ劇場の前コンサートマスター、ドン・スークリ（来日時、病気になったフランチェニの代役を務めた人だが、タンゴもタンゲロも心底嫌悪していた頑固爺だった）のクラシックのレッスンに毎日郊外まで通い、ロングトーンと音階のみが何か月も続いた。72歳のエジ

プト出身のこのマエストロの生き様と音色は壮絶で、演奏家の音楽と人生のかかわりがそれまで日本で考えていたのとは何か大きく違う気がした。厳しいレッスンのお陰でコロソ劇場にも入団できた。またコロソからのスイス留学も実現したが、皮肉にもクラシックの殿堂に踏み込むほどに自分のタンゴ性を確信する結果になった。当時一緒に演奏していたニコラス・パラシーノが言った。「ふん、何しにスイスに行くんだよ。お前さんはまたすぐタンゴを弾きにもどってくるさ！」全くその通りだった。

### <アントニオ・アグリ>

アントニオ・アグリは、長い腕と大きな手で大きな流れるようなゼスチャーを交えながら、印象的な声で話し始めた。「セニョリータジュキ（ユキ）、タンゴは教えられるものでも教わるものでもなく、盗むものなんだ。私自身、自分がどうやってバイオリンを奏でているのか分からないんだから。タンゴは仕事しながら盗み、覚えていくものなんだ。みんなそうやって学んできた」当初私は、面倒臭くてそんな風に言うのだと思っていたが、実際タンゴ（音楽）とはそういうものだ、という事がだんだん分かるようになった。その後、弦楽アンサンブルのメンバーに加わり、ショーやテレビへの出演が増えた。毎晩、アグリやブラガートのどんなソロフレーズが繰り広げられるのかが楽しみだった。ほとんどアカデミックなバイオリン教育を受けていないアグリ天性のすごさを否定する人は誰もいなかった。「アントニオは弓を手に紐で括り付けようが、左右逆に構えようが同じように素晴らしい音色で弾くだろう」と真面目腐って話していた。天才をヘーニョというが、アグリの場合Tiene angel（天使がついている）というのが相応しい気がした。人を圧倒するのではなく、魅了する音色。メンバーは殆どが口うるさいコロソ劇場のプレーヤー。アグリは偏屈ぶりには度々みな辟易としていたが、アグリはバイオリンに心奪われない者はいなかった。（<華のある演奏>はそのものズバリTiene Florだ）

### <タンゴバイオリン族の葛藤>

Bs.As.のタンゴ界は保守的で、頑固者揃いだった。S.パスの事は上手いがジブシー調だ…と皆が思っていた。そこにはタンゴとジブシーものは違うのだ！という強いこだわりがあった。Bsのバイオリン族というのはクラシック音楽出身、というエリート意識が根強くある。だからタンゴ社会の中で、バンドネオン族へのひがみや不快感を露骨に表わす者が思いのほか多いのを知った時は驚いた。アグリでさえそういうところがあった。タンゴを弾いている以上音量ではバンドネオンにもピアノにもかなわない。マイクを使えばほぼ100%自分の不本意な音色にされてしまう。アグリがピアソラ楽団を辞めたのもそのあたりにあったらしい。ゴビのようにバイオリンで過剰に自己アピールせずとも、アレンジャーとして自分のタンゴを楽団のサウンドそのものに投影できれば理想的だが、そうでない場合は折り合いの付け方が大変だ。

バンドネオニスタの中には、例えば、カチョ・ジャニーニやラサリなどのようにクラシック音楽の話題を好んでしたし、とんでもなく専門的だった人たちがいたのは驚きだった。<良い演奏家である前に、良い音楽家でなければならない>という鉄則が、タンゴ畑にも浸透していた。アルゼンチンのタンゴ屋は下品でお調子者で馬鹿ばかり…と思っている日本人は少なくないだろうが、ステージで気障に弾いているばかりが本当の姿ではないのだ。知的で哲学的な人も沢山おられる。

アグリは晩年、モサリーニと共に何度か来日した。最期にピアソラキントの形でアグリは演奏を聴けたのは大変幸せだった。全盛期のような隙のない演奏ではなかったが、鬼気迫る音色であった。演奏が終わり、ステージから降りてきたアグリは大変興奮した様子で「今夜はとても特別なステージだった！ほら！」と私の手を握った。こんな手でどうやって弾いていたのだろう！と、驚くほど氷



マエストロ・アグリと カサブランカにて  
1990年2月

のように冷たくてじっとりと汗ばんだ手だった。ピアソラとの共演の葛藤の記憶を追っていたのだろうか、ステージの上でアグリが感じていた感動…私にはとても思いが及ばないが、演奏家の生々しさに触れた思いだった。

数日後「どうしてもお前にタンゴについて教えておきたいことだある」と呼ばれた。一体どうしたというのだろうか？ 行ってみると自分が癌であると打ち明けた後、それから3時間、ゴルペにチチャーラ、歌いながら弾きながら次から次へとアグリは一人で弾いてしゃべり続けたのであった。「タンゴはDecir

語るもの、Sentir感じるもの。時に演奏は Quedar立ち止まり、そして、Caminar歩き始め、たえず同じ進み方をしないのだ。小節線を忘れるんだ。リズム切りは決して荒々しくなることはなく、ごく弓の付け根で美しくエレガントに愛らしく刻む。音というのはワ〜ワ〜鳴らすより、Esconder隠したり Guardar出し惜しみすると人の注意を喚起できる。狡賢くなって音楽を遊ばせるんだ・・・ Hay que tocar y tocar y seguir y busca…見つけ出すには弾いて弾いて一生弾き続けるしか方法は無いんだよ…」。アグリという体を通じてタンゴの精霊がそこにいた。

### <変わりゆくアンビエンテ>

2004年9月「おいユキ。また一緒に弾きに来ないかい？<新・グランデス・バローレス・デル・タンゴ>の収録はバレンテ楽団が任されたんだよ」バレンテが電話をくれた。次回はビエホアルマセンでの収録と言う。懐かしいサンテルモの街でまた弾けるなんて！ 収録日を心待ちにした。



ビルヒニア・ルーケと 1990年12月 カナル9  
ロス・グランデス・バローレス・デ・タンゴ  
収録

その日「晴れやかな顔だね」ガルシアがそうにこやかに言って、キッチンから見送ってくれた。「心配するから帰りがけにアマリアに電話しておくれよ」。ビエホアルマセンは、ガルシアとフェレルとリベロが3人で創立した。先日アマリア夫人からその当時のことを聞いたばかりだった。「マエストロはそこをかうために、私の持参金を当てにしててね、契約書を交わす時には私の肩をこの上なく優しく抱いて連れて行ったものよ」。アメリカナイズされたカサブランカや他の大きなタンゴショーの店と違うのは、創立者3人の共通したアルゼンチン文化への造詣の深さと、思い入れがここに凝縮されたものだったからだ。

アルゼンチン人のアイデンティティ…カンポの匂い、草原にぼつんと立つアルマセンの暖かさ、親密さ、それがこの「ビエホアルマセン」当初の精神だったのだ。そしてタンゴへの愛情に溢れた場所、演奏家達の演奏する為の場所だった。

久しぶりのビエホアルマセンには、時代の変化を思い知らされた。かつては薄汚れた感じが調和していた壁は風景画がとって変わり、他のお店と同じように外貨を稼ぐ為のただの箱になっていたのだ。

譜面台は無い、ピアノも偽物。次々現れる歌手は素人の様な怪しい奴ばかり。Cメロ譜で伴奏するのは日本のシャンソンバンドだけかと思っていたが、驚いた事にCメロ譜のオンパレード。時には突然転調してくれと言い始める。本番収録中なんだぜ！タンゴをCメロで弾くなど以前のブエノスにはありえなかった事だ。この店でまた会うのを楽しみにしていたタンゴの妖怪たちの気配も、すっかり蹴散らされて、今やビエホアルマセンは抜け殻のように感じられた。

### <ガルシアの言葉>

アマリア夫人の計らいで始まったカルロス・ガルシア宅での滞在。このお二人にこそ「タンゴの品格・美意識・価値観という最も大事な概念」を教えられた。マエストロ邸での“セミナー”は早朝のキッチンでマテや朝刊を片手に、というのがお決まりになっていった。起きたての寝巻のままのタンゴ文化論談義、誠に不思議な体験だった！

「難しいものを弾く事、見せる事を目的としてはいけない。タンゴというのは自分を見せびらかす為の手段ではないのだから」「演奏とは他者との比較ではない。そうでなければ、私も心穏やかには演奏してられなくなってしまふよ。自分の演奏をする事が大事なのだ」「沈黙に勝る音はない。シレンシオ（物理的な静けさと同時に音楽的な静けさの意）こそが人に与える平安の意味と価値を悟れ」「優れた技術は大切だ。しかし人を圧倒する事はできても感動させるのは技術ではない。千の難しい音列より、心あるワンフレーズに人は感動したいのだ」「No hace falta hacer miles notas.Hay que tocar lindo」「タンゴは決して消えないと信じている、なぜならそこには時代は変わっても永遠に変わることが無い人間の感情・心の真実が表現されているからだ」「音楽とは、全てがエレガントで吟味されつくしたものであるべきだ」「小さな音で練習する、注意深さが鍛えられるからね。良質の練習が大事だ」「優れたタンゴをきくと、リズム・音の一つ一つ全てに意味があり、無駄なもの粗雑なもの一つもない。

### <タンゴはとても特別な音楽>

ある時、ニチューレヤスコルティカティ、ダレッサンドロ長老たちが休憩時間に集まった時の事だ。「タンゴは誰もがすぐに飛びつくことのできないところがある。音楽に対する感受性がある程度準備されたものでなければ聴けない音楽なのだ。今の若い者は、すぐ安易に弾きたがる。しかしそんなに簡単なものではないのだ。楽譜に書いてあるのはやるべきことの20%。我々のやっている音楽は大変、複雑で難しいものなのだ。ましてメトロノームで割り切れない高度なアンサンブルなのだ。Tango es muy especial!」技術的にも、精神的にも、芸術的にも、非常に高い、しかしながら巧妙きわまるカモフラージュで、親しみやすくセクシーで派手で、軽薄さすら装ってみせるタンゴを、ファッション感覚でつまみ食いする人もいるが、その本質に気付かないまま通り過ぎる人は少なくない。タンゴは繊細な感性と、想像力と洞察力に富んだ魂にのみ享受されるものなのである。」

何故タンゴは若いリスナーが増えないんでしょうね～とぼやいていた都内のライブハウスのオーナーに聞かせてやりたい言葉だ。



マエストロ・カルロス・ガルシアと  
2005年9月

## <El Camino>

マエストロ達と交わした言葉は、突然ふっと浮かんではヒントを与え続けてくれている。マエストロ達は一様に「タンゴとは人生と時間（日々の鍛練は当然ながら）の積み重ねによって、表現出来るようになる」と話していた。その言葉が最近ようやく心に浸みってくるようになった。かつて憧れだった音色やニュアンスがいつの間にか自分のものになっていた、と感じる時ほど嬉しいものは無い。最近ようやく、演奏というものは、自分が準備したものを人前でさらすというのではなく、自分を無にした時、初めて助けてくれる<何らかの力>を借りて演奏すべきものなのだと感じるようになった。その<何か>がタンゴの精霊Espiritu de tangoなのかもしれない。何か大きな存在に身を委ねて演奏する心地よさが少し分かるようになってきた。いつか、ほんの僅かのタンギートをシンプルにおおらかに、見栄も躊躇いもなく、自分の“言葉”で語れるようになる日が待ち遠しい。

近年嬉しい事があった。Bs在住のアメリカ人のバイオリストが話してくれた。ネグロ・ロドリゲスにこう言われたそうだ。

「ユキは自分のスタイルがあった。お前さんもそれを早く見つけるんだな」。

以上



ネリー・バスケスと 1990年8月  
ビエホ・アルマセンにて



マエストロ・モンテスとマエストロ・サルガンと  
2004年9月



アリアスーモンテスと Casa de la cultura Salon doradoにて 2004年9月

## 全国リレー随想（8）

# 「タン御縁」を楽しんでいます

中村 明（川崎市）

### ■「鐘」に魅せられて：

四十年余の会社生活から離れ、十五年目に入り、かなり生活環境も変わって来ています。楽しみの一つにNHKの朝のテレビ小説があります。現在、放映されている「おひさま」。時代背景が小学校（当時は国民学校）時代と重なるので、興味深い映像が次々に現れます。「金属供出」、主人公の陽子さんが愛用している自転車を、お国の為に手放す光景を見て、往時の情景が甦って来ました。

千葉県の寒村で暮らしていた時代。夕方になると、遠くから流れてくるお寺の鐘の音に促され、「夕やけ小やけ」を歌いながら家路に。懐かしい光景の一コマです。

昭和十八年の夏休み前頃だったと思います。

そのお寺の鐘が真っ白な晒しに包まれ、国旗をタスキ掛けに、校庭に運ばれて来ました。校長先生から「この鐘はお国の為に出征する」とのお話があり、萬歳三唱。牛車に固定され、全校生徒が見送りました。

鐘の音が消えた後に来たのは、米国空軍の爆音でした。東京空襲の後、この編隊は銚子沖に出て帰還する。そのルートに、我々の村は位置していた様で、昭和二十年になると、被曝はしませんでした。日々、轟音に悩まされました。

供出された鐘は、どうなったのだろうか、仲間と時々話しましたが、アツと言う間の終戦。鐘の音が妙に記憶に残りました。

昭和二十二年からのラジオ放送「鐘の鳴る丘」で歌われた「とんがり帽子」を聞き、以降、鐘をテーマにした歌謡曲「長崎の鐘」「フランチェスカの鐘」「ニコライの鐘」「チャペルの鐘」等を楽しみました。

### ■「メルセ寺院の鐘」：

学生生活・最後の四年間（昭和28年～32年）の楽しみは映画でした。「グレン・ミラー物語」を見て感激。



同年の従兄弟と一緒に新宿のコタニレコード楽器店に行き、この楽団のレコードを視聴、購入。係の方に、鐘に関係するレコードの有無を訊ねました。発売間もないと紹介された盤がクリストバル・エレーロ楽団の「カリジョン・デ・ラ・メルセ」でした。感激・即購入。帰宅し、何回となく聴き、楽しみました。アルゼンチン・タンゴの世界に意識して触れた最初の曲でした。

以降、民間放送の公開録音、喫茶店へ頻繁に通い、タンゴに接し、楽しい時間を過しました。御徒町の金馬車にも行きましたが、新宿のラ・セーヌには、前述の従兄弟と良く行きました。生演奏も勿論ですが、オルケスタ・ティピカ・コリエンテスのマエストロ・小沢 泰さんの客席と交歓する軽妙な司会も魅力でした。

昭和三十六年のフランシスコ・カナロ楽団の新宿コマ劇場の公演以降、来日するアルゼンチンのオルケスタのコンサートには、出来るだけ行く様に心掛けましたが、昭和四十年を境に、仕事優先の環境が到来。私的な楽しみは二の次となりました。

## ■専らエアチェック：

幸いなことに、昭和四十年代はアルゼンチン・タンゴを中心に中南米音楽をNHKは定期的に放送していました。毎週発行の「週刊FM」をチェックし、この番組を録音。週末に楽しむ生活が続きました。

スペイン国との合弁事業に携わったことから、昭和五十一年～五十四年の三年間、マドリッドに駐在した時に、録音したカセットテープを持参。現地で、大岩祥浩先生のタンゴ名曲辞典を中心に名解説を楽しみました。

在西中、一度だけ、アルゼンチン・タンゴのコンサートに行きました。スサーナ・リナルディさんの出演でした。会場は閑散としており、出演の方々にはお気の毒でしたが、そのお蔭で、リナルディさんから「日本人？」等の声がかかり、一瞬の嬉しい交歓が実現しました。

帰国後、昭和五十年代中頃から六十年代前半にかけての時期の業務は繁忙を極めたことから、相変わらずカセットテープが唯一のタンゴとの接点でした。

この環境に激変をもたらしたのは、ネットワークの世界でした。

仕事の話になり恐縮ですが、昭和六十二年の夏から、ネットワーク・プロジェクトを担当しました。当時は、インターネットのサービスが出現する前で、パソコン通信と言われた時代です。私に関ったNIFTY-Serveには、同じ趣味、同じ研究に携わっておられる同好者の方々のネットワーク環境を利用したの集まりがありました。会員の皆さんが様々な意見交換を行われる「フォーラム」というサービスで、非常な盛り上がりを見せていました。

この方々は、時々ネットワークと言うバーチャルな世界を離れて、現実集う動きを頻繁にされていきました。この会合をオンラインのネットワークから離れてのオフライン、オフ会と呼び、私も多くのオフ会に参加していました。

同好の士だけの集まりではなく、ネットワークの世界を利用されている全員が集う会を開こうとの機運が高まり、Networkers Japan'95と銘打ったイベントが、みなとみらい21のパシフィコ横浜で開かれました。翌年の平成八年も、このイベントは開催されました。

## ■Networkers Japan'96 :

盛夏の八月、前述のフォーラムに関係される五万余人の方々が集われ、大変な熱気でした。百二十余のブースの中に、「ポピュラー音楽」のフォーラムがあり、事務局担当の一員として、ご挨拶に行った時に、お会いした方は、歌手・作家と多面的に活動されておられる八木啓代さんでした。八木さんのお蔭で、久々にアルゼンチン・タンゴの世界が身近になりました。

九月のオフ会に来ないかとのお誘いを受け、十四日の午後、高田馬場へ。そして、場所を提供されたT家に16名が集いました。八木さんが参加者全員を紹介。

ネットワークの中での活動は、本名ではなく、それぞれハンドルネームと言うペンネームに類する名前を使われている方々です。アナリスタンゴの名前で活動されていた方が、石川浩司さんでした。この日の会合は六時過ぎに終わりましたが、二次会となり、深更まで続きました。

私が参加した二回目のオフ会は、石川浩司さんのお宅での開催でした。ホストの石川さん、八木さん、「アストル・ピアソラ闘うタンゴ」の著者・斎藤充正さん、ギタリストの飯泉昌宏さん等、11名の方々が参加。その日の会のテーマは「ラテン・タンゴのルーツ検証」。石川さん所有の音源、映像、資料等を通じて、皆さんの白熱した議論は、杯を重ねながら、七時過ぎまで続きました。

ネットワークを介して、タンゴがご縁で、多くの方とのお付き合いが広がり始めました。

## ■石川浩司さんとの交流 :

平成六年秋のオフ会で石川さんとの交流がスタート。同じ小田急線沿線に住んでいる環境から、お会いする機会が、時々あり、色々なご案内を頂きました。

- SEMI月例会への参加：平成九年の夏から自由の身になったこともあり、当時、赤坂で開かれていた当会のご紹介を受け、時間の許す限り、参加しました。コメンテータの方々の蘊蓄に富んだお話と名曲の数々を楽しみました。オフ会でお会いしていたアカデミーの会員でもあった宮崎昭八さんも参加されており、閉会后、赤坂で乾杯、交歓。宮崎さんはホルヘ・的場さんと親しかった模様で、そのお話も興味深いものがありました。
- タンゴ・アカデミー発足のお話も、石川さんからでした。お蔭で、創立総会時から入会し、勉強させて頂いています。
- 私事になりますが、会社から離れた後、無為に過す時間を少なくする為、スペイン駐在時代に或る程度習得したスペイン語の維持を目的に、スペイン語の学校Academia Castillaへの通学を始めました。石川さんに、この話をした所、ご自身も、この学校に入られ、私とは別のクラスで勉学に勤しんでおられました。
- 「タンゴの部屋・視聴室」の会を、恵比寿のNNビルで開くとのことのお話を頂き、早速参加しました。



リクエストで、各オーケストラのテーマ音楽を聴かせて欲しいとの要望にも即応して頂きました。

## ■メルセ寺院へ：

通っているスペイン語の学校主催のスペイン語圏への研修旅行が年中行事としてあります。平成十三年はアルゼンチン、チリ、ペルーへの旅でした。

ブエノスアイレスで数日過ごした後、十一月二十八日午前八時半、一泊したアルゼンチンのメンドーサのバス発着場・国際線ターミナルを出発。陸路、国境を越え、アンデス山脈の高速道路を、一路チリのサンティアゴに向かいました。残雪の山々、紺碧の空等の景観を楽しみながら、午後三時にサンティアゴ着。一旦、ホテルへ。荷物を部屋に。そして、石川さん、畏友・泉谷さんのお二人のアドバイス通り、市の中心・アロマス広場に向かいました。驚いた事に、この広場の周囲には多数の聖堂、寺院、教会があるのです。三つほど廻りましたが、目的の寺院ではありません。広場に戻り、思案していると、上品な老人の呼びかけがありました。同行の女性に「この辺は物騒だから、ネックレスを外さない」との注意でした。彼にメルセ寺院の場所を訊ねたところ、幸運でした。ディセポロの事も知っておられ、早速道順を教えて下さったのです。小走りに目的の寺院へ。午後七時過ぎ、念願のメルセ寺院に入りました。折から夕べのお祈りの時間。尼僧の祈祷文朗読を聞きながら、静かに院内を周遊し、長年の念願を果たしました。



メルセ寺院正面（左）と内部（右）

翌日、広場近くの大きな書店へ行き、メルセ寺院関係の資料の有無を訊ねました。単独の案内書はないが、サンティアゴ市内の教会を纏めた書籍はあるとのことで、これを購入。“14 Iglesias de Santiago de Chile”と言う美しい書籍で、その中に“Basilica de la Merced”の写真と記述があり、嬉しかったです。

## ■マルタの日本海軍墓地参拝：

毎年、十名前後の仲間と連れ立って、旅をしています。平成十六年五月に、シチリア、マルタの旅をする話を石川さんにしたところ、日本海軍の慰霊碑の話になりました。

第一次世界大戦時、連合国側に属していた日本の駆逐艦隊が地中海に出撃。当時、制海権を握っていたドイツの潜水艦Uボートを殲滅し、壊滅的だった英仏艦隊、輸送船隊を救ったとの史実でした。勝利を取めた艦隊の中、一隻が撃沈され、その英霊がマルタのイギリス海軍の墓地に眠っている。時

間に余裕があれば参拝してはとの石川さんの助言でした。当時、海軍の指導的立場に石川さんのご親戚が居られたことからのお話に心が動かされました。

五月五日、端午の節句の日にイギリス海軍墓地へ。事情を入門時に話し、慰霊碑を見つけました。日本から持参した鯉のぼりを掲げ、同行の仲間全員が焼香、英霊のご冥福をお祈りしました。

石川さんとの交流から生まれた様々な「タン御縁」。枚挙の暇がありません。

## ■大岩 祥浩先生：

タンゴ・アカデミーに入会しての喜びの一つは、四分の一世紀以上、愛聴していたテープの声の主、大岩先生に身近にお会いできたことです。

その大岩先生から、ポルテニヤ音楽同好会に来ないか…とのお誘いを受けたのは、平成十三年一月の「リンコン・デ・タンゴ」の会場・六本木のトロピカーナの席でした。「あなたの会社の人も来ていますよ」と言うお話。先生の奥様と絵画制作のグループで一緒の川野先輩でした。久しくご無沙汰していた先輩との再会・交流も、先生のお蔭で復活しました。AMPの月例会にも早速参加。

SP主体の毎月のコンサート。数々の名曲も勿論ですが、先生の解説と時宜に即したお話が、毎回、大変楽しみでした。

AMPタンゴ・コレクションの復刻CDの定期的な頒布も貴重でした。それぞれのCDの解説は、斯界の先達の方々が担当されておられ、これも色々勉強になりました。

## ■小林 謙一さんとの交流：

AMPの月例会で「メルセ寺院の鐘」が取り上げられ時のことです。前方の席に居られた小林さんが、曲に合わせて口遊んでおられ、嬉しくなりました。後日、このお話をし、早速、小林さん主催の横浜プーロ・タンゴ同好会に、入会。以降、この月例会に参加し、楽しい時間を過ごしています。



横浜プーロタンゴ同好会例会後の大岩祥浩・千鶴子ご夫妻を囲んでの食事会（筆者後列右から2人目）

この会の常連・山口悌二郎さん（以前、タンゴ・アカデミー会員）とのお付き合いも生まれ、丹沢散策、蕎麦屋探訪等をご一緒にしています。

## ■フォルクローレ同好の方々との交流：

石川さんの「タンゴの部屋」に参加していた時、その場所を提供されているNNスタジオのオーナー・中西さんに中南米音楽の同好会の有無をお訊ねしたところ、即「CAMLA」の紹介を頂き、爾来、この

月例会に参加。スペイン語の勉強も兼ねて、フォルクローレの世界を楽しんでいます。

### ■鎮魂の鐘：

仲間との旅。今年は五月上旬にウクライナの周遊でした。原発事故発生後、二十五周年。首都キエフにあるチェルノブイリ博物館の展示の全ては、この原発関連。事前に見学の申し込みをしておいた関係もあり、係員が我々を先導、懇切な説明を受けること出来、改めて、その恐ろしさを実感しました。

入館する門の壁に慰霊の像。その両脇に、鎮魂の鐘が一对、掛けられていました。故郷を後にして召されて行ったお寺の鐘、メルセ寺院の鐘。これからの旅も、様々な鐘との出会い、その由来を訪ねて行きたいとの思いを新たにしました。

仕事から離れると、往々にして交友範囲が狭くなるとの話を聞きますが、タンゴの御縁で、新しいコミュニティが生まれ、充実した日々を送っています。拙い文章にお付き合い頂き、有難うございました。

次回の全国リレー随想は小樽市の加藤光夫氏にバトンタッチします。

## 会 告

N T A 主催のミロンガ・パーティーが10月9日（日）、原宿茶々苑（原宿クリスティーのすぐ近く）で午後4時から午後7時まで、開催する予定です。ダンスを楽しむ人もタンゴを聴くだけの人も共に楽しめるようなパーティーを企画しております。会費は ¥3,000 です。



# 追悼～マエストロ・エミリオ・バルカルセ

Para siempre . . . Maestro Emilio Balcarce

高場 将美  
Masami Takaba

作曲家で、国立タンゴ学校オーケストラ Orquesta Escuela de Tangoの指揮者だったマエストロ、エミリオ・バルカルセ Emilio Balcarce が、2011年1月19日にこの世を去っていたことを、最近知った。(どうでもいいことだが、わたしの誕生日だ)。

バルカルセというと、わたしがまず思い出すのは、あの、まじめなのにどこかトボケている、あたたかい顔、やはりあたたかい、おだやかな抑揚に乗ってたくさんのことばが流れるおしゃべりの声である。あの話しかたは、ブエノスアイレス人の典型のひとつであると同時に、バルカルセ個人の特徴にあふれたものだった。

今から46年前の秋も深まろうというころ、わたしは東北地方の旅館の手洗い所で、頭の上から降ってくるバルカルセの声を聞いた。床がタイル張りで、木のサンダルにはきかえて入る共同お手洗い—個室の戸は、木製で、下側は隙間がある。上は天井はなく、声も音も突き抜けだ。そして、よくひびく！

わたしたちは、全国公演中のプグリエーセ楽団御一行様だった。あまり時間に追われていない朝だった。肌寒かった。個室にしゃがんでいるわたしに、だれかメンバーの声が聞こえてきた。手を洗いながら話しているらしい。

「おい、エミリオ。さっき、ずいぶん長く、うなっていたな。腹の調子でも悪いのか？」

「いや、いま考えているアレンジの、ハーモニーを変えてみたくなってね。うたって試していたら、熱中して長くなったんだ」

日本公演は、どこも満員だったが、「もっと、だれでも知っているポピュラーな曲を」という要望は常にあり、そのため『パリのカナロ Canaro en París』をレパートリーに加えることになって、バルカルセが編曲担当者に任命されたのだった。えらく凝った室内楽アレンジで、そんなことしたら有名曲をやる意味はないと思うが……。

もうひとつ、1965年の日本でのバルカルセで、わたしが鮮明に覚えているのは、浴衣を着て(外国人は靴下はぬがない)、バンドネオンを弾いていた姿である。まだ残暑きびしい気候だった。

これも、日本でより多くのお客に受けるために、タンゴ以外のリズムも入れようという考えから来たことだった。日本側の要求ではなかった。以前の中国公演で(まったくタンゴ不毛の地である)不評だった単調さを、日本でまた言われないように、プグリエーセ楽団の側でもいろいろ考えていたのである。バルカルセは、彼が作曲した『白いカンドンベ Candombe blanco』を、プログラムのヴァリエティをつけるために売り込もうとしていたのである。

「このリズムは受けるぞ！」と、バルカルセは、旅館の廊下の片隅に座布団を重ねて座り、足を投げ出してバンドネオンを弾き、自分でうたって、歌手アベル・コルドバ Abel Córdobaに教えていた。

プグリエーセ楽団は協同組合制で、少なくとも週1回は開かれる、メンバー全員の会議ですべてが決定される。結局 この曲は会議で賛同を得られず、日本では演奏されなかった。

わたしは、バルカルセがすばらしい作曲家・アレンジャーであること、当時のプグリエーセ楽団では第2ヴァイオリンを弾いていることは、よくわかっていたが、バンドネオンを弾けるなんて知らなかった。すごくダラシない格好で、ちゃんと演奏するのにも驚いた。

エミリオ・バルカルセは、1918年2月22日に、ブエノスアイレスの、いわゆる場末で生まれた。父親はイタリア人で、ギターやマンドリンを持って移民してきた音楽好きだった。エミリオは6才のころから、先生についてヴァイオリンを習わされていたが、8～9才でラジオから流れるタンゴを聴いてほんとうに音楽好きになった。その後、バンドネオンを手にして、独学で弾けるようになった。さらにその後、フランチーニ Enrique M. Franciniやポンティエール Armando Pontierなどの、少年時代の指導者だったクラシック作曲家のエレル Juan Elbertほか、最高級の音楽教授にも学んだ。(日本では、「師事」ということばを使うが、スペイン語では「〇〇先生とともに(音楽を)研究」という。自分で研究するのを先生がみちびいてくれるのだ)

20才のころからプロのタンゴ音楽家となったバルカルセは、自身で(バンドネオンを弾いて)オーケスタやグループをひきいたこともあったが、いずれも短期間だった。それよりも、歌手の伴奏オーケスタの編曲・指揮者(ステージではヴァイオリンを弾いていたと思う)として、タンゴ業界で有名になった。初録音は、1943年、アルベルト・カスティージョ Alberto Castilloの伴奏オーケスタだった。ほかの歌手では、アルベルト・マリーノ Alberto Marinoとのつながりが、断続的だが長い。その他、歌のバックのバルカルセのオーケスタの録音は、弦セクションのハーモニーのふくらみがすてきで、わたしはいつも、うっとりしてしまう。

1949年に、オスバルド・プグリエーセ Osvaldo Pugliese楽団に入った。この楽団の第1バンドネオンだったホルヘ・カルダーラ Jorge Caldaraが、編曲のできる音楽家を求めて、親友のピアニスト、カルロス・フィガーリ Carlos Figariにたずね、フィガーリがバルカルセを推薦したとのこと。この楽団ではバルカルセはヴァイオリンを弾いた。また彼の作品で、プグリエーセ好みの、リズムックな『ビエン・コンパードレ(すっかりヤクザっぽい) Bien Compadre』が、すぐにこの楽団で録音された。



作曲家バルカルセの最高傑作は(わたしのタンゴ名曲ベスト・スリーに入る!)『ラ・ボルドーナ La bordona』で、1956年発表。大草原のギターの低音弦のこだまが聞こえてくる静かな出だしは、当時のプグリエーセの好みに合わず、トロイロ Aníbal Troilo楽団が先に録音した。

でも、1963年にプグリエーセは、自分でも、草原の空気からはじまるタンゴ『アザミとゼラニウム Cardo y malvón』を作曲した。

これもわたしの大好きな曲だが、アレンジは、バルカルセが書いたそうだ。

1968年に、プグリエーセ楽団の中心メンバー（バルカルセも含む）が独立して《セステート・タンゴ Sexteto Tango》を結成。長い豊かな活動を展開する。このグループの自然消滅後は、バルカルセはアルゼンチン南部に家族と引っ越して、老後をのんびり過ごしていたらしい。

しかし、2000年に、若いコントラバス奏者イグナーシオ・バルチャウスキ Ignacio Varchauskyが、アルゼンチン文化庁を動かしてタンゴ学校オーケストラを設立させた。これは、アルゼンチンの誇る文化遺産である「1940年代のオルケスタ・ティピカ」というものを、現代に再現し、新しい世代に伝えていこうというプロジェクトだ。その編曲指揮者・指導者に選ばれたのが、エミリオ・バルカルセだった。バルカルセは現役に復帰、時には、若いころからの夢(?)を実現して、第1バンドネオン奏者・楽団リーダーにもなった。ただし、90才になった区切りの2008年に、完全に引退した。オーケストラは、彼の名前を残して、Orquesta Escuela de Tango Emilio Balcarce を正式名称として存続している（後任指揮者ネストル・マルコーニ Néstor Marconi）。

あと1ヶ月で93才というとき、バルカルセは逝ってしまった。華やかな人気者ではなかったが、作曲家・編曲家として、彼の音楽は、タンゴのいちばん高く、深い境地に達していた。

バルカルセさん、長いあいだ、ありがとうございました。



\*インターネットで、次の記事（スペイン語）は、アルゼンチン国立タンゴ・アカデミー第1副会長ガブリエール・ソリア Gabriel Soriaさんの執筆・制作で、晩年のバルカルセの、バンドネオンを弾きながらのインタビュー音源も収録されています。<http://tangocity.com/noticias/7618/.html>

## 原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、何でも結構ですから機関誌に執筆を検討されている方は是非とも編集部にご相談下さい。ご希望の執筆内容により編集部の判断により「タンゲアンド・エン・ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかを推奨します。「タンゲアンド・エン・ハポン」の次号の締め切りは11月末日、「タンゴランディア」は9月末日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。但し、あまりに長大な原稿は掲載できないことがあります。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ・アカデミーを代表するものではありません。掲載にあたっては執筆者の文章を（スペイン語のカタカナ表記も含めて）全面的に尊重しています。また当会機関誌は会員全員の参加による同人誌的性格を持っていますので執筆者には特に原稿料というものはお支払いしていません。

## 編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第28号をお届けします。今期は東日本大震災＋原発事故という未曾有の大災害がありましたが、お陰様で機関誌の発行には特段の差し支えは無く、多数の原稿のご執筆をいただいたことを改めてお礼申し上げます。なお次号（29号）はフランシスコ・カナロ来日公演50周年記念特集号を予定しています。皆様、振るってご投稿ください。

（齋藤 富士郎）

日本タンゴ・アカデミー主機関誌 **TANGUEANDO EN JAPON**

第28号 2011年7月発行（非売品）

発行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤 2-32-14-104

飯塚 久夫方

TEL/FAX 03-3324-1989 iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：齋藤 富士郎（編集長）

〒195-0072 東京都町田市金井 6-17-2

TEL/FAX 042-736-7445 f-saito@mjq.biglobe.ne.jp

島崎 長次郎、大澤 寛、弓田 綾子、佐藤 進

דה